青森県埋蔵文化財調査報告書　第594集

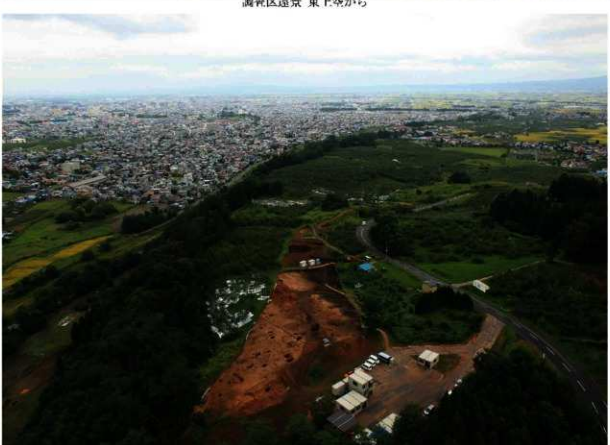
沢部（2）遺跡

―県営小栗山地区通作条件整備事業に伴う遺跡発掘調査報告―

２０１８年３月

青森県教育委員会

調査区遠景 東上空から



調査区遠景 南上空から

調査区南半部（左が北）

捨場 Ⅲ J77 付近 遺物出土状況 北東から

前期土器

中期土器

捨場 Ⅲ K77 岩偶 (229-2) 出土状況 東から

捨場 Ⅲ J77 アスファルト塊入土器 (184-4) 出土状況 北から

スケール等倍

捨場 Ⅲ J77 土器 (184-4) 内出土アスファルト塊

淡緑色の珪質頁岩製石器

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、県営小栗山地区通作条件整備事業予定地内に所在する沢部(1)遺跡・沢部(2)遺跡の発掘調査を平成27・28年度に実施しました。本報告書は、そのうち沢部(2)遺跡発掘調査の調査成果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代前～中期、また、古代の遺構や遺物が主に確認され、縄文時代と古代の複合遺跡であることがわかりました。縄文時代では多数の竪穴建物跡、フラスコ状土坑、遺物捨場が検出され、土器・土製品、石器・石製品等の遺物が出土しました。古代では土坑が検出され、土師器が出土しました。特に、縄文時代の竪穴建物跡は74棟を数え、この地域では大規模な集落跡の検出例として注目されます。

この調査成果が今後、埋蔵文化財の保護のために広く活用され、また、地域の歴史を理解する一助となることを期待します。

最後に、日頃から埋蔵文化財の保護に対して御理解をいただいている青森県農林水産部農村整備課に厚くお礼申し上げるとともに、発掘調査の実施と調査報告書の作成にあたり、御指導、御協力をいただきました関係各位に対し、心より感謝いたします。

平成３０年３月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長　田村博美

例言・凡例

1　本書は、青森県農林水産部農村整備課による県営小栗山地区通作条件整備事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成 27 年度に発掘調査を実施した弘前市沢部(2)遺跡の発掘調査報告書である。発掘調査面積は 8,000 ㎡である。

2　沢部(2)遺跡の所在地は青森県弘前市大字小栗山字沢部地内、青森県遺跡番号は 202002 である。

3　発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、調査を委託した青森県農林水産部農村整備課が負担した。

4　本報告書に関する発掘調査から整理・報告書作成までの期間は、以下のとおりである。

発掘調査期間	平成 27 年 4 月 30 日～平成 27 年 11 月 12 日
整理・報告書作成期間	平成 28 年 4 月 1 日～平成 29 年 3 月 31 日
	平成 29 年 4 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日

5　本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。報告書執筆と編集は、報告書抄録記載の編著者が担当し、執筆者名は文末に記した。依頼原稿については文頭に執筆者名を記した。発掘調査成果の一部は、現地見学会、発掘調査報告会等において公表しているが、これらと本書の内容が異なる場合においては本書が優先する。

6　遺物整理については、土器は岩井・茅野、石器は齋藤・久保、土製品・石製品は工藤が担当した。編集は岩井が担当した。

7　発掘調査から整理・報告書作成にあたり、以下の業務については委託により実施した。

空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
土器等水洗い・注記作業業務	第一合成株式会社
土器実測図等作成	株式会社シン技術コンサル
石器実測図等作成	株式会社アルカ
石器トレース	特定非営利活動法人リングサイト
土器写真撮影	シルバーフォト
土器・製品類写真撮影	有限会社無限
石器写真撮影	フォトショップいなみ
遺物集合写真撮影	有限会社無限
遺物写真切り抜き・回転	ワタナベサービス株式会社
放射性炭素年代測定	株式会社加速器分析研究所
黒曜石原産地推定業務	株式会社パレオ・ラボ
炭化材樹種同定	株式会社パレオ・ラボ
炭化種実同定	株式会社パレオ・ラボ

8　石器・石製品の石質鑑定は主に調査員の根本直樹氏に依頼した。

9　地形図(遺跡位置図等)は、国土地理院発行の地図を合成・加工して使用した。

10　測量原点の座標値は、世界測地系(JGD)に基づく平面直角座標第X系による。挿図中の方位は、すべて世界測地系の座標北を示している。

11　遺構については、その種類を示すアルファベットの略号と算用数字を組合せた番号を付した。以下のとおりである。
SI－竪穴建物跡、SB－掘立柱建物跡、SK－土坑、SN－焼土遺構、SR－土器埋設遺構、SP－小穴

12　遺物については、取り上げ順に種別ごとの略号と番号を付した。略号は、以下のとおりである。
P－土器、S－石器、C－炭化物

13　土層の色調及び土性表記には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄)を用い、遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を使用した。土層断面図には、水準点を基にした海抜標高を付した。

14　石器・石製品実測図で使用したスクリーントーンは以下の通りである。遺構図及び土器実測図で使用したスクリーントーンの凡例は図中に記した。

光沢　アスファルト・黒色付着物　敲打痕　磨面　被熱による黒色変化

15　遺構実測図および遺物実測図のスケールは各図版に付した。

16　遺物写真には、遺物実測図の番号を付した。遺物写真の縮尺は、土器・礫石器(石皿・台石を除く)は 1/4、石棒類は 1/3、剥片石器・土製品・石製品(石棒類を除く)は 1/2、石皿類は 1/6 である。例外については、個別にスケールを記載した。

17　発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真等は、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。

18　発掘調査及び報告書の作成に際して、下記の機関・諸氏から御指導・御協力をいただいた。
秋田県埋蔵文化財センター、大館市郷土博物館、大仙市教育委員会、つがる市教育委員会、尖石縄文考古館、弘前市教育委員会

目　次

巻頭写真
序
例言・凡例
目次
図版目次
表目次
写真図版目次

第１章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　調査の方法
1　発掘作業の方法…… 1
2　整理作業の方法…… 4
第３節　調査の経過
1　発掘作業の経過…… 5
2　整理・報告書作成作業の経過…… 6
第２章　遺跡の環境
第１節　沢部(2)遺跡周辺の地形及び地質と遺跡の基本層序…… 8
第２節　歴史的環境…… 19
第３章　検出遺構と出土遺物
第１節　遺跡の概要…… 21
第２節　遺物の整理と分類
1　土器…… 43
2　石器…… 44
3　土製品…… 45
4　石製品…… 45
第３節　検出遺構と遺構内出土遺物
1　竪穴建物跡…… 46
2　掘立柱建物跡 …… 96
3　土坑…… 98
4　焼土遺構……129
5　土器埋設遺構……133
6　ピット……137
7　捨場……290
第４節　遺構外出土遺物
1　土器……374
2　石器……378
3　土製品……378
4　石製品……378
第４章　自然科学分析
第１節　沢部(2)遺跡における放射性炭素年代(AMS測定) ……393
第２節　沢部(2)遺跡出土黒曜石製石器の産地推定……398
第３節　沢部(2)遺跡出土炭化材の樹種同定……402
第４節　沢部(2)遺跡出土の炭化種実 ‥410
第５章　総括
第１節　縄文時代前期の遺構と遺物
1　遺構について……419
2　土器について……422
第２節　縄文時代中期末葉～後期初頭の遺構と遺物
1　遺構について……426
2　土器について……431
第３節　石器について
1　石器群……433
2　石器組成及び製作状況……433
3　石材環境……434
第４節　漆・アスファルト・赤色顔料関連遺物‥436

引用文献……438
遺物観察表……440
写真図版……479
報告書抄録……641

挿図目次

第１図　路線図
第２図　調査範囲図・グリッド配置図
第３図　周辺の遺跡
第４図　遺構配置図分割割付図
第５図　遺構配置図(分割図)
第６図　石器計測値基準
第７図　遺構図１（SI1～SI3）
第８図　遺構図２（SI4～SI6）
第９図　遺構図３（SI7, SI8, SI9a, SI9b）
第10図　遺構図４（SI11～SI13）
第11図　遺構図５（SI14, SI15, SI17）
第12図　遺構図６（SI16）
第13図　遺構図７（SI18, SI20, SI21）
第14図　遺構図８（SI19）
第15図　遺構図９（SI22）
第16図　遺構図10（SI22）
第17図　遺構図11（SI23）
第18図　遺構図12（SI24, SI25, SI28）
第19図　遺構図13（SI26a, SI26b）
第20図　遺構図14（SI27, SI29, SI30）
第21図　遺構図15（SI32）
第22図　遺構図16（SI32）
第23図　遺構図17（SI35, SI39）
第24図　遺構図18（SI35, SI39）
第25図　遺構図19（SI36, SI65）
第26図　遺構図20（SI36, SI65）
第27図　遺構図21（SI31, SI33）
第28図　遺構図22（SI37, SI38, SI40）
第29図　遺構図23（SI41, SI42）
第30図　遺構図24（SI43, SI44, SI46）
第31図　遺構図25（SI45a, SI45b, SI67）
第32図　遺構図26（SI47～SI50）
第33図　遺構図27（SI51a, SI52b, SI52a, SI52b）
第34図　遺構図28（SI51a, SI52b, SI52a, SI52b）
第35図　遺構図29（SI53, SI54）
第36図　遺構図30（SI55, SI68）
第37図　遺構図31（SI56～SI58, SI70）
第38図　遺構図32（SI59, SI60）
第39図　遺構図33（SI61～SI63）
第40図　遺構図34（SI64, SI66）
第41図　遺構図35（SI69, SI71, SI72）
第42図　遺構図36（SI73, SI74）
第43図　遺構図37(SB1)
第44図　遺構図38(SB2)
第45図　遺構図39(SK1, SK3～SK6, SK8, SK9, SK13, SK14, SK45)
第46図　遺構図40（SK10, SK15～SK18, SK23）
第47図　遺構図41（SK19, SK21, SK22, SK24, SK25）
第48図　遺構図42（SK26～SK28, SK30, SK31, SK33）
第49図　遺構図43（SK32, SK35, SK67）
第50図　遺構図44（SK36～SK38, SK41～SK44, SK47）
第51図　遺構図45（SK48～SK50, SK52, SK54～SK57, SK59）
第52図　遺構図46（SK60～SK65, SK70）
第53図　遺構図47（SK71, SK72, SK75～SK81）
第54図　遺構図48（SK82～SK86）
第55図　遺構図49（SK87, SK88, SK90, SK91, SK103）
第56図　遺構図50（SK92～SK98）
第57図　遺構図51（SK99～SK101, SK104, SK105, SK108）
第58図　遺構図52（SK106, SK107, SK109～SK112）
第59図　遺構図53（SN）
第60図　遺構図54（SR）
第61図　遺構内出土遺物１（SI1, SI3～SI6）
第62図　遺構内出土遺物２（SI6）
第63図　遺構内出土遺物３（SI6～SI9）
第64図　遺構内出土遺物４（SI11～SI15）
第65図　遺構内出土遺物５（SI16）
第66図　遺構内出土遺物６（SI16, SI17）
第67図　遺構内出土遺物７（SI18, SI19）
第68図　遺構内出土遺物８（SI19）
第69図　遺構内出土遺物９（SI19）
第70図　遺構内出土遺物10（SI20, SI21）
第71図　遺構内出土遺物11（SI22）
第72図　遺構内出土遺物12（SI22）
第73図　遺構内出土遺物13（SI22）
第74図　遺構内出土遺物14（SI22）
第75図　遺構内出土遺物15（SI22）
第76図　遺構内出土遺物16（SI22）

第77図　遺構内出土遺物17（SI22）
第78図　遺構内出土遺物18（SI22）
第79図　遺構内出土遺物19（SI22）
第80図　遺構内出土遺物20（SI23）
第81図　遺構内出土遺物21（SI23, SI26）
第82図　遺構内出土遺物22（SI26～SI29）
第83図　遺構内出土遺物23（SI30～SI32）
第84図　遺構内出土遺物24（SI32）
第85図　遺構内出土遺物25（SI32）
第86図　遺構内出土遺物26（SI32）
第87図　遺構内出土遺物27（SI32）
第88図　遺構内出土遺物28（SI33）
第89図　遺構内出土遺物29（SI35）
第90図　遺構内出土遺物30（SI35）
第91図　遺構内出土遺物31（SI35, SI36）
第92図　遺構内出土遺物32（SI36, SI38）
第93図　遺構内出土遺物33（SI38～SI40）
第94図　遺構内出土遺物34（SI40）
第95図　遺構内出土遺物35（SI40）
第96図　遺構内出土遺物36（SI41）
第97図　遺構内出土遺物37（SI43）
第98図　遺構内出土遺物38（SI43, SI44）
第99図　遺構内出土遺物39（SI45a）
第100図　遺構内出土遺物40（SI45a）
第101図　遺構内出土遺物41（SI45b, SI46, SI47）
第102図　遺構内出土遺物42（SI47）
第103図　遺構内出土遺物43（SI48, SI50, SI51a）
第104図　遺構内出土遺物44（SI51a）
第105図　遺構内出土遺物45（SI51a～SI52）
第106図　遺構内出土遺物46（SI53）
第107図　遺構内出土遺物47（SI53）
第108図　遺構内出土遺物48（SI53）
第109図　遺構内出土遺物49（SI53, SI54）
第110図　遺構内出土遺物50（SI55）
第111図　遺構内出土遺物51（SI55, SI56）
第112図　遺構内出土遺物52（SI56）
第113図　遺構内出土遺物53（SI57, SI59）
第114図　遺構内出土遺物54（SI59）
第115図　遺構内出土遺物55（SI59, SI60）
第116図　遺構内出土遺物56（SI60, SI61）
第117図　遺構内出土遺物57（SI62～SI65）
第118図　遺構内出土遺物58（SI65）
第119図　遺構内出土遺物59（SI65）
第120図　遺構内出土遺物60（SI65）
第121図　遺構内出土遺物61（SI65）
第122図　遺構内出土遺物62（SI65, SI66）
第123図　遺構内出土遺物63（SI66）
第124図　遺構内出土遺物64（SI66～SI68）
第125図　遺構内出土遺物65（SI69～SI72）
第126図　遺構内出土遺物66（SI72）
第127図　遺構内出土遺物67（SI73）
第128図　遺構内出土遺物68（SI73）
第129図　遺構内出土遺物69（SB1, SB2, SK3）
第130図　遺構内出土遺物70（SK3）
第131図　遺構内出土遺物71（SK5, SK9, SK10）
第132図　遺構内出土遺物72（SK10, SK13, SK15, SK17, SK18）
第133図　遺構内出土遺物73（SK18, SK19, SK21）
第134図　遺構内出土遺物74（SK21～SK23）
第135図　遺構内出土遺物75（SK24, SK25）
第136図　遺構内出土遺物76（SK26～SK28, SK30）
第137図　遺構内出土遺物77（SK31, SK32）
第138図　遺構内出土遺物78（SK33, SK35～SK38, SK41～SK43, SK45）
第139図　遺構内出土遺物79（SK47～SK50, SK52, SK54）
第140図　遺構内出土遺物80（SK54, SK55, SK57, SK59, SK62）
第141図　遺構内出土遺物81（SK63, SK64, SK67, SK70, SK71）
第142図　遺構内出土遺物82（SK72, SK76, SK77）
第143図　遺構内出土遺物83（SK79）
第144図　遺構内出土遺物84（SK80～SK84）
第145図　遺構内出土遺物85（SK85, SK87, SK88, SK90）
第146図　遺構内出土遺物86（SK90, SK91）
第147図　遺構内出土遺物87（SK92～SK95, SK97, SK99）
第148図　遺構内出土遺物88（SK100, SK101, SK103）
第149図　遺構内出土遺物89（SK104～SK107）
第150図　遺構内出土遺物90（SK108, SK109, SK110a～SK112）
第151図　遺構内出土遺物91（SN16, SR2, SR6, SR11）
第152図　遺構内出土遺物92（SR10, SR12, SR17～SR19）
第153図　遺構内出土遺物93（SR22, SR24, SR25, SR27）
第154図　遺構内出土遺物94（SR26, SP21, SP38, SP64）
第155図　遺構内出土遺物95（SP66, SP101, SP135, SP197, SP231）

第156図　遺構内出土遺物96（SP223）
第157図　遺構内出土遺物97（SP243, SP246, SP298, SP403, SP450, SP455, SP465, SP642, SP704）
第158図　遺構内出土遺物98（SP671, SP727, SP775, SP954, SP991, SP1001, SP1005, SP1046）
第159図　捨場範囲図・層序作成位置図
第160図　捨場出土土器重量分布図
第161図　捨場土層断面図
第162図　捨場出土土器1（Ⅰ層, Ⅰ～Ⅱ層, Ⅱ層）
第163図　捨場出土土器2（Ⅱ層）
第164図　捨場出土土器3（Ⅱ層）
第165図　捨場出土土器4（Ⅱ層）
第166図　捨場出土土器5（Ⅱ層）
第167図　捨場出土土器6（Ⅱa'層）
第168図　捨場出土土器7（Ⅱa'層, Ⅱa層）
第169図　捨場出土土器8（Ⅱa層）
第170図　捨場出土土器9（Ⅱa層）
第171図　捨場出土土器10（Ⅱa層）
第172図　捨場出土土器11（Ⅱa層）
第173図　捨場出土土器12（Ⅱa'層, Ⅱa・Ⅱb層）
第174図　捨場出土土器13（Ⅱb層）
第175図　捨場出土土器14（Ⅱb層）
第176図　捨場出土土器15（Ⅱb層）
第177図　捨場出土土器16（Ⅱb層）
第178図　捨場出土土器17（Ⅱb層）
第179図　捨場出土土器18（Ⅱb層）
第180図　捨場出土土器19（Ⅱb層）
第181図　捨場出土土器20（Ⅱb層）
第182図　捨場出土土器21（Ⅱb層）
第183図　捨場出土土器22（Ⅱb層）
第184図　捨場出土土器23（Ⅱb層）
第185図　捨場出土土器24（Ⅱb層）
第186図　捨場出土土器25（Ⅱb層）
第187図　捨場出土土器26（Ⅱb層）
第188図　捨場出土土器27（Ⅱb層）
第189図　捨場出土土器28（Ⅱb層）
第190図　捨場出土土器29（Ⅱb層）
第191図　捨場出土土器30（Ⅱb層）
第192図　捨場出土土器31（Ⅱb層）
第193図　捨場出土土器32（Ⅱb層）
第194図　捨場出土土器33（Ⅱb層）
第195図　捨場出土土器34（Ⅱb層）
第196図　捨場出土土器35（Ⅱb層）
第197図　捨場出土土器36（Ⅱ～Ⅲ層, Ⅲ層, 黒色土, Ⅲ～Ⅳ層）
第198図　捨場出土土器37（トレンチ, 撹乱）
第199図　捨場出土石器1
第200図　捨場出土石器2
第201図　捨場出土石器3
第202図　捨場出土石器4
第203図　捨場出土石器5
第204図　捨場出土石器6
第205図　捨場出土石器7
第206図　捨場出土石器8
第207図　捨場出土石器9
第208図　捨場出土石器10
第209図　捨場出土石器11
第210図　捨場出土石器12
第211図　捨場出土石器13
第212図　捨場出土石器14
第213図　捨場出土石器15
第214図　捨場出土石器16
第215図　捨場出土石器17
第216図　捨場出土石器18
第217図　捨場出土石器19
第218図　捨場出土石器20
第219図　捨場出土石器21
第220図　捨場出土石器22
第221図　捨場出土石器23
第222図　捨場出土石器24
第223図　捨場出土石器25
第224図　捨場出土石器26
第225図　捨場出土石器27
第226図　捨場出土石器28
第227図　捨場出土土製品・石製品1（Ⅰ層, Ⅰ～Ⅱ層, Ⅱa'層）
第228図　捨場出土土製品・石製品2（Ⅱa'層, Ⅱa層）
第229図　捨場出土土製品・石製品3（Ⅱa層, Ⅱb層）
第230図　捨場出土土製品・石製品4（Ⅱb層）
第231図　捨場出土土製品・石製品5（Ⅱ層）
第232図　捨場出土土製品・石製品6（Ⅱ層）
第233図　捨場出土土製品・石製品7（Ⅱ層）
第234図　捨場出土土製品・石製品8（Ⅱ層）
第235図　捨場出土土製品・石製品9（Ⅱ層, Ⅱ～Ⅲ層, Ⅲ層, 撹乱）

第236図　遺構外出土土器１（早期）
第237図　遺構外出土土器２（早期）
第238図　遺構外出土土器３（前期）
第239図　遺構外出土土器４（中期）
第240図　遺構外出土土器５（中期）
第241図　遺構外出土土器６（中期，後期，弥生，続縄文，古代）
第242図　遺構外出土石器１
第243図　遺構外出土石器２
第244図　遺構外出土石器３
第245図　遺構外出土石器４
第246図　遺構外出土石器５
第247図　遺構外出土土製品
第248図　遺構外出土石製品１
第249図　遺構外出土石製品２
第250図　縄文時代前期の竪穴建物跡の分類と配置状況
第251図　前期の土器（１）
第252図　前期の土器（２）
第253図　時期別遺構配置図
第254図　中期末葉～後期初頭の竪穴建物跡集成図
第255図　竪穴建物跡出土大木10式併行土器

写真目次

写真１　調査区遠景・近景
写真２　調査区完掘状況１
写真３　調査区完掘状況２
写真４　遺構１（SI1～SI3）
写真５　遺構２（SI4, SI5）
写真６　遺構３（SI6）
写真７　遺構４（SI7, SI8）
写真８　遺構５（SI9, SI11）
写真９　遺構６（SI12）
写真10　遺構７（SI13～SI15）
写真11　遺構８（SI14, SI15）
写真12　遺構９（SI16）
写真13　遺構10（SI16）
写真14　遺構11（SI17）
写真15　遺構12（SI18）
写真16　遺構13（SI19）
写真17　遺構14（SI20）
写真18　遺構15（SI21）
写真19　遺構16（SI22）
写真20　遺構17（SI22）
写真21　遺構18（SI23）
写真22　遺構19（SI23～SI25, SI27）
写真23　遺構20（SI26）
写真24　遺構21（SI28）
写真25　遺構22（SI29, SI30）
写真26　遺構23（SI31, SI32）
写真27　遺構24（SI32）
写真28　遺構25（SI33）
写真29　遺構26（SI35, SI39）
写真30　遺構27（SI35, SI37, SI39）
写真31　遺構28（SI36, SI65）
写真32　遺構29（SI36, SI38, SI65）
写真33　遺構30（SI40, SI41）
写真34　遺構31（SI42, SI43）
写真35　遺構32（SI44, SI45a）
写真36　遺構33（SI45b, SI46, SI67）
写真37　遺構34（SI47～SI50）
写真38　遺構35（SI51a）
写真39　遺構36（SI51b, SI52）
写真40　遺構37（SI53, SI54）
写真41　遺構38（SI55, SI68）
写真42　遺構39（SI56）
写真43　遺構40（SI57）
写真44　遺構41（SI59）
写真45　遺構42（SI60）
写真46　遺構43（SI61, SI62）
写真47　遺構44（SI63, SI64）
写真48　遺構45（SI66）
写真49　遺構46（SI69, SI70）
写真50　遺構47（SI71, SI72）
写真51　遺構48（SI73, SI74）
写真52　遺構49（SB1）
写真53　遺構50（SB1）
写真54　遺構51（SB1, SB2）
写真55　遺構52（SB2）
写真56　遺構53（SK1, SK3）

写真57　遺構54（SK4～SK6, SK8）
写真58　遺構55（SK9, SK10, SK14）
写真59　遺構56（SK13, SK15）
写真60　遺構57（SK16～SK19）
写真61　遺構58（SK21, SK22）
写真62　遺構59（SK23～SK25）
写真63　遺構60（SK26～SK28, SK30）
写真64　遺構61（SK31～SK33）
写真65　遺構62（SK33, SK35, SK36）
写真66　遺構63（SK37, SK38, SK41, SP151）
写真67　遺構64（SK42～SK44）
写真68　遺構65（SK45, SK47～SK49）
写真69　遺構66（SK50, SK52, SK55）
写真70　遺構67（SK54, SK56, SK59）
写真71　遺構68（SK57, SK60～SK62）
写真72　遺構69（SK63～SK65, SK67）
写真73　遺構70（SK67, SK70）
写真74　遺構71（SK70～SK72）
写真75　遺構72（SK75～SK77）
写真76　遺構73（SK78, SK79）
写真77　遺構74（SK80～SK84）
写真78　遺構75（SK84～SK87）
写真79　遺構76（SK88, SK90, SK91）
写真80　遺構77（SK92～SK94）
写真81　遺構78（SK95～SK98）
写真82　遺構79（SK99～SK101）
写真83　遺構80（SK103～SK106）
写真84　遺構81（SK106～SK109）
写真85　遺構82（SK110～SK112）
写真86　遺構83（SN1, SN8, SN11～SN13）
写真87　遺構84（SN14, SN16, SN19, SN21）
写真88　遺構85（SN22, SN24, SN32）
写真89　遺構86（SR2, SR6, SP1046）
写真90　遺構87（SR10～SR12, SR17, SP251）
写真91　遺構88（SR18, SR19, SR22, SR23）
写真92　遺構89（SR24～SR27）
写真93　遺構90（捨場）
写真94　遺構91（捨場）
写真95　遺構92（捨場）
写真96　遺構93（捨場）
写真97　遺構内出土遺物１（SI1, SI3, SI7, SI9, SI11～SI13, SI15, SI16）
写真98　遺構内出土遺物２（SI6）
写真99　遺構内出土遺物３（SI18, SI19）
写真100　遺構内出土遺物４（SI19～SI22）
写真101　遺構内出土遺物５（SI22）
写真102　遺構内出土遺物６（SI22）
写真103　遺構内出土遺物７（SI23, SI26）
写真104　遺構内出土遺物８（SI28～SI32）
写真105　遺構内出土遺物９（SI32, SI33）
写真106　遺構内出土遺物10（SI35）
写真107　遺構内出土遺物11（SI36～SI39, SI41）
写真108　遺構内出土遺物12（SI40, SI44）
写真109　遺構内出土遺物13（SI43, SI45a）
写真110　遺構内出土遺物14（SI45a, SI45b, SI47）
写真111　遺構内出土遺物15（SI48, SI50～SI52）
写真112　遺構内出土遺物16（SI53）
写真113　遺構内出土遺物17（SI54～SI56）
写真114　遺構内出土遺物18（SI59）
写真115　遺構内出土遺物19（SI60～SI64）
写真116　遺構内出土遺物20（SI65）
写真117　遺構内出土遺物21（SI65）
写真118　遺構内出土遺物22（SI66）
写真119　遺構内出土遺物23（SI67, SI71～SI73）
写真120　遺構内出土遺物24（SB2, SK3, SK10, SK15）
写真121　遺構内出土遺物25（SK18, SK19, SK21～SK26）
写真122　遺構内出土遺物26（SK28, SK30～SK33, SK35, SK36, SK41, SK43, SK45, SK48, SK52, SK62）
写真123　遺構内出土遺物27（SK54, SK63）
写真124　遺構内出土遺物28（SK72, SK76, SK79～SK83, SK85, SK87）
写真125　遺構内出土遺物29（SK90～SK93, SK99～SK101）
写真126　遺構内出土遺物30（SK104～SK107, SK110～SK112, SN16）
写真127　遺構内出土遺物31（SR2, SR6, SR10, SR12, SR17～SR19, SR22, SR24）
写真128　遺構内出土遺物32（SR26, SR27, SP21～SP403）
写真129　遺構内出土遺物33（SP450～SP1046）
写真130　捨場出土土器１（Ⅰ層, Ⅰ～Ⅱ層, Ⅱ層）
写真131　捨場出土土器２（Ⅱ層, Ⅱa'層）
写真132　捨場出土土器３（Ⅱa'層, Ⅱa層）
写真133　捨場出土土器４（Ⅱa層）

写真134　捨場出土土器５（Ⅱa'層，Ⅱa層，Ⅱa・b層，Ⅱb層）
写真135　捨場出土土器６（Ⅱb層）
写真136　捨場出土土器７（Ⅱb層）
写真137　捨場出土土器８（Ⅱb層）
写真138　捨場出土土器９（Ⅱb層）
写真139　捨場出土土器10（Ⅱb層）
写真140　捨場出土土器11（Ⅱb層）
写真141　捨場出土土器12（Ⅱb層）
写真142　捨場出土土器13（Ⅱb層）
写真143　捨場出土土器14（Ⅱ～Ⅲ層，Ⅲ層，Ⅲ～Ⅳ層，Ⅳ層，トレンチ，撹乱）
写真144　捨場出土石器１
写真145　捨場出土石器２
写真146　捨場出土石器３
写真147　捨場出土石器４
写真148　捨場出土石器５
写真149　捨場出土石器６
写真150　捨場出土石器７
写真151　捨場出土石器８
写真152　捨場出土土製品・石製品１（Ⅰ層，Ⅰ～Ⅱ層，Ⅱa'層，Ⅱa層）
写真153　捨場出土土製品・石製品２（Ⅱa層，Ⅱb層）
写真154　捨場出土土製品・石製品３（Ⅱb層，Ⅱ層）
写真155　捨場出土土製品・石製品４（Ⅱ層，Ⅱ～Ⅲ層，Ⅲ層，撹乱）
写真156　遺構外出土土器１
写真157　遺構外出土土器２
写真158　遺構外出土土器３
写真159　遺構外出土土器４
写真160　遺構外出土石器１
写真161　遺構外出土石器２
写真162　遺構外出土土製品・石製品

表目次

第１表　区域・時期による竪穴属性の数量表
第２表　竪穴建物跡の属性表
第３表　中期末葉～後期初頭の竪穴建物跡属性表
第４表　中期末葉～後期初頭のフラスコ状土坑属性表
第５表　沢部(２)遺跡　石器出土数量
第６表　沢部(２)遺跡　捨場出土石器組成
第７表　ピット一覧表（１）
第７表　ピット一覧表（２）
第７表　ピット一覧表（３）
第７表　ピット一覧表（４）
第８表　土器観察表（１）
第８表　土器観察表（２）
第８表　土器観察表（３）
第８表　土器観察表（４）
第８表　土器観察表（５）
第８表　土器観察表（６）
第８表　土器観察表（７）
第８表　土器観察表（８）
第８表　土器観察表（９）
第８表　土器観察表（10）
第８表　土器観察表（11）
第８表　土器観察表（12）
第８表　土器観察表（13）
第８表　土器観察表（14）
第８表　土器観察表（15）
第８表　土器観察表（16）
第８表　土器観察表（17）
第８表　土器観察表（18）
第８表　土器観察表（19）
第８表　土器観察表（20）
第９表　石器観察表（１）
第９表　石器観察表（２）
第９表　石器観察表（３）
第９表　石器観察表（４）
第９表　石器観察表（５）
第９表　石器観察表（６）
第９表　石器観察表（７）
第９表　石器観察表（８）
第９表　石器観察表（９）
第９表　石器観察表（10）
第９表　石器観察表（11）
第９表　石器観察表（12）
第９表　石器観察表（13）
第10表　土製品観察表
第11表　石製品観察表

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

県営小栗山地区通作条件整備事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについては、平成23年度に青森県農林水産部農村整備課及び中南地域県民局地域農林水産部から事業計画が示され、青森県教育庁文化財保護課（以下県文化財保護課）が事業者と継続的に協議を重ねてきた。平成25年度には県文化財保護課が事業予定地の試掘確認調査を行い、遺構・遺物を確認したことから、鷲ノ巣(１)遺跡、鷲ノ巣(３)遺跡、沢部(１)遺跡、沢部(２)遺跡の計４遺跡について工事施工前の本発掘調査が必要であるとした（青森県教委2014d）。この結果を受け、再度県文化財保護課と事業者との間で協議を行い、工事優先箇所の決定や他調査事業との調整を経た上で、平成26年度に県文化財保護課が鷲ノ巣(１)遺跡と鷲ノ巣(３)遺跡を、平成27・28年度には青森県埋蔵文化財調査センターが沢部(２)遺跡と沢部(１)遺跡の本発掘調査をそれぞれ実施することとした。沢部(２)遺跡については、平成26年４月に中南地域県民局長から文化財保護法第94条第１項の通知があったことから、青森県教育委員会教育長が工事着手前の本発掘調査（記録保存調査）を指示している（平成26年４月15日付け青教文第166号）。　（笹森）

第２節　調査の方法

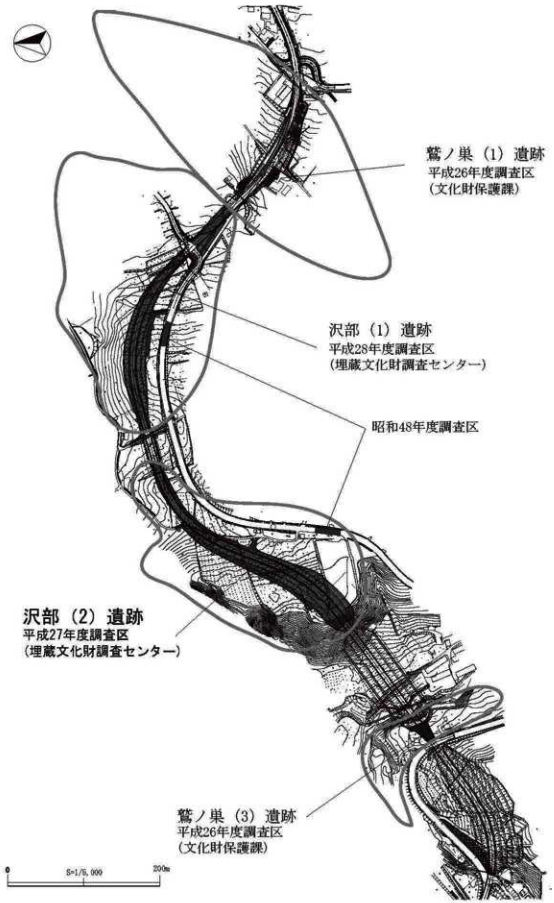
１　発掘作業の方法

平成25年度に青森県教育庁文化財保護課が実施した試掘調査により、縄文時代の竪穴建物跡、土坑、捨場や遺物等が確認されていたことから、遺構調査に重点を置いて、集落の時期・構造等の把握に努めた。

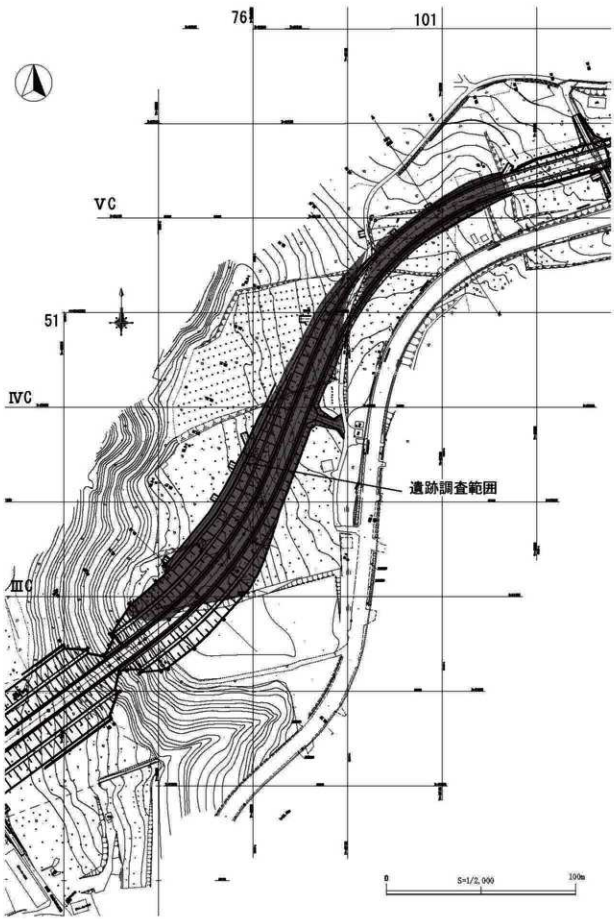
〔測量基準点・水準点の設置及びグリッドの設定〕　遺構測量に用いた基準点は、用地幅杭として設置された４級基準点を使用した。基準点の座標値は青森県農林水産部農村整備課から提供を受けた。基準点からの測量に支障が生じた場合は用地幅杭や調査区内に任意点を設置し使用した。また、水準原点は３級基準点３№３（128.156ｍ）を用い、調査区内の任意点に適宜水準移動を行った。

グリッドは、調査区を網羅するように設定した。１グリッドは４×４ｍとし、世界測地系に基づく公共座標値X=61,692,Y=30,600を原点（ⅠＡ－１）とした。各グリッドは、南から北方向に向かってローマ数字（Ⅰ～Ⅴ）とアルファベット（Ａ～Ｙ）を組み合わせ、西から東方向に算用数字を付し、南西隅の組み合わせで呼称した。なお平成26年度に行われた鷲ノ巣(１)遺跡・鷲ノ巣(３)遺跡の調査では公共座標値X=61,700、Y=30,600を原点（ⅠＡ－１）としており、今回の調査に用いたグリッドとは南北軸に差異がある。

〔基本層序〕　遺跡の基本層序については、表土から順にローマ数字を付して呼称した。試掘調査時の土層番号とは異なる部分がある。


鷲ノ巣（1）遺跡
平成26年度調査区
（文化財保護課）
沢部（1）遺跡
平成28年度調査区
（埋蔵文化財調査センター）
昭和48年度調査区
沢部（2）遺跡
平成27年度調査区
（埋蔵文化財調査センター）
鷲ノ巣（3）遺跡
平成26年度調査区
（文化財保護課）
0
S=1/5,000
200m

第１図　路線図



第２図　調査範囲図・グリッド配置図

〔表土等の調査〕　平成25年度の試掘調査時の所見や土層の堆積状況等を確認しながら、必要に応じて重機を併用して掘削の省力化を図った。出土した遺物は、適宜グリッド・層位毎に取り上げた。
〔遺構の調査〕　遺構には、原則として検出順に種類別の番号を付けて精査した。堆積土層観察用の畦は、遺構の形態や大きさに応じて、基本的に４分割または２分割で設定したが、遺構の重複や付属施設の有無等により必要に応じて追加した。遺構内の堆積土層には、算用数字を付けて、ローマ数字を付けた基本層序と区別した。遺構の平面図は、主に株式会社CUBIC製「遺構実測支援システム」を用いてトータルステーションによる測量で作成した。遺構の堆積土層断面図や、出土遺物の形状実測図等は、簡易遣り方測量等も併用し、縮尺1/20・1/10の実測図を作成した。遺構内の出土遺物については、遺構単位で層位毎または堆積土一括で取り上げたが、必要に応じて縮尺1/20・1/10のドットマップ図・形状実測図等を作成した。
〔遺物包含層の調査〕　上層から層位毎に人力で掘削した。出土遺物はグリッド・層位毎の取り上げを基本とし、必要に応じて詳細な出土位置を記録し、写真撮影を行った。捨場は、先行してトレンチを掘削し、堆積層序を予め把握した上で、上層から層位毎に人力で掘削した。出土遺物はグリッド・層位毎に一括で取り上げ、特徴的な遺物については詳細な出土位置を記録し、写真撮影を行った。
〔写真撮影〕　写真撮影には、原則として35㎜モノクローム、35㎜カラーリバーサルの各フィルム及び1790万画素のデジタルカメラを併用し、発掘作業状況、土層の堆積状態、遺物の出土状態、遺構の検出状況・精査状況・完掘後の全景等について記録した。また、必要に応じてラジコンヘリによる遺跡及び調査区域全体の空中写真撮影を業者に委託し行った。

2　整理作業の方法

〔図面類の整理〕　遺構の平面図は主にトータルステーションによる測量で作成したので、整理作業ではこれを原則として縮尺1/20で図化し、簡易遣り方測量等で作成した堆積土層断面図等の実測図等との図面調整を行った。また、遺構一覧表を作成して、発掘作業時の所見等を整理した。
〔写真類の整理〕　35㎜モノクロームフィルムは撮影順にネガアルバムに収納し、35㎜カラーリバーサルフィルムは発掘作業状況、包含層遺物の出土状態、遺構毎の検出・精査状況等に整理してスライドファイルに収納した。デジタルカメラのデータは35㎜カラーリバーサルフィルムと同様にタイトルを付けた。
〔遺物の洗浄・注記と接合・復元〕　土器の注記は、調査年度、遺跡名、出土区・遺構名、層位、取り上げ番号等を略記した。石器は直接注記せず、収納袋に記載した。接合・復元にあたっては、出土地点・層位等を点検しながら行った。
〔報告書掲載遺物の選別〕　遺物全体の分類を行った上で、遺構に伴い使用・廃棄された資料、遺構の構築・廃絶時期を示す資料、遺存状態が良好で同類の中で代表的な資料、所属時期・型式・器種等の分かる資料等を主として選別した。
〔遺物の観察・図化・写真撮影〕　選別した遺物は必要に応じて実測図または拓本を採り、観察表・計測表等を作成した。遺物の写真については、業者に委託して行ったが、実測図等では表現しがたい質感・雰囲気・製作技法・文様表現等を伝えられるように留意した。
〔トレース・版下作成〕　遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、アドビシステムズ㈱製

Illustratorを用い、実測図版・写真図版等の版下はアドビシステムズ製IllustratorとInDesignで主に作成した。

［調査成果の検討・分類・整理］　遺構は種類・構造的特徴・出土遺物・他の遺構との新旧関係等の情報を整理し、構築時期や同時性・性格等を検討した。遺物は時代・時期・種類毎に整理し、出土遺物全体の分類・器種構成・個体数等を検討した。遺構・遺物の検討結果を踏まえて、縄文時代の集落の時期・構造・変遷等について整理・検討した。

第3節　調査の経過

1　発掘作業の経過

本遺跡は平成27年度に発掘調査を実施した。調査面積は8,000㎡である。発掘調査体制は、以下のとおりである。

調　査　員　藤沼　邦彦　元弘前大学教授（考古学）
　　関根　達人　国立大学法人　弘前大学人文学部教授
　　（現　人文社会科学部教授）（考古学）
　　福田　友之　青森県考古学会会長
　　（現　青森県史編さん通史部会専門委員）（考古学）
　　上條　信彦　国立大学法人　弘前大学　人文学部准教授
　　（現　人文社会科学部准教授）（考古学）
　　柴　　正敏　国立大学法人　弘前大学大学院　理工学研究科教授（地質学）
　　山口　義伸　日本第四紀学会会員（地質学）
調 査 主 体　青森県埋蔵文化財調査センター
　　所　　長　　三上　盛一（現 青森県総合社会教育センター所長）
　　次長（総務GM）　川上　彰雄（現 次長）
　　調査第二GM　川口　潤（現 調査第三GM）
　　文化財保護主幹　茅野　嘉雄（発掘調査担当者）
　　文化財保護主査　岩井　美香子（発掘調査担当者）
　　文化財保護主事　中澤　寛将（発掘調査担当者）
　　（現 青森県企画政策部世界文化遺産登録推進室主事）
　　文化財保護主事　久保　友香理（発掘調査担当者）

発掘作業の経過、業務委託状況等は、以下のとおりである。

4月上旬　事業者、青森県教育庁文化財保護課と調査前の打合せを行い、発掘作業の進め方等について再度確認した。

4月下旬　試掘調査の結果、表土以下縄文時代の遺構確認面までは遺物の出土量がごく少ないことが確認されていたことから、まず全体の約半分の面積について、重機による表土除去を行った。調査事務所、器材庫、発掘作業員休憩所や仮設トイレの設置等、事前の準備作業を経

て、4月30日に発掘機材等を現地へ搬入し、環境整備後、調査区北部(B区)及び、中央部(A区)で発掘作業を開始した。

5月上旬　遺構検出作業を進め、北部では古代以降の土坑、中央部では縄文時代前期と中期の竪穴建物跡や土坑などを確認し、精査を行った。

6月上旬　調査区南側の尾根頂部の調査に着手した。遺構の検出・精査の結果、縄文時代中期末～後期初頭の竪穴建物跡やフラスコ状土坑などが多数存在することが判明した。調査区中央部の大規模な削平を受けた部分については、盛土下部に遺構が残存していることが明らかとなったため、盛土を除去し、調査を行うこととした。

6月下旬　調査区中央部の盛土除去を行い、遺構検出作業を行った。盛土下部では縄文時代前期の竪穴建物跡を多数検出した。調査区北部は調査を終了した。調査区北部には調査区内に電柱アンカーが設置されており、撤去時に立会を行った。

7月下旬　調査区中央部東斜面で縄文時代前期中葉の捨場を確認した。トレンチ調査を先行して行い、堆積土の層序に留意しながら、調査を進めた。

8月下旬　今後の調査等について、文化財保護課及び事業者と協議を行い、次の2点を確認した。①調査区内に位置する公衆用道路部分については、直下に設けられた用水路のために撹乱を受けていること、周囲の調査状況より、遺構・遺物が存在する可能性が極めて低いことから調査は不要とする。②隣接農家が使用している2本の道路部分については、周囲の遺構の密度が高く、調査が必要である。道路の付替えについては事業者が行う。

9月上旬　調査区南側の尾根頂部においても竪穴建物跡・フラスコ状土坑など遺構が多数存在することが明らかとなった。株式会社シン技術コンサルに委託して、1回目の空中写真撮影を行った。9月5日(土)に現地説明会を行った。

9月下旬　調査が終了したセンター杭No.31より南側については、事業者の以前からの要望により、引渡しをした。

10月中旬　道路など部分的に残っていた未調査範囲についても、表土除去を行い、調査を開始した。遺構・遺物が当初の見込みより多数検出されたことや、道路の付替え工事の遅れなどに伴い、調査期間を11月12日まで延長した。株式会社シン技術コンサルに委託して、2回目の空中写真撮影を行った。

11月中旬　すべての発掘作業を終了し、発掘器材・出土品等を搬出した後、現地から撤収した。所轄の警察署に文化財保護課を通じて遺物発見届を提出した。

2　整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は平成28・29年度の2か年で行った。平成28年度は写真類及び遺構図面の整理作業、土器の計量・分類・接合・復元作業、石器と土製品・石製品の計量・分類・実測・トレース作業を行った。平成29年度は遺構図面修正、土器の接合・復元・実測・トレース作業、石器と土製品・石製品のトレース作業、図版作成作業、報告書編集作業を行った。遺物の洗浄と注記は平成27年度内に終了している。

整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

整理主体　青森県埋蔵文化財調査センター
〔平成28年度〕文化財保護主幹　永嶋　豊
文化財保護主査　工藤　忍
文化財保護主事　久保　友香理
〔平成29年度〕総　括　主　幹　齋藤　岳
文化財保護主幹　茅野　嘉雄
文化財保護主査　工藤　忍
文化財保護主査　岩井　美香子
文化財保護主事　久保　友香理

整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況は、以下のとおりである。
〔平成28年度〕
4月　土器、石器、土製品、石製品について、掲載遺物候補の抽出作業を開始した。
7月　土器の接合・復元作業を開始した。
9月　礫石器の実測を開始した。
10月　土器の実測作業を開始した。
1月　礫石器の実測が終了した。
2月　土製品・石製品の実測を行った。
3月　一部の礫石器と石製品について、トレースを行った。
〔平成29年度〕
4月　遺構図の修正作業を開始した。土器は前年度に引き続き、接合復元作業を進めた。
5月　土器の接合復元作業が終了し、報告書掲載土器の選別を行った。土製品はトレースを開始した。
6月　土器の実測を開始した。
9月　土器のトレース作業を開始した。
10月　図版作成作業を開始し、合わせて原稿作成作業に取り掛かった。
12月　報告書の割付・編集を行い、入稿した。
3月　校正を経て報告書を刊行し、記録類・出土品を整理して収納した。

（岩井）

第２章　遺跡の環境

第１節　沢部（２）遺跡周辺の地形及び地質と遺跡の基本層序

弘前大学大学院理工学研究科　根本 直樹

１．沢部（２）遺跡の位置と周辺地形の概要

沢部（２）遺跡は、弘前市大字小栗山字沢部に位置する。地形的には、津軽平野南縁を縁取る扇状地上の扇頂部付近に載る(図１)。標高はおよそ110～130ｍである(図３)。

沢部（２）遺跡周辺の地形を概観すると、その南方には丘陵地が広がり、さらに南方には山地が見られる。丘陵地及び扇状地を流れる主要河川に沿っては、谷底平野が狭長に分布する。

沢部（２）遺跡南方の山地は、今井・堀田（1973）の大鰐山地に相当する中～大起伏火砕山地である。この山地は、青森・秋田県境をなす山塊の一部で、青森県側では北に向かって標高を減じる。標高はおよそ300ｍ以上である。

沢部（２）遺跡南方の丘陵地は、今井・堀川（1973）の日屋丘陵に相当する。起伏量は50～150m/㎢である。この丘陵地も北に向かって緩やかに標高を減じるが、これはこの地域に分布する新第三系がほぼ東西の走向をもち、北に緩傾斜していることを反映していると解釈される。

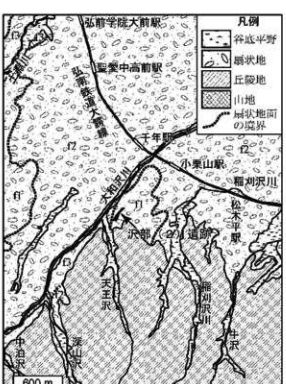


図１　沢部(2)遺跡周辺の地形分類図

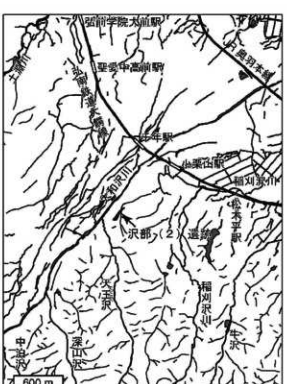


図２　沢部(2)遺跡周辺の水系図

本報告の扇状地は、今井・堀田(1973)の弘前台地に相当する。南方の山地及び丘陵地を北流してきた複数の河川が形成した合流扇状地で、大和沢川の右岸では北東に、左岸では北々東に緩傾斜する。扇状地面は、傾斜変換部または侵食崖を境として数面に細分される。本報告では上位より、f1、f2、f3面と仮称する。これらはそれぞれ、今井・堀田(1973)のGtI、GtII、GtIII面にほぼ相当する。また、山口(2001)も弘前市周辺の扇状地面の細分を試みている。本報告のf1面は山口(2001)の桔梗野面にほぼ相当し、f2面は山口(2001)の松原面、高杉面を含む。f1面の標高は50～130 m程度で、他の扇状地面よりも傾斜が急である。f2面は傾斜変換部を介してf1面と接し、広く分布する。f3面は侵食崖をもってf2面と接するが、その分布は局所的である。

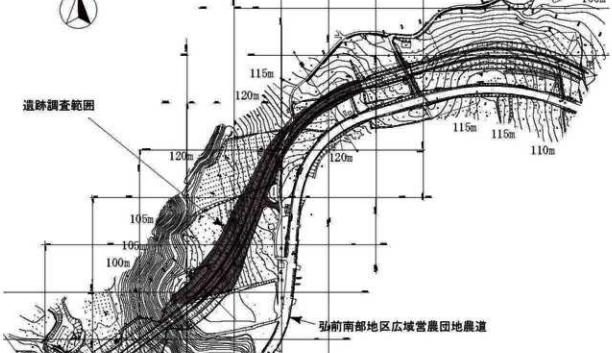


図3　沢部(2)遺跡周辺の地形

谷底平野は、主要河川に沿って分布する。扇状地が分布する地域での谷底平野は、比高が3～5 mの侵食崖を介して扇状地に接する。谷底平野の傾斜は、丘陵地内ではやや急であるが、扇状地の中では極めて緩やかである。

水系は、丘陵地では本流がほぼ北へ向かう枝状水系である(図2)。一方扇状地では、人工的な改変が進んでいるものの、北々東に向かう平行水系である。これらの傾向は、この地域における丘陵地及び扇状地の大局的な傾斜方向を反映していると推定される。なお、大和沢川は丘陵地内でも北々東に向かって流れるが、これは大和沢川流域地下に伏在する大和沢断層の方向を反映していると解釈される。

2．沢部（2）遺跡周辺の地質

弘前市南方の地質は、青森・秋田県境付近に分布するジュラ系付加体の毛無山コンプレックスを基盤とし、その上位に新第三系及び第四系が重なる。新第三系は毛無山コンプレックスを不整合に覆うが、一部では断層を介して接する。新第三系はほぼ東西の走向をもち、北に20°～30°傾斜する。新第三系は下位より藤倉川層、砂子瀬層、大和沢層及び松木平層に区分され、順次整合に重なる（図4）。以下に、沢部（2）遺跡付近に分布する砂子瀬層～松木平層について概説する。

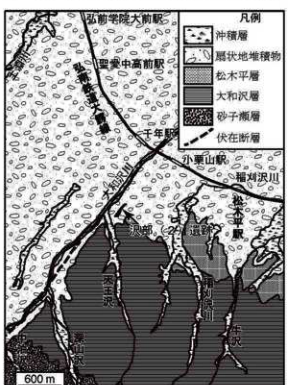


図4　沢部(2)遺跡周辺の地質概略図

砂子瀬層は、北村・岩井（1963）により命名された。模式地は、中津軽郡西目屋村砂子瀬付近の岩木川流域である。沢部（2）遺跡周辺の大和沢川流域から西目屋村の川原平にかけて、ほぼ帯状に連続して分布する。層厚は200～400mである。軟体動物化石を含む砂岩、砂質シルト岩及び礫岩によって特徴づけられ、成層した安山岩～デイサイト質の火山砕屑岩、珪長質な凝灰岩、凝灰質砂岩、泥岩及び炭層を挟む。浮遊性有孔虫化石のN.8～N.9帯に相当する（能美・根本、1994）。

大和沢層は、金谷（1949）により命名された。大沢（1962）の栩内川層にほぼ相当する。模式地は、大和沢川流域である。大和沢川を中心としてほぼ東西に帯状に分布する。大和沢川流域における層厚は250～300mであるが、東西に薄化する。主に細粒凝灰岩からなり、ところによって珪藻質泥岩または珪質泥岩と互層する。石灰質ナンノ化石のCN4～CN5a帯に相当する（岡田、1988）。

松木平層は、北村・岩井（1963）により命名された。模式地は、弘前市大字松木平の稲刈沢下流一帯である。層厚は150mに達する。分布は松木平周辺に限られる。主に成層した黒色のシルト岩からなり、灰～暗灰色の珪藻質シルト岩及び砂質細粒凝灰岩をしばしば挟む。下位の大和沢層を整合に覆う。

f1面を構成する扇状地堆積物は、礫層と砂質粘土層からなる。礫層は、チャート、スレート、安山岩及び泥岩の亜円～円礫よりなり、基質は砂である。f2面を構成する扇状地堆積物は、砂礫層と砂質シルト層からなる。山口（2001）によると、大不動軽石流及び八戸軽石流に相当する2層の軽石流堆積物を挟む。

沖積層は、現河床堆積物、自然堤防堆積物及び氾濫原堆積物から構成される。現河床堆積物は、各河川に沿って狭長に分布する。未固結の礫、砂及びシルトから構成される。上部に厚さ1m強で軟弱な腐植質粘土が載ることがある。自然堤防堆積物は、現河床堆積物分布域の外側に分布する。礫、砂、シルト及び粘土から構成され、周囲の氾濫原よりやや高い微地形を形成する。氾濫原堆積物は、後背湿地を構成する。礫、砂、シルト及び粘土から構成され、泥炭を挟むことがある。

大和沢断層は、北々東-南々西方向の走向を持つ。傾斜方向は不明であるが、垂直に近い角度をもつと推定される。大和沢上流の座頭石付近ではこの断層を介してジュラ系付加体と新第三系が接するが、沢部（2）遺跡西方では沖積層に覆われて伏在断層となる。

3．沢部（2）遺跡における土層の層序

沢部（2）遺跡の土層について、青森県埋蔵文化財調査センターの調査結果を基に、以下に記述する。各基本層序の観察位置を、図5に示す。なお、土層を観察した面を以下では観察断面と称する。

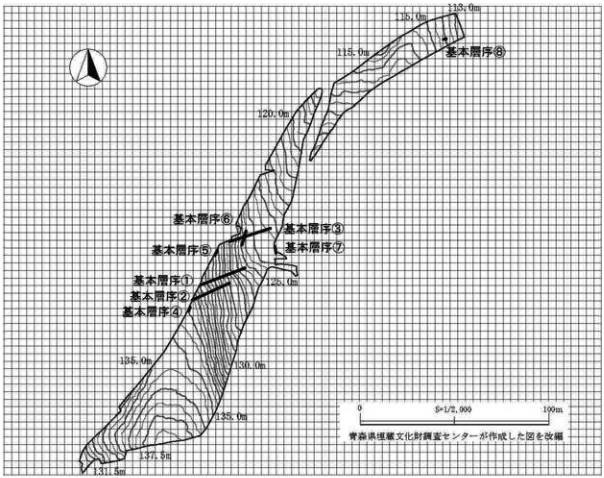


図5　基本層序観察位置とⅠ～Ⅳ層除去後のコンター図

基本層序①の土層は、基本的には下位よりⅤ～Ⅰ層に区分される（図6）。観察断面の中央よりやや西寄りでは、Ⅲ層の上位にⅢ3～Ⅲ1層が、Ⅱ層の上位にⅡ2層、Ⅱ1層、Ⅰ2層及びⅠ1層が重なる。Ⅴ層は黄褐色（10YR5/6）を呈する土層で、観察断面東部にまとまった分布が見られるほか、中央部でわずかに見られる。Ⅳ層はにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する土層で、観察断面東部～中央部では比較的連続して見られる。また、西端部でも比較的追跡できる。Ⅲ層は黒褐色（10YR2/3）を呈する土層である。比較的連続的に分布する。Ⅲ3層は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する土層で、粘性、しまり共に弱い。黄褐色のロームを30%含む。観察断面の中央よりやや西側にのみ分布する。Ⅲ2層は黒褐色（7.5YR3/1）を呈する土層で、粘性、固結度ともに低い。観察断面の中央よりやや西側にのみ分布する。Ⅲ1層は黒褐色（10YR3/1）を呈する土層で、粘性、しまり共に弱い。観察断面の中央よりやや西側にのみ分布

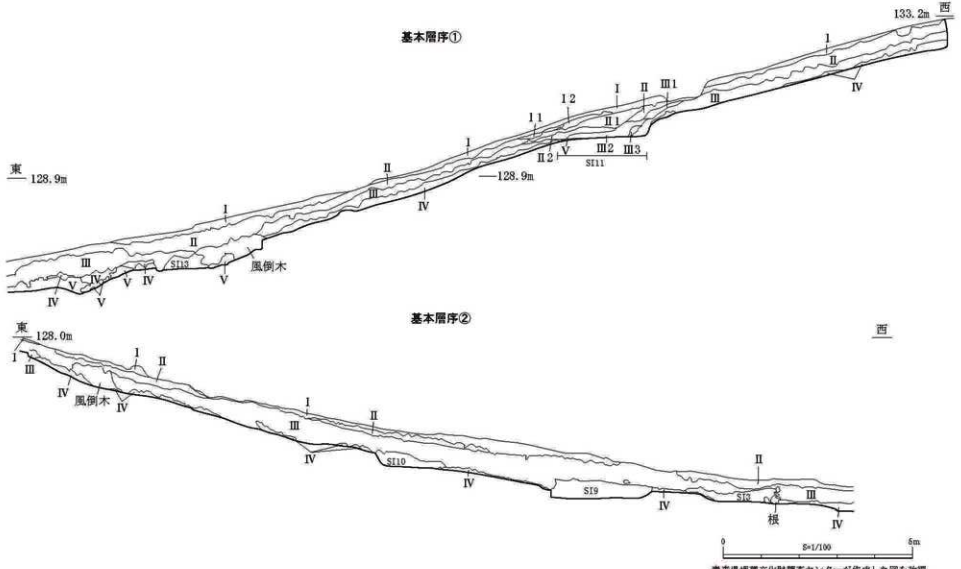

基本層序①
133.2m
西
東
128.9m
128.9m
風倒木
SI13
SI11
基本層序②
東
128.0m
西
風倒木
SI10
SI9
SI3
根
0
S=1/100
5m
青森県埋蔵文化財調査センターが作成した図を改編

図6　基本層序①及び②

する。Ⅱ層は暗褐色(10YR3/3)を呈する土層である。Ⅵ～Ⅶ層を母材とする粘質シルトを主体とする。比較的連続的に分布する。Ⅱ2層は黒褐色(10YR3/2)を呈する土層で、粘性、しまり共に弱い。5㎜～1㎝大の礫を含む。観察断面の中央よりやや西側にわずかに分布する。Ⅱ1層は灰黄褐色(10YR4/2)を呈する土層で、粘性、しまり共に弱い。1～3㎝大の礫を含む。観察断面の中央よりやや西側にわずかに分布する。Ⅰ2層は黒褐色(7.5YR3/1)の土層で、粘性、しまり共に弱い。観察断面の中央よりやや西側にわずかに分布する。Ⅰ1層は黒褐色(10YR3/2)を呈する土層で、粘性、しまり共に弱い。観察断面の中央よりやや西側にわずかに分布する。Ⅰ層はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する土層である。観察断面最上部に断続的に分布する。

基本層序②の土層は、下位よりⅣ～Ⅰ層に区分される(図6)。Ⅳ層はにぶい黄褐色(10YR4/3)の土層で、断続的に分布する。Ⅲ層は黒褐色(10YR2/3)の土層で、連続的に分布する。Ⅱ層は暗褐色(10YR3/3)を呈する土層で、Ⅵ～Ⅶ層を母材とする粘質シルトを主体とする。断続的に分布する。Ⅰ層はにぶい黄褐色(10YR4/3)を呈する土層で、比較的連続的に分布する。

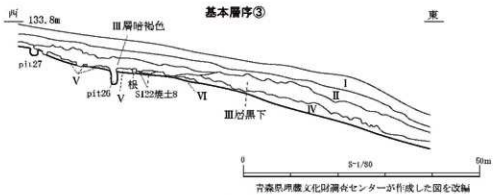


図7　基本層序③

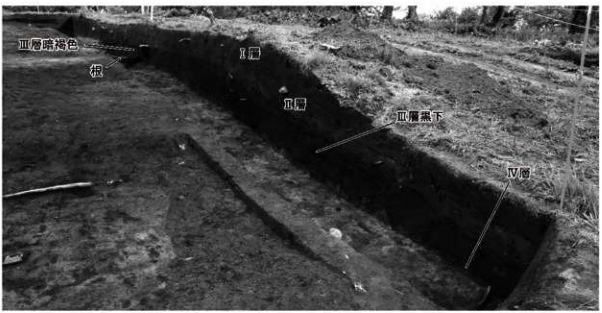


写真1　基本層序③の写真（青森県埋蔵文化財調査センターが撮影した写真に加筆）

基本層序③の土層は、下位よりⅥ～Ⅰ層に区分される（図７、写真1）。Ⅵ層は褐色（7.5YR4/3）を呈する土層で、観察断面の中央部にわずかに見られる。Ⅴ層は黄褐色（10YR5/6）を呈する土層で、観察断面の西部に断続的に分布する。Ⅳ層はにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する土層で、観察断面の東部に連続的に分布する。Ⅲ層は、Ⅲ層黒下とⅢ層暗褐色に細分される。Ⅲ層黒下は黒褐色（10YR2/3）を呈する土層で、観察断面の東半分に見られる。Ⅲ層暗褐色は暗褐色（10YR3/3）を呈する土層で、観察断面の西半分に見られる。焼土粒、炭化物、及びⅤ層由来の粒子を含む。Ⅱ層は暗褐色（10YR3/3）を呈する土層で、観察断面全体に連続的に分布する。Ⅵ～Ⅷ層を母材とする粘質シルトを主体とし、円筒下層b1～b2式の土器が多く出土する。Ⅰ層はにぶい黄褐色（10YR4/3）を呈する土層で、観察断面全体に連続的に分布する。

基本層序④の土層は、下位よりⅧ層、Ⅷb層、Ⅷa層、Ⅵ層、Ⅴ層、Ⅲ～Ⅳ層、及びⅠ層に区分される（図８、写真２）。Ⅴ層を除き観察断面に連続して見られる。Ⅷ層は褐色（7.5YR4/6）を呈し、粘質で、硬い。黄褐色の軽石を含む。Ⅷb層は褐色（7.5YR4/6）を呈する硬い粘質土層である。上部に黄色い軽石をやや多く含む。また、全体にマンガン斑が認められる。頁岩の礫が産出した。Ⅷa層は褐

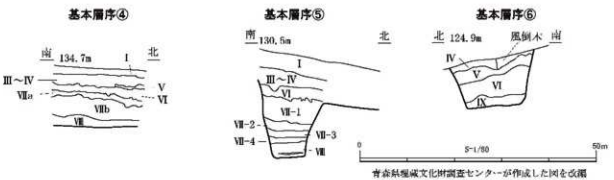


図８　基本層序④、⑤、⑥

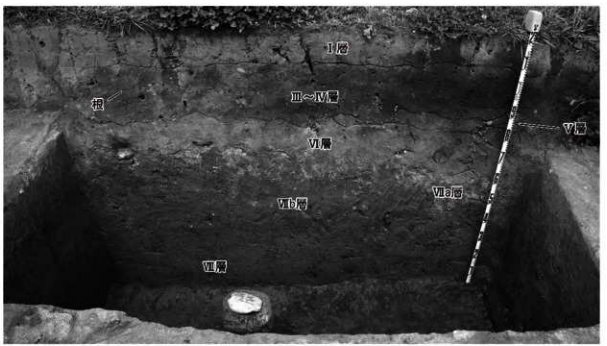


写真２　基本層序④の写真（青森県埋蔵文化財調査センターが撮影した写真に加筆）

写真３　基本層序⑤の写真（青森県埋蔵文化財調査センターが撮影した写真に加筆）

写真４　基本層序⑥の写真（青森県埋蔵文化財調査センターが撮影した写真に加筆）

色（10YR4/4）を呈する土層で、硬く締まっている。白色の粘土を多量に含み、Ⅶb層が風化したものであると考えられる。頁岩の礫が産出した。Ⅵ層は褐色（10YR4/4）を呈する土層で、粘質で、マンガン斑が認められる。頁岩の礫が産出した。Ⅴ層は暗褐色（10YR3/4）の土層で、径約3㎝の軽石を含む。この軽石は、十和田カルデラを起源とする火砕流堆積物の二次堆積物に由来すると考えられる。観察

断面北部にのみ見られる。Ⅲ～Ⅳ層は暗褐色（10YR3/4）を呈するシルト質の土層である。土壌化が進んでおらず、Ⅲ層とⅣ層の境界は不明瞭である。

基本層序⑤の土層は、下位よりⅧ層、Ⅶ-4層、Ⅶ-3層、Ⅶ-2層、Ⅶ-1層、Ⅵ層、Ⅲ～Ⅳ層、及びⅠ層に区分される（図８、写真３）。全層とも、観察断面に連続して観察される。Ⅷ層は黄褐色（10YR5/8）を呈する成層した土層で、黄褐色の粘土粒を主体とする。褐色（10YR4/6）の粘土質土のレンズを挟む。Ⅶ-4層は褐色（10YR4/6）を呈するシルト～砂質土層で、径5㎜程度のマンガン斑が認められる。また、松木平層に由来する岩片を多量に含む。Ⅶ-3層は褐色（10YR4/4）を呈する成層したシルト質粘土層で、マンガン斑が認められる。白色の岩片を含む。Ⅶ-2層は褐色（10YR4/6）を呈する成層した粘土質土層で、マンガン斑が認められる。岩片を含む。Ⅶ-1層は褐色（10YR4/6）を呈する粘土質土層で、マンガン斑が認められる。上部にクラックが発達する。Ⅵ層との境界は、凹凸が著しい。Ⅵ層はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈するシルト質粘土層で、Ⅷ層の風化物に由来している可能性がある。Ⅲ～Ⅳ層は黒褐色（10YR2/2）の土層である。Ⅲ層に類似するが、風倒木等の影響を受けている可能性がある。Ⅰ層は黒色（10YR2/1）を呈する土層である。

基本層序⑥の土層は、Ⅸ～Ⅳ層に区分される（図８、写真４）。Ⅳ層を除き観察断面において連続して観察される。Ⅸ層は明黄褐色（10YR6/6）を呈する礫層である。人頭大の礫を含む。Ⅵ層はにぶい黄褐色（10YR5/3）を呈する土層で、粘性は弱いが、しまりは強い。径5～10㎜の礫を含む。Ⅴ層は黄褐色（10YR5/6）を呈するロームである。粘性は弱いが、しまりは強い。径5～10㎜の礫を含む。Ⅳ層はにぶい黄褐色（10YR5/4）を呈する土層で、粘性、しまり共に弱い。径5～10㎜の礫を含む。風倒木のために観察断面の北半部においてのみ見られる。

基本層序⑦の土層は、下位よりⅥ層、Ⅵa層、Ⅴa層、Ⅳ～Ⅰ層に区分される（図９、写真５、６）。Ⅵa層及びⅤa層は観察断面で連続的に観察されるが、擾乱のためにⅣ～Ⅰ層は観察断面の主に北側で見られる。最下位のⅥ層は掘り下げたピット内で見られた。Ⅵ層は褐色（10YR4/4）を呈するローム層で、しまり、粘性共に強い。Ⅵa層は褐色（10YR4/4）を呈するローム層で、しまり、粘性共に強い。Ⅵ層の風化部と考えられる。Ⅴa層は褐色（10YR4/6）を呈する中～粗粒のローム層で、しまりは強いが、粘性は弱い。十和田カルデラを起源とする火砕流堆積物の二次堆積物に由来する軽石を多量に含む。Ⅳ層は暗褐色（10YR3/4）を呈する細～粗粒土層で、しまり、粘性共に弱い。Ⅴ層に由来するロームの粒子を少量含む。Ⅲ層は黒色（10YR2/1）を呈する細粒土層で、しまり、粘性共に弱い。Ⅱ層は黒色（10YR2/1）を呈する細～中粒土層で、しまり、粘性共に弱い。炭化物を少量含む。Ⅰ層は黒色（10YR2/1）を呈する土層である。

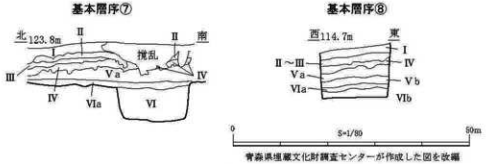


図９　基本層序⑦、⑧

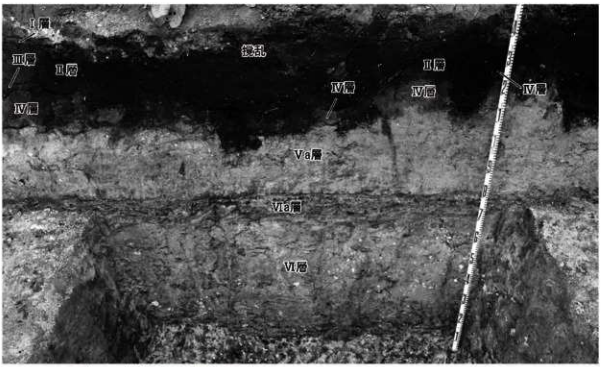


写真５　基本層序⑦南側の写真（青森県埋蔵文化財調査センターが撮影した写真に加筆）

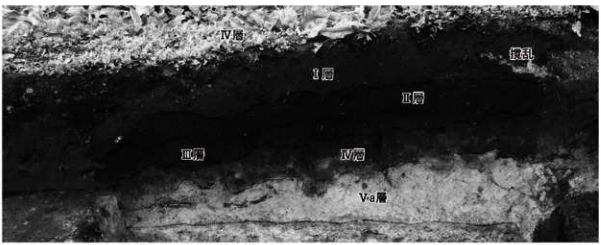


写真６　基本層序⑦北側の写真（青森県埋蔵文化財調査センターが撮影した写真に加筆）

基本層序⑧の土層は、下位よりⅥb層、ⅥaⅤ層、Ⅴb層、Ⅴa層、Ⅳ層、Ⅱ～Ⅲ層、及びⅠ層に区分される（図９、写真７）。全層とも観察断面で連続的に観察される。Ⅵb層は褐色（10YR4/6）を呈するロームで、しまり、粘性共に強い。本層下部には径10～20㎝の礫が含まれる。ⅥaⅤ層は褐色（10YR4/4）を呈するローム層で、しまり、粘性共に強い。Ⅵb層の風化層と考えられる。Ⅴb層は黄褐色（10YR5/6）を呈する細～中粒ローム層で、しまりは強いものの、粘性は弱い。Ⅴa層は褐色（10YR4/6）を呈する中～粗粒ローム層で、しまりは強いものの、粘性は弱い。十和田カルデラを起源とする火砕流堆積物の二次堆積物に由来する軽石を多量に含む。Ⅳ層は暗褐色（10YR3/4）を呈する細～粗粒土層で、しまり、粘性共に弱い。Ⅴ層由来のロームの粒子を少量含む。Ⅱ～Ⅲ層は黒色（10YR2/1）を呈する細～中粒土層で、しまり、粘性共に弱い。炭化物を少量含む。Ⅰ層は黒色（10YR2/1）を呈する土層である。

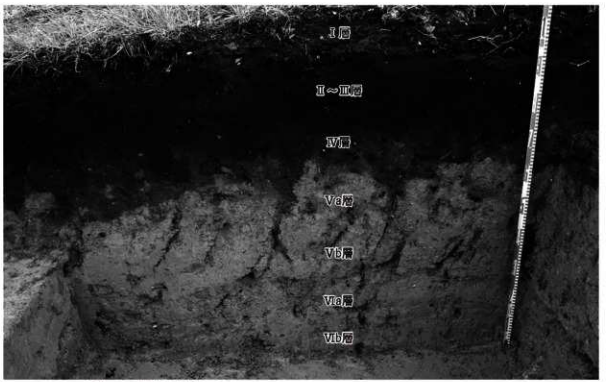


写真7　基本層序⑧の写真（青森県埋蔵文化財調査センターが撮影した写真に加筆）

引用文献

今井敏信・堀田報誠(1973)地形分類図．青森県農林部編，5万分の1土地分類基本調査「弘前」，国土庁，東京，p. 13-18.

金谷太郎(1949)弘前盆地南縁部の地質．地質学雑誌，第55巻，p. 181.

北村　信・岩井武彦(1963)青森県の第三系．青森県編，青森県地質説明書．青森県，青森，p. 3-64.

能美佳央・根本直樹(1994)青森県津軽盆地南西縁に分布する上部新生界の有孔虫群．日本地質学会第101年学術大会講演要旨，p. 44.

岡田尚武(1988)東北日本北部の新第三系における石灰質ナノ化石層序．飯島　東編，新第三紀珪質岩の総合研究(総合研究A昭和62年度研究成果報告書)，p. 81-86.

大沢　穠(1962)5万分の1地質図幅「弘前」及び同説明書．地質調査所，川崎，52＋4 p.

山口義伸(2001)津軽平野南部の地形発達史．「新編弘前市史」編纂委員会編，新編弘前市史通史編1(自然・原始)，弘前市企画部企画課，弘前，p. 51-110.

第2節　歴史的環境

沢部(2)遺跡の歴史的環境として、本稿では発掘調査が行われた縄文・弥生時代の周辺遺跡を主に扱う。範囲は弘前市南部の丘陵地域のうち西は梵内川流域、東は大沢川流域とした。なお、平安時代以降については、沢部(1)遺跡の報告書を参照されたい。

沢部(1)・(2)遺跡は1973年に弘前南部地区広域営農団地農道(アップルロード)建設に伴う緊急調査として発掘されている(青森県教委1974)。その当時は沢部(1)遺跡が沢部Ⅰ号遺跡、沢部(2)遺跡が沢部Ⅱ号遺跡と呼称されていた。沢部(1)遺跡では十腰内Ⅰ群土器が出土し、平安時代の土師器・須恵器が出土した。沢部(2)遺跡では、円筒下層a・b式期の遺物が出土した。つがる市石神遺跡、鰺ヶ沢町浮橋貝塚に続く津軽地方での円筒土器文化のまとまった資料となった。石器は各種形態の石匙や半円状扁平打製石器が、石製品はけつ状耳飾未製品や円形の岩版が報告された。また近隣の天王沢遺跡の調査もあわせて行われた。遺跡残存部分の小面積の調査となり、縄文時代後期の十腰内Ⅰ群土器を主体として晩期土器も出土した。

その後、沢部(1)遺跡では、弘前市教育委員会による発掘調査が行われ、フラスコ状土坑から晩期初頭の土器が2個体出土した。他に最花・大木10式併行・後～晩期の縄文土器、弥生後期の天王山式土器が報告された(弘前市教委1998)。2016年の調査では遺物が出土しなかった(弘前市教委2017)。

沢部(1)・(2)遺跡に近接する遺跡では、小栗山館遺跡、鷲ノ巣(1)・(3)遺跡が発掘調査されている。小栗山館遺跡は弘前市教育委員会により3度の調査が行われ、円筒下層a式、円筒上層b～e式、十腰内Ⅰ群、大洞B～A'式などの縄文時代の土器、砂沢式・遠賀川系・田舎館式の弥生土器が出土している(弘前市教委1997・2000a・2014)。円筒下層a～c式土器は、沢部(2)遺跡から多数出土しており、関連する可能性がある。鷲ノ巣(1)遺跡は弘前市教育委員会の調査で縄文時代後期の土器が出土し(弘前市教委2003)、青森県教育委員会の調査で十腰内Ⅰ～Ⅲ群にかけての土坑2基、縄文時代の土坑2基の他、円筒下層d式・十腰内Ⅰ式・晩期・弥生時代後期の土器片が出土した。鷲ノ巣(3)遺跡では縄文時代前期中葉の竪穴建物跡1棟、前期中葉以降の土坑6基、円筒下層a・b式・十腰内Ⅰ群・晩期～弥生時代後期の土器片が出土した。沢部(2)遺跡と共通する前期中葉の遺構とともに両面調整石器・石核の出土が注目される。両面調整石器の中には石鏃の製作途中、石槍・石鏃の製作途中で破損した可能性があると記載されたものがある。沢部(2)遺跡でも多数の石核や剥片とともに類似した出土品がある。以上の遺跡は、いずれも大和沢川右岸の小栗山神社付近に位置している。小栗山神社付近の丘陵は珪質泥岩(頁岩)から成るとされる(鎌田2001)。鷲ノ巣(3)遺跡と沢部(2)遺跡には珪質頁岩の原産地に位置する石器製作遺跡としての性格が現われている。

これらと距離的に近い遺跡としては大和沢川の西に位置する土淵川水系にある若葉遺跡が円筒下層式の集落として重要である。弘前市教育委員会による発掘調査が行われ、円筒下層b～d式期の土坑が5基、配石遺構が1基出土している(弘前市教委2004a・2006)。主体となるのは円筒下層d式期である。

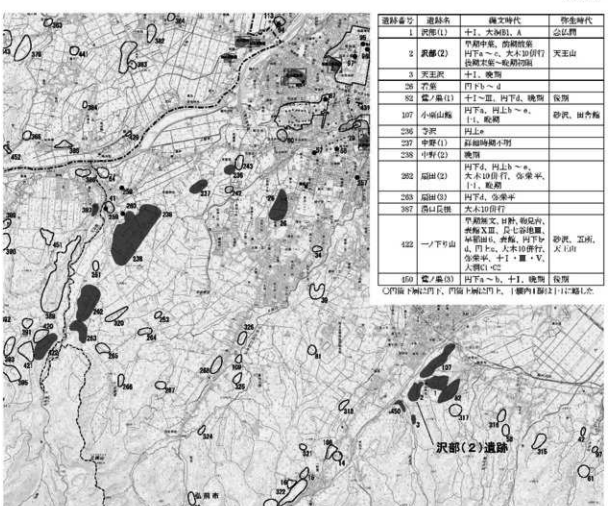
調査例が多いのは、沢部(2)遺跡から西に約6～7km離れた梵内川流域である。今回の調査で沢部(2)遺跡は縄文時代中期末葉の大木10式併行期の集落でもあることが判明したが、梵内川左岸の湯口長根遺跡から同時期の竪穴建物跡3棟、土坑2基が調査されている(相馬村教委1999)。一ノ下

り山遺跡からも縄文時代中期末～後期初頭の竪穴建物跡１棟と遺物が出土している。栩内川の右岸及び周辺で縄文時代の遺物が出土したのは扇田(2)・(3)遺跡(青森県教委2010)、中野(1)・(2)遺跡(弘前市教委2000b・2002・2004b)、寺沢遺跡(弘前市教委2000b)である。それらを含めて、弘前市南部の丘陵地域の遺跡調査状況を表にまとめたが、全体的に調査例が少ない地域である。沢部(2)遺跡の本報告がこの地域の円筒下層式期と中期末葉の大木10式併行期を代表するものになるといえる。

なお中期末葉の時期では、約20km離れているが、西目屋村の津軽ダム関係の遺跡群が面的な調査が行われており比較対照できる。水上(2)遺跡で40棟の竪穴建物跡が見つかったほか、川原平(1)遺跡では竪穴建物跡が２棟、大川添(3)遺跡で４棟、大川添(4)遺跡で３棟見つかっている。川原平(6)遺跡では中期末葉～後期初頭の竪穴建物跡が10棟見つかっており、うち１棟は長軸が14.2mの大型のものであった。川原平(4)遺跡A地区でも当該時期のものが７棟見つかっている。鬼川辺(3)遺跡では１棟が中期末葉の可能性があるとされる。水上(2)遺跡は前期以来の大集落であるが、大型竪穴建物跡を持つ川原平(6)遺跡も出現し、一定の距離を置きながら、小規模集落とともに群をなしている。

そして本遺跡では中期末葉の竪穴建物跡がまとまって見つかっている。湯口長根遺跡だけではなく、この時期に属する未調査の小規模集落が周辺に複数あることが想定される。

(齋藤)



遺跡番号	遺跡名	縄文時代	弥生時代
1	沢部(1)	十Ⅰ、大洞B1、A	砂沢期
2	沢部(2)	早期中葉、前期前葉、中期末～e、大木10併行、後期末葉～晩期初頭	天王山
3	天王沢	十Ⅰ、晩期	
26	若葉	円下b～d	
82	堂ノ前(1)	十Ⅰ～Ⅱ、円下d、晩期	保store
107	小栗山猫	円下a、円上b～e、十Ⅰ、晩期	砂沢、垂柳
236	寺沢	円上e	
237	中野(1)	前期時期不明	
238	中野(2)	晩期	
262	扇田(2)	円下d、円上b～e、大木10併行、弥栄平、十Ⅰ、晩期	
263	扇田(3)	円下d、弥栄平	
267	鳴山長根	大木10併行	
422	一ノ下弓山	早期後葉、田戸、物見台、表館Ⅹ期、及七谷地貝、早期前半、表館、円下b、円上e、大木10併行、弥栄平、十Ⅰ・Ⅱ・V、大洞C1・C2	砂沢、垂柳、大Ⅰ式
459	堂ノ前(3)	円下a～b、十Ⅰ、晩期	保store

○円筒下層d2円下、円筒下層d3円下、↑標高(m)は2.1に基づく

第３図　周辺の遺跡

第３章　検出遺構と出土遺物

第１節　遺跡の概要

沢部（2）遺跡は、弘前市役所から南へ約5.5kmに位置する。遺跡の周囲にはりんごを主とする果樹園が営まれ、遺跡の北東約300ｍには小栗山神社が所在する。遺跡からは、北東に平野部を一望でき、調査区の南部では、北西方向に岩木山の頂を望むことができる。

本遺跡は昭和48年に弘前南部地区広域営農団地農道（通称アップルロード）の建設に先駆け、青森県教育委員会により発掘調査が実施されている。当時の発掘調査報告書（青森県教委1974）によれば、本遺跡は昭和36年に青森県教育委員会が委嘱して行った遺跡分布調査により、「403長坂遺跡」の名で登録されていたものの、昭和48年の発掘調査に伴う予備調査の結果、「長坂遺跡」の範囲には２か所に遺物の散在が認められ、また「長坂」の地名が俗称であることが判明したことから、小栗山の集落に近い箇所を「沢部Ⅰ号遺跡」、もう一方を「沢部Ⅱ号遺跡」とした、との記述がある。今回報告を行う沢部（2）遺跡は、その際「沢部Ⅱ号遺跡」と命名された遺跡にあたる。昭和48年の「沢部Ⅱ号遺跡」の発掘調査では、遺構は柱穴２基が検出されたのみであるが、遺物は、「下層A式土器片」や「石鏃，石匙，半円状扁平打製石器，石槍，（後略）」などの「豊富な資料」が出土している。

今回の発掘調査は、総延長約550ｍ、幅約15～40ｍの範囲を対象とした。昭和48年調査区の北～西側に位置する。調査区の南部は尾根状地形の頂部にあたり、標高134～138ｍを測る。斜度20度前後の斜面を介し、調査区の中央部から北部は標高113～128ｍの緩斜面となっている。

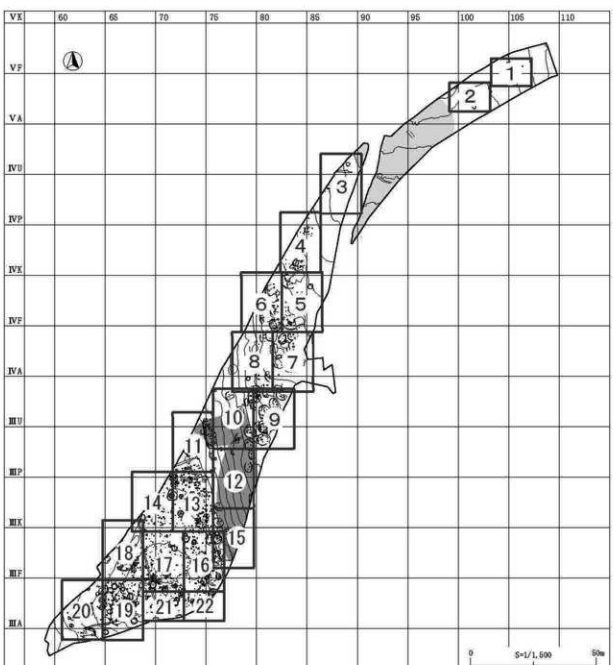
調査区内の基本層序はⅠ～Ⅸ層まで確認した（第２章第１節）。Ⅰ層は表土であり、調査区全域で確認できる。Ⅱ～Ⅲ層は縄文時代以降の包含層であるが、調査区南部では認められない。Ⅱ層とⅢ層は調査区中央部では明瞭に分層できるが、調査区北部では層界が不明瞭である。Ⅲ層の堆積は厚く、部分的に細分が可能である。縄文時代前期中葉～後葉、早期、前期前葉、中期末葉、後期後葉から晩期前葉の土器が包含される。Ⅳ層は地山漸位層である。調査区全域で確認できる。Ⅴ～Ⅸ層は地山層である。Ⅴ・Ⅵ層は調査区南部ⅢH～ⅢNライン付近では認められない。Ⅶ層は調査区全域で確認できる。遺構確認面は、調査区南部ではⅤ～Ⅶ層、調査区中央部ではⅢ～Ⅴ層、調査区北部ではⅤ層である。なお、捨場ではⅤ～Ⅶ層に由来するⅡａ層、Ⅲ～Ⅶ層に由来するⅡｂ層が堆積する。Ⅱａ層については堆積範囲が限定的であるものの、範囲外においてもⅢS～ⅢU74～76グリッド付近で類似層が確認されており、それについては「Ⅱａ類似層」とした（第３章第３節７参照）。

遺構は、調査区南部では、縄文時代前期中葉～後葉および中期末葉～後期初頭の竪穴建物跡や中期末葉～後期初頭の掘立柱建物跡のほか、縄文時代前期中葉～後葉および中期末葉～後期初頭のフラスコ状土坑や柱穴が数多く検出された。その他にも土器埋設遺構や焼土遺構などが検出されている。また、斜面には縄文時代前期中葉の捨場が形成され、多くの遺物が出土した。調査区中央部はⅣC～ⅣMライン付近で大規模な土地改変を受けていたものの、遺構の消失は免れており、縄文時代前期中葉～後葉の竪穴建物跡が多数確認されたほか、縄文時代中期末葉の竪穴建物跡や、縄文時代前期中葉～

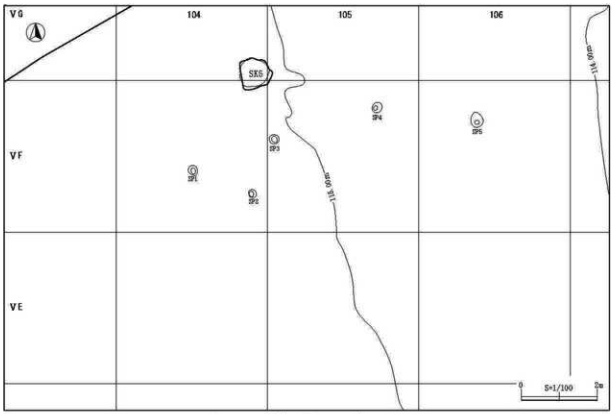
後葉の土坑も検出した。調査区北部では沢が検出され、遺構・遺物は少ないものの、北端部で中世の製炭土坑を１基確認している。なお、古代以降の土坑は調査区南部でも６基検出されている。

今回の調査で検出した遺構は、竪穴建物跡74棟、掘立柱建物跡２棟、土坑94基、焼土遺構18基、土器埋設遺構14基、捨場１か所である。遺物は縄文時代の土器や石器、土製品、石製品のほか、漆液容器、赤色顔料容器、アスファルト容器、アスファルト塊が出土しており、弥生土器や土師器も少量出土した。総量はダンボール箱で約700箱である。

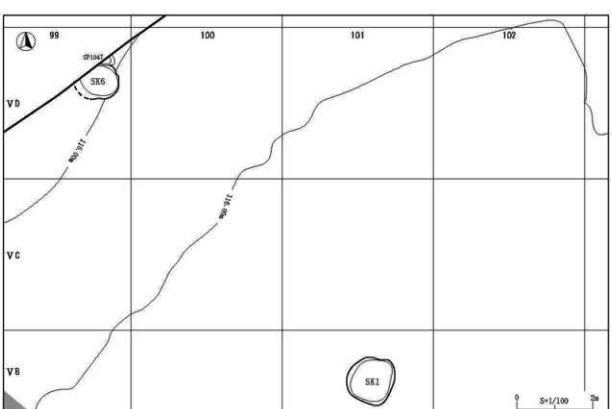
（岩井）



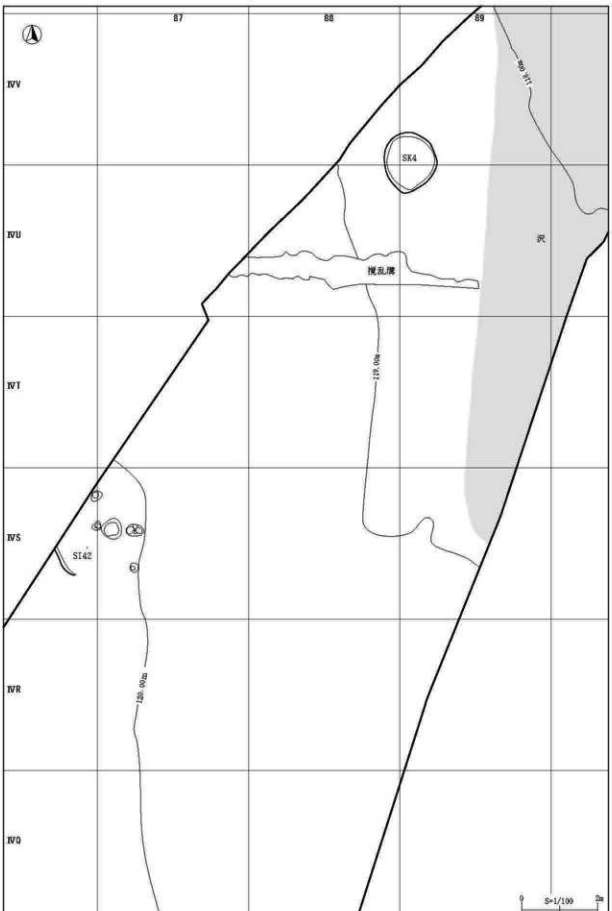
第４図　遺構配置図分割割付図



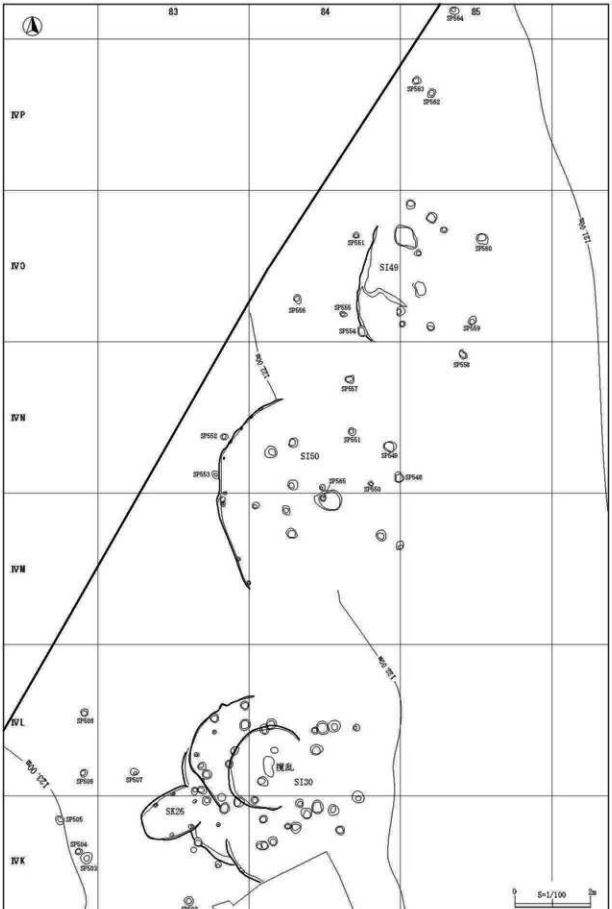
第５図　遺構配置図（分割図１）



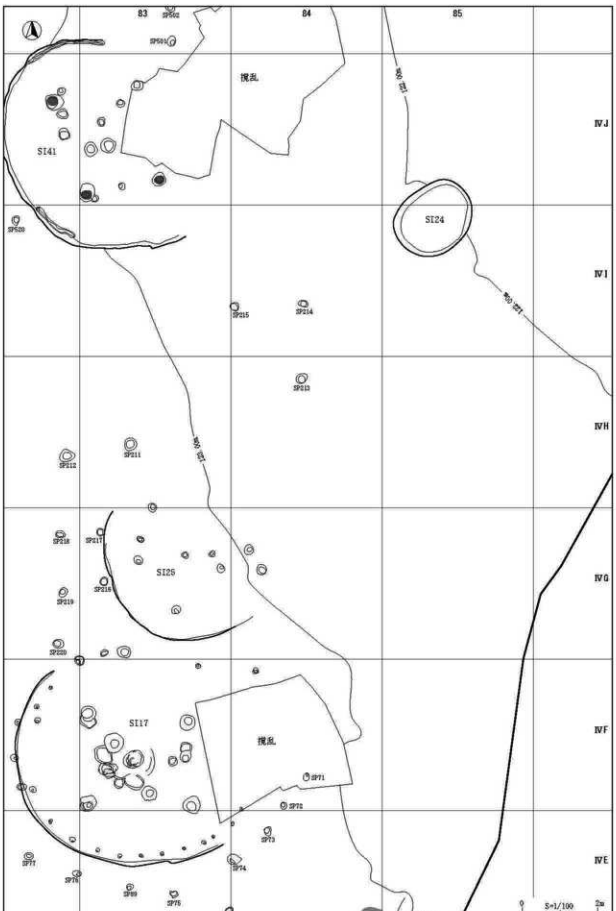
第５図　遺構配置図（分割図２）



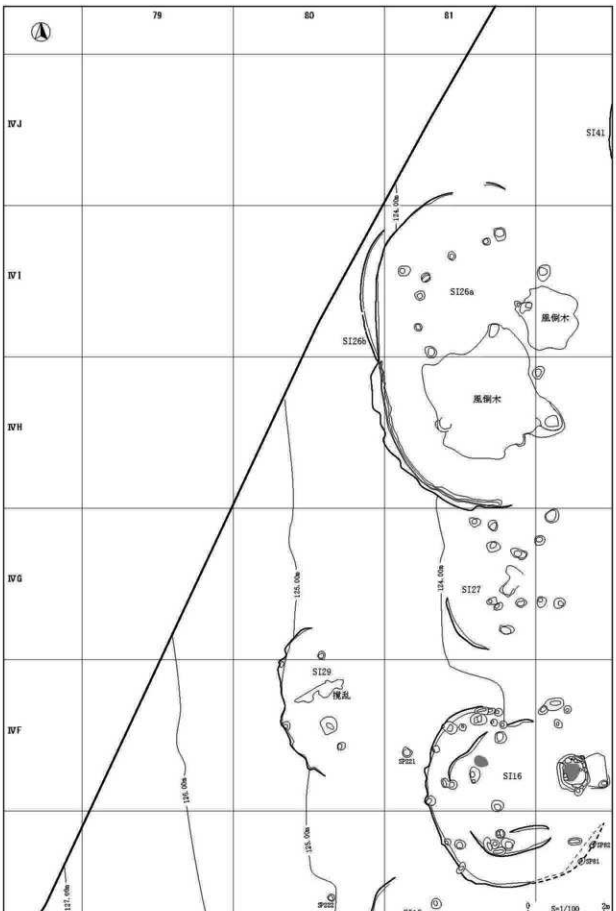
第５図　遺構配置図（分割図３）



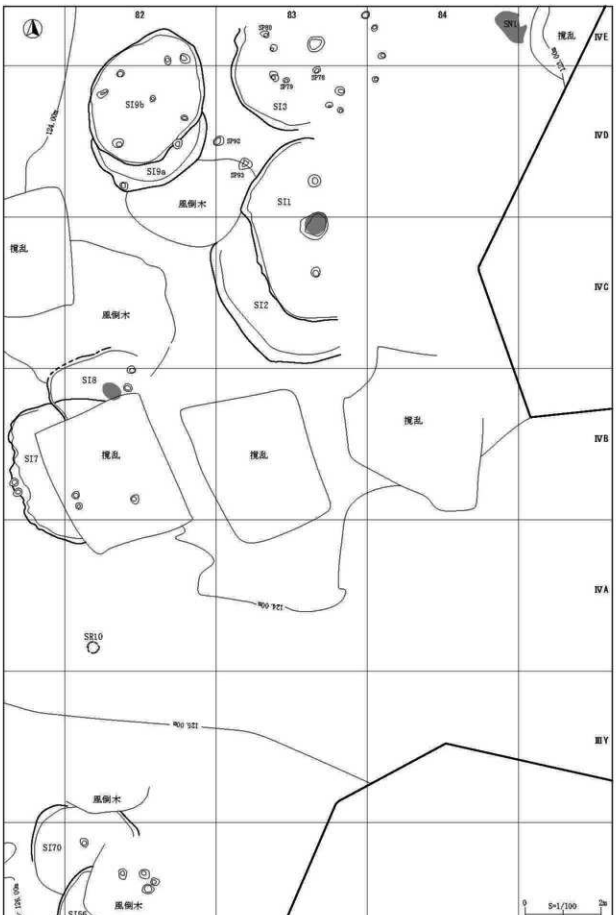
第５図　遺構配置図（分割図４）



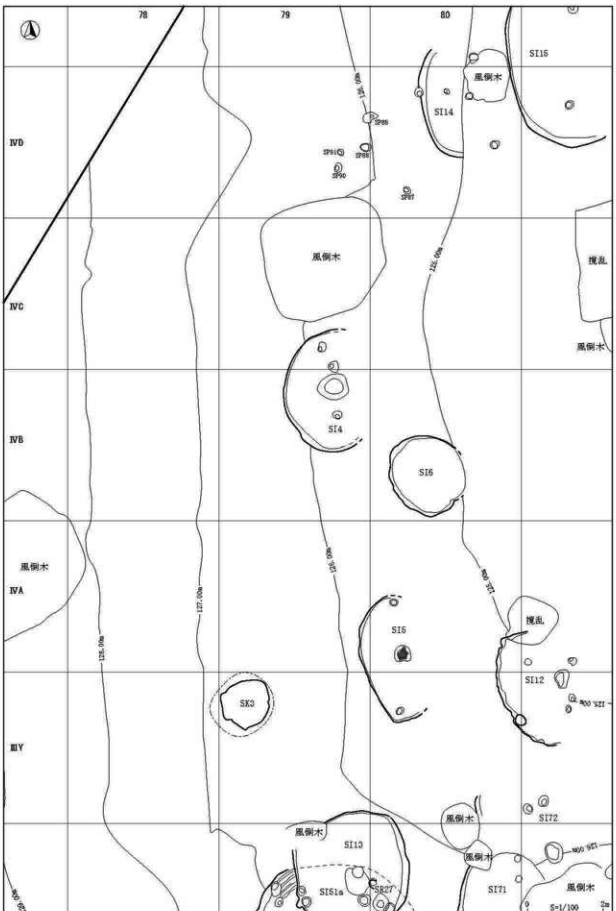
第５図　遺構配置図（分割図５）



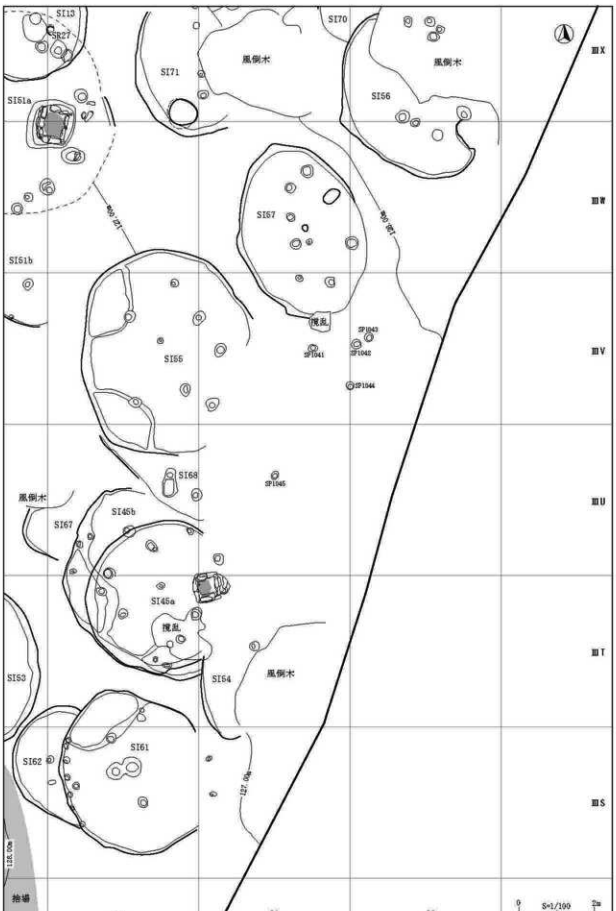
第５図　遺構配置図（分割図６）



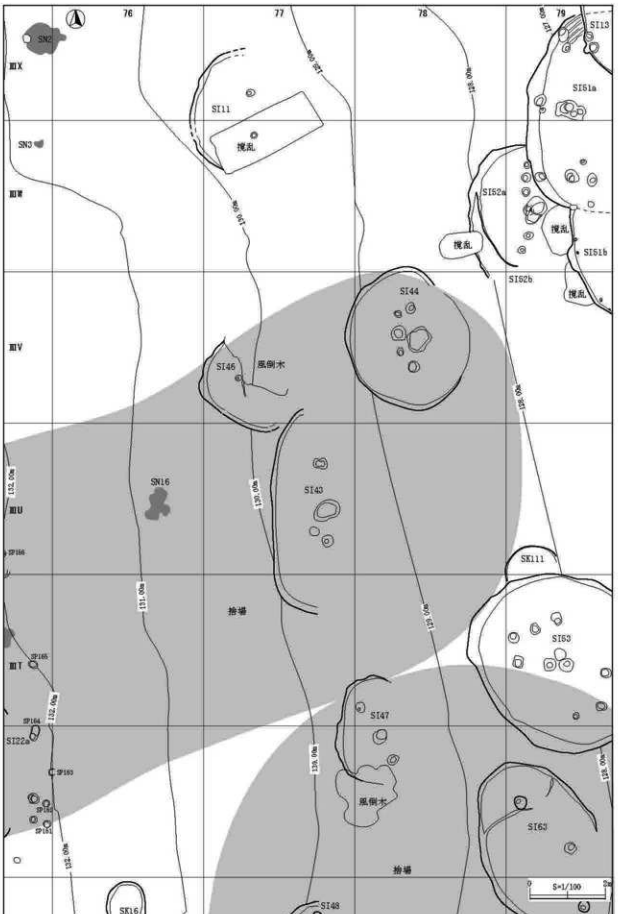
第５図　遺構配置図（分割図７）



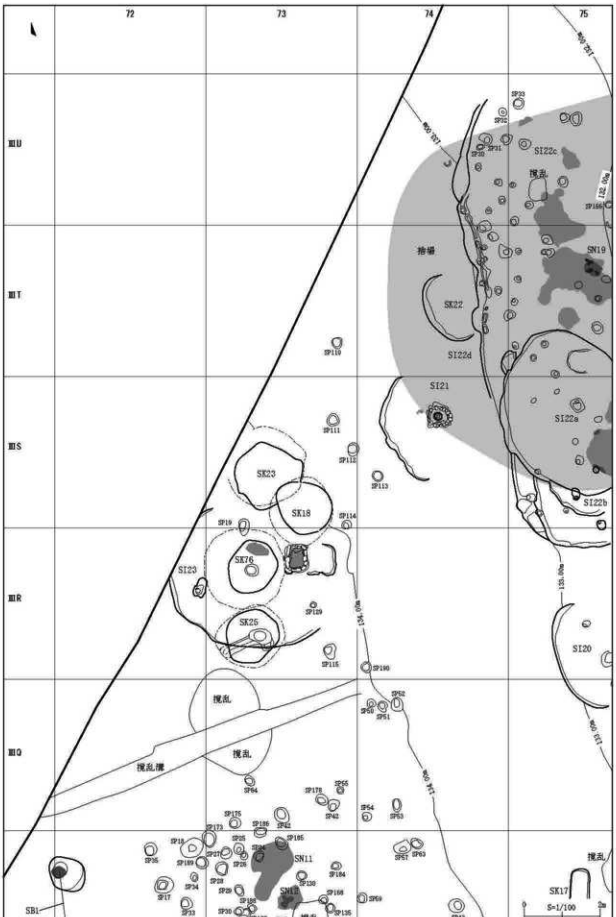
第５図　遺構配置図（分割図８）



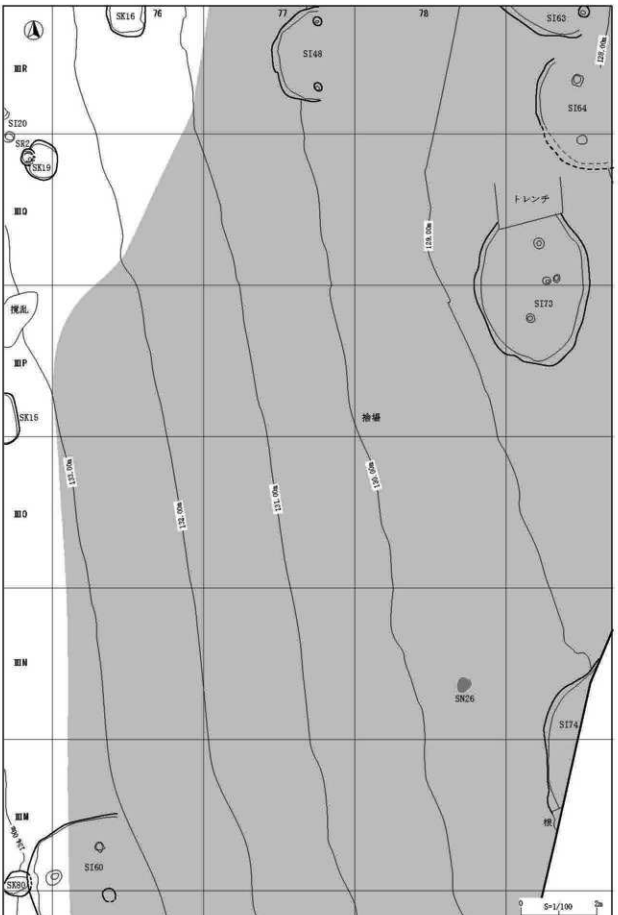
第５図　遺構配置図（分割図９）



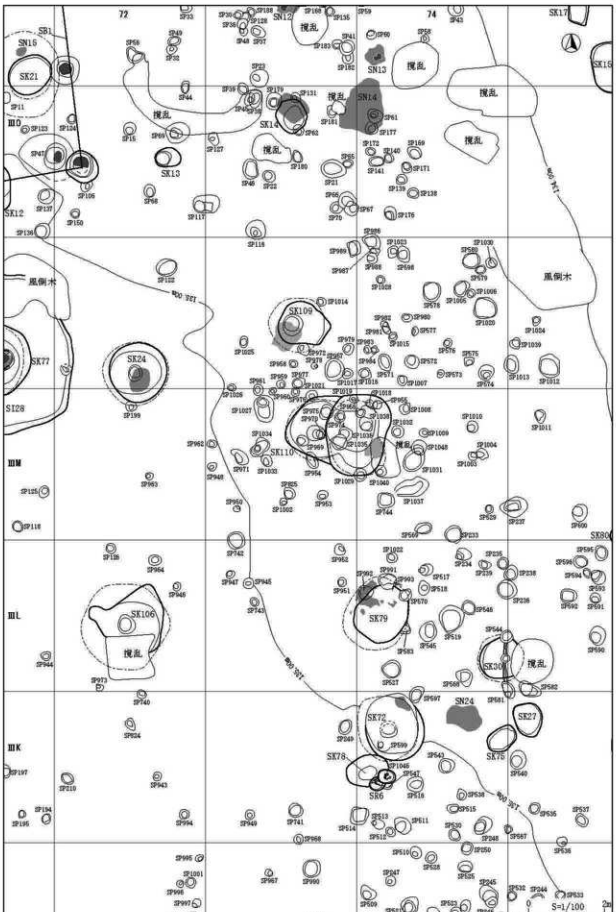
第５図　遺構配置図（分割図10）



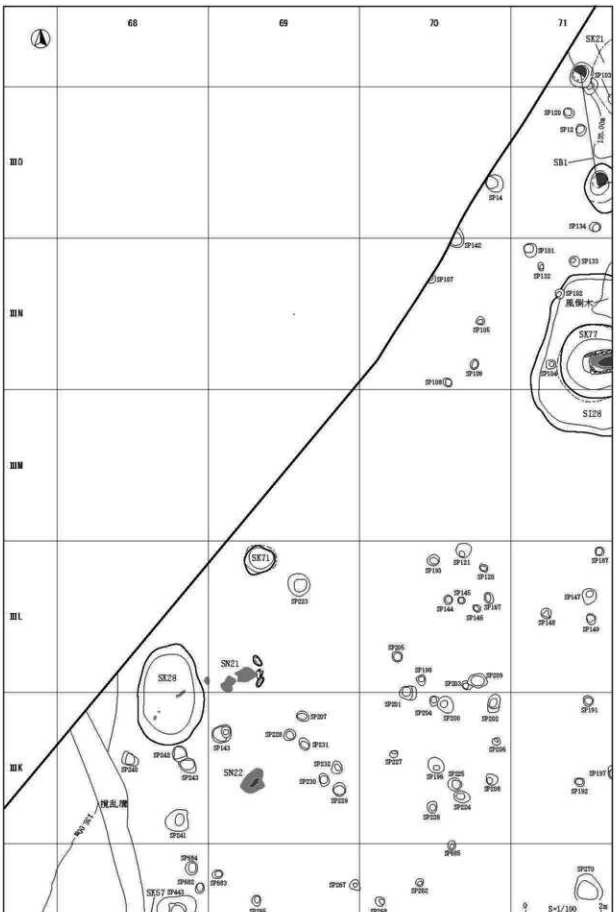
第５図　遺構配置図（分割図11）



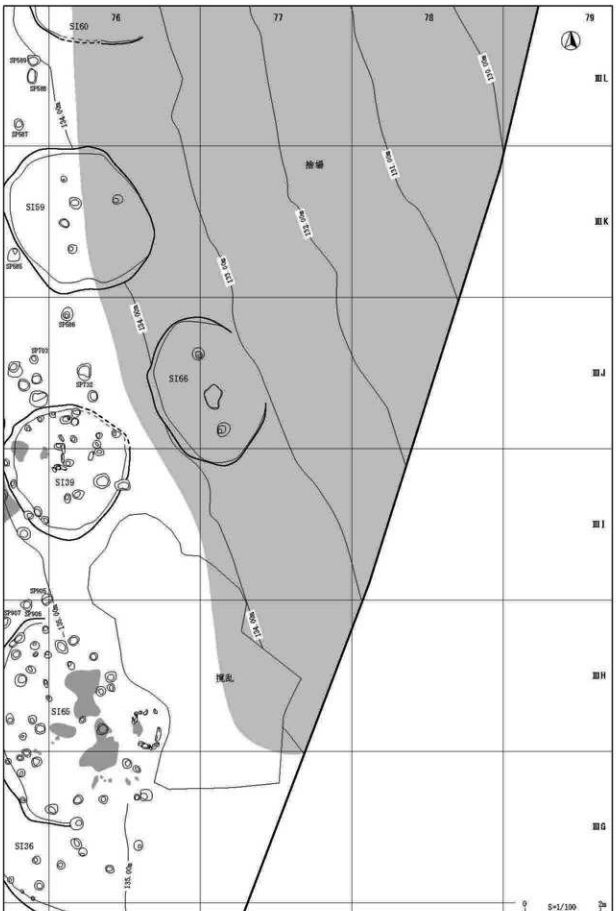
第５図　遺構配置図（分割図12）



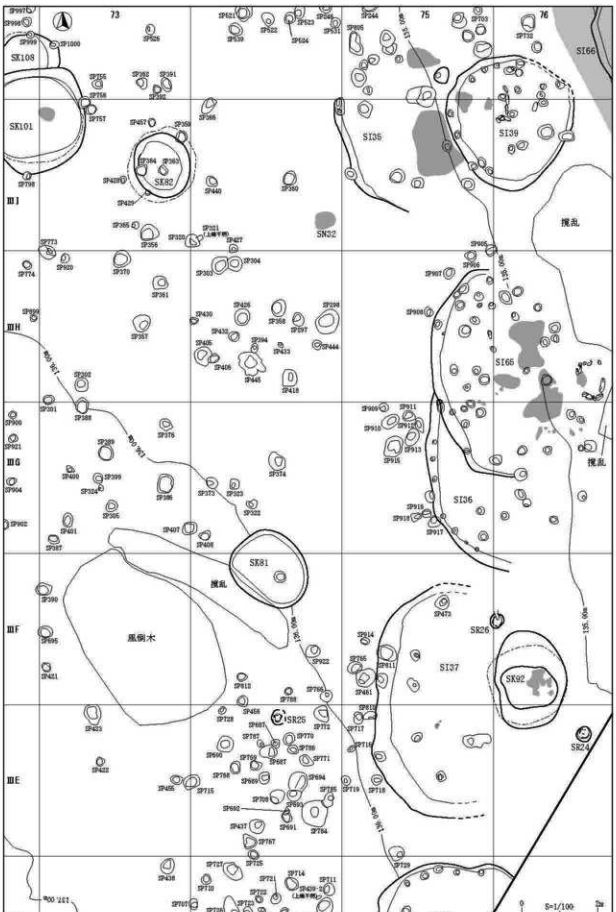
第５図　遺構配置図（分割図13）



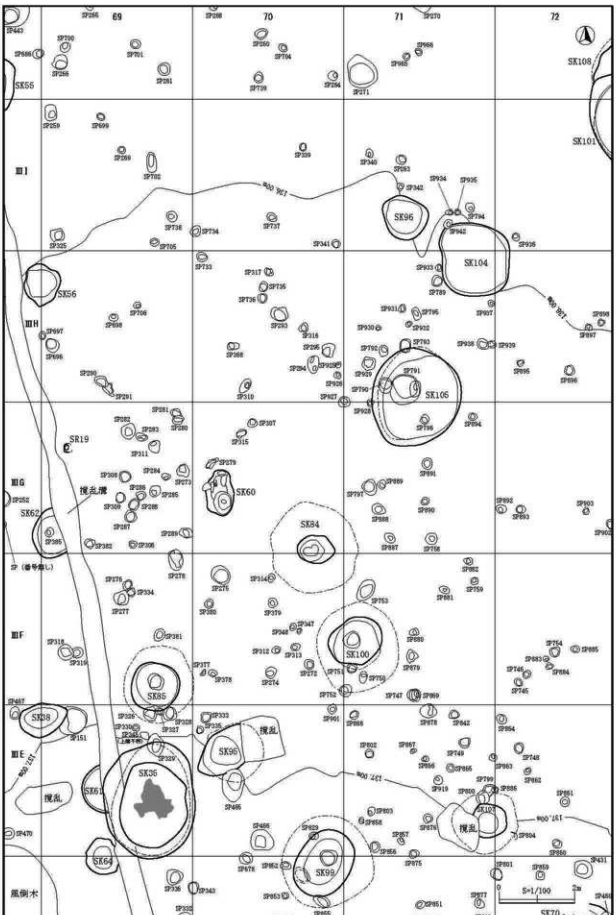
第５図　遺構配置図（分割図14）



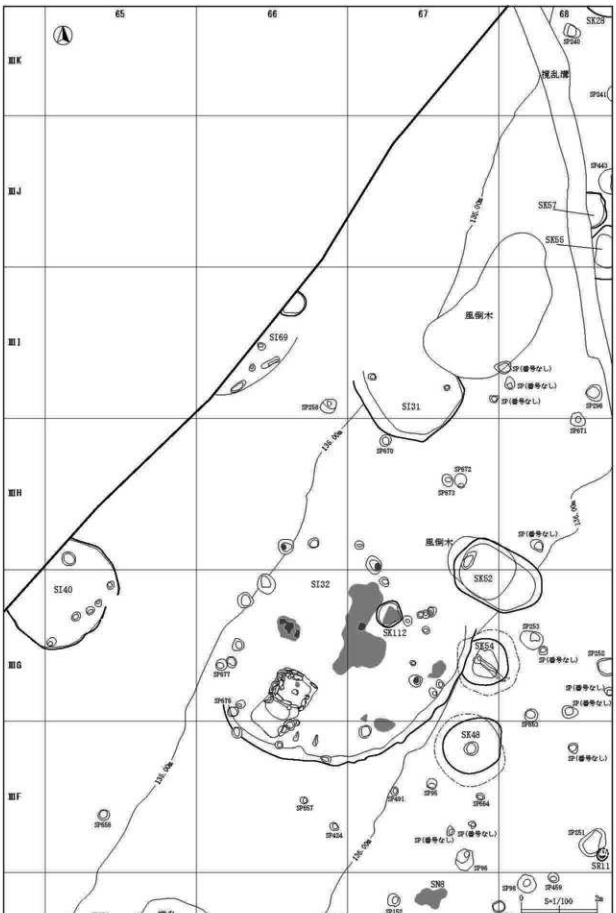
第５図　遺構配置図（分割図15）



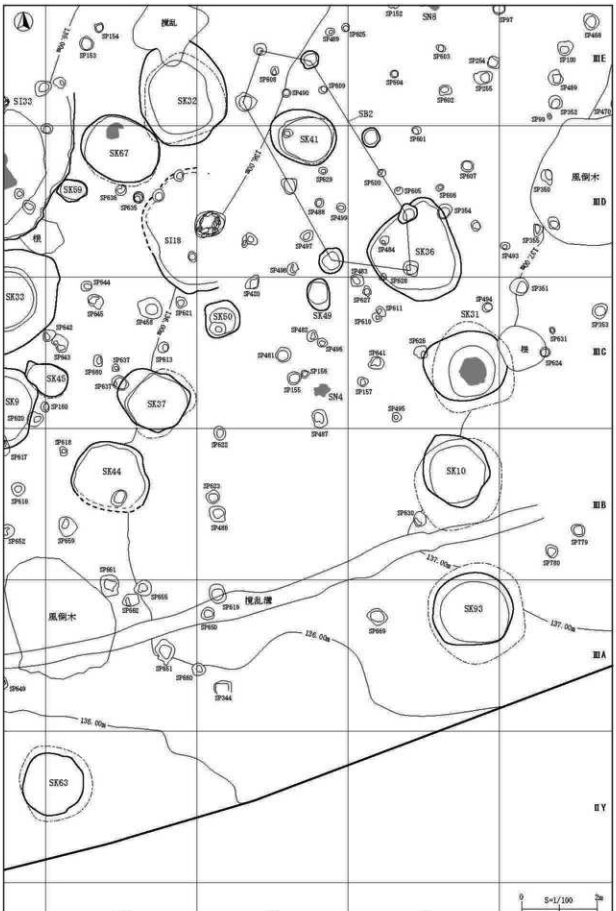
第５図　遺構配置図（分割図16）



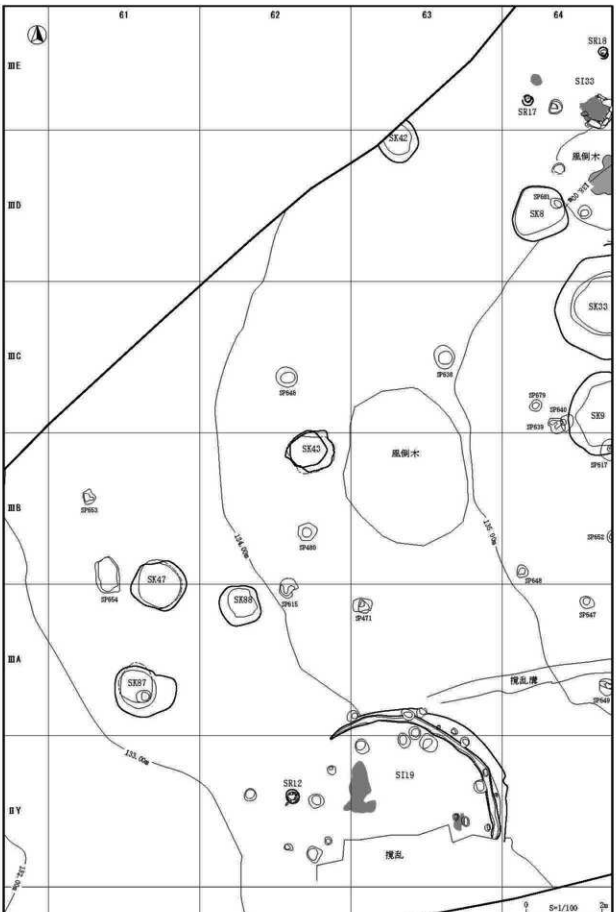
第５図　遺構配置図（分割図17）



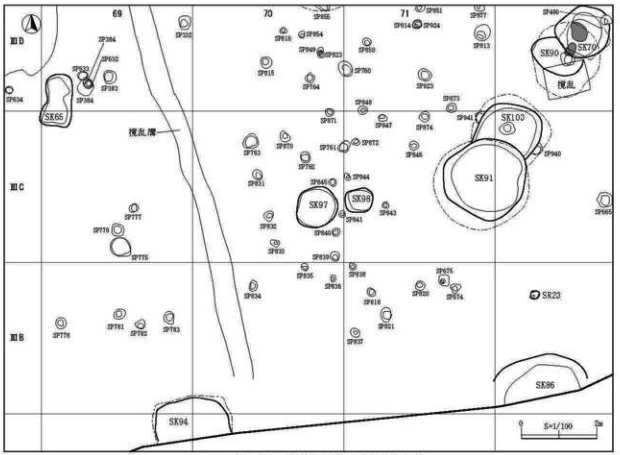
第５図　遺構配置図（分割図18）



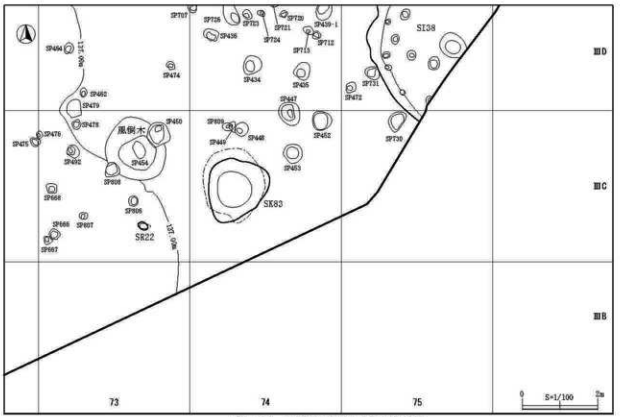
第５図　遺構配置図（分割図19）



第５図　遺構配置図（分割図20）



第５図　遺構配置図（分割図21）



第５図　遺構配置図（分割図22）

第2節　遺物の整理と分類

1　土器

本遺跡では、縄文時代早期、前期前葉、前期中葉～後葉、中期後葉、中期末葉、後期初頭、後期後葉～晩期初頭、弥生時代の土器が出土した。

〔掲載基準〕遺構内出土土器については、遺構の時期比定の重要な要素となる最も新しい時期の土器を最優先で抽出し、小破片であっても掲載した。その他、残存状態が良好な土器も掲載遺物としたが、混入と判断される土器については大破片であっても非掲載としたものもある。捨場出土土器の掲載基準については、「第3章 第3節 7捨場」の項に記載した。遺構外出土土器については、遺構内及び捨場出土土器で掲載されていない特徴的な遺物を抽出したほか、残存状態が良好な土器も掲載した。

なお遺構内から出土した早期の土器は、混入と判断されたため遺構外出土土器の項で扱っている。

〔写真撮影〕残存状態が良好なもののほか、早期の土器片や類例の少ないもの、実測図のみでは表現が十分でないものなどについて撮影した。

〔実測図等作成〕図化にあたっては、拓影を多用しているが、原体の種類が表現されるように留意した。また破片であっても可能な限り径を算出し、土器の形状の復元に努めたため、残存状態がよくない土器片では、本来の法量とは誤差が生じている可能性がある。

〔時期区分〕時期区分については特定の群別を用いず、土器型式名を用いた。土器型式を準用するに当たり、典拠した文献などは表のとおりである。なお、後期初頭の土器については、小破片のため型式比定に至っておらず、特定の型式名を用いていない。後期後葉～晩期初頭の土器については、粗製土器であり型式を特定しがたい。

〔土器観察表〕個別の土器の特徴については、第8表土器観察表に記載した。土器観察表の凡例は下記のとおりである。

・縄文時代早期及び前期中葉～後葉の土器は、外面特徴を「口頸部」「胴部」にわけて記載した。その他の時期の土器は、文様が部位単位で分離できないものもあり部位を限定せずに記載したものも多い。

・文様の記述にあたっては、次のように略記した。なお、回転文の場合は原体の種類のみを記載し、カッコ内に施文方向を記載した。結節回転文は横方向の施文が主流であることから、横以外についてのみ施文方向を記載している。

単軸絡条体第△類→単絡△　多軸絡条体→多絡

指頭圧痕→指圧　原体の側面押圧→押圧

LRとRL原体による結束第1種羽状縄文→結束1羽状

・法量のカッコについては、口径、底径は推定値を、器高は残存値を示す。

・焼成後の穿孔については、2個1対のものは「補修孔」、破損などにより1個のみ認められる場合は「穿孔」としている。

（岩井）

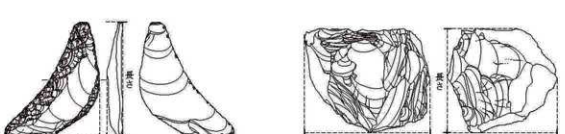
型式名	略称	時期表記	典拠
鳥木沢	－	早期中葉	八戸市教委1986
物見台	－	早期中葉	長尾2017a
ムシリⅠ	－	早期中葉	長尾2017a
表館	－	前期前葉	長尾2017b
早稲田6類	－	前期前葉	長尾2017b
円筒下層a	円下a	前期中葉	茅野2008
円筒下層b1	円下b1	前期中葉	茅野2008
円筒下層b2	円下b2	前期中葉・後半	茅野2008
円筒下層c	円下c	前期後葉・後半	茅野2008
榎林	－	中期後葉	小保内2008
大木10式並行	大木10	中期末葉	小保内2008
天王山系	－	弥生後期	工藤2005

2　石器

［器種と分類］

・石鏃(a有茎T基　b有茎Y基　c尖基　d平基　e円基　f凹基　g破損品)
・石鏃未成品
・石槍(a無茎　b有茎　c破損品)
・石匙(a縦型　b横型　c斜型　d両面加工で石槍状の先端を有するもの
　e両面加工で石錐状の先端を有するもの　f細部加工がほとんど加えられないもの　g破損品)
・石錐(a棒状　b摘みがあるもの　c先端のみ作出したもの　d石鏃転用品)
・石箆(a短冊型　b撥型　c大石平型　d未製品)
・両面調整石器
・スクレイパー類(a削器　b掻器)
・異形石器
・ピエス・エスキーユ
・二次加工剥片
・微細剥片
・剥片
・石核(a不定形　b多面への連続的な剥離により残核が棒状となるもの
　c縁辺からの連続的な剥離により平面形が円形状となるもの)
・原石
・磨製石斧
・凹石(複数の種類の使用痕跡があるものでは凹痕を主体とするもの)
・敲石(複数の種類の使用痕跡があるものでは敲打痕を主体とするもの)
・磨石(複数の種類の使用痕跡があるものでは磨面を主体とするもの)
・半円状扁平打製石器
・抉入扁平磨製石器
・加工礫
・石錘
・砥石
・石皿・台石

（齋藤）



第６図　石器計測値基準

3　土製品

以下のものを土製品とした。

・土偶
・耳飾り
・キノコ形土製品
・円盤状土製品
・三角形土製品
・ミニチュア土器
・粘土塊

4　石製品

以下のものを石製品とした。

・石棒　断面が円形の棒状石製品。
・石剣　両方の側面に刃部様の稜が形成される棒状石製品。
・石刀　片方の側面に刃部様の稜が形成される棒状石製品。
・岩偶
・円盤状石製品　平面が円形を基調とする板状の石製品。
・線刻礫
・垂飾品
・有孔石製品
・不明石製品　上記分類に該当しない石製品で、特定の器種名を充てられないもの。

（工藤）

第３節　検出遺構と遺構内遺物

１　竪穴建物跡

竪穴建物跡は74棟検出した。縄文時代前期（円筒下層ａ～ｃ式期）が49棟、中期末葉（大木10併行期）～後期初頭が14棟、後期後葉～晩期前葉が１棟である。時期を特定し難い９棟の建物については、縄文時代前期（円筒下層ａ～ｃ式期）もしくは中期末葉（大木10併行期）～後期初頭の可能性が高い。

第１号竪穴建物跡（SI1）（遺構第７図、遺物第61図、遺構写真4、遺物写真97）

［位置・確認状況・重複関係］IVC・IVD83グリッドに位置し、Ⅳ～Ⅴ層で検出した。SI2と重複し、本遺構が新しい。

［規模・形態］長軸4.9m、短軸3.2m以上、検出面からの深さは20cmである。平面形は残存部分から、楕円形と推定される。壁は開いて立ち上がり、床面はほぼ平坦で、部分的に硬化している。

［炉］床面中央部に浅く皿状に掘り込んだ炉がある。規模は長軸73cm、短軸69cmで円形を呈し、深さは８cmである。炉内には灰のようなものが検出された。火床面は検出されなかった。

［柱穴・付属施設］ピットは２基検出した。炉を挟んで南北に位置するため、主柱穴と考えられる。

［覆土］４層に分層した。Ⅲ層由来の黒色～黒褐色土でⅤ層由来の黄褐色ローム粒が部分的に混入する。

［出土遺物］土器686g、石匙１点、磨石１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器１点、石器１点を図示した。土器はいずれも小片であり、覆土から出土したことから、混入と推定される。61-1は円筒下層ａ～b1式に比定される深鉢の頸部である。円形刺突を伴う隆帯が巡る。

［時期・所見］周囲に位置する同形態の建物跡の時期や出土遺物などから、本遺構の時期は円筒下層ａ～ｃ式期と推定される。

（中澤）

第２号竪穴建物跡（SI2）（遺構第７図、遺構写真４）

［位置・確認状況・重複関係］IVC83グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。東側がSI1と重複し、本遺構が旧い。北側は風倒木により撹乱される。

［規模・形態］SI1と重複するため残存状況が悪い。平面形は、長軸4.4m以上、短軸1.5m以上、検出面からの深さは17cmである。壁は開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

［覆土］２層に分層した。Ⅲ層由来の黒色～暗褐色土で、黄褐色ローム粒が部分的に混入する。その上層にはⅢ層が堆積する。

［炉］なし。建物の大部分がSI1に掘り込まれることから、SI1構築時に滅失した可能性がある。

［柱穴・付属施設］なし。

［出土遺物］なし。

［時期・所見］SI1より旧いことから、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｃ式期以前と考えられる。

（中澤）

第３号竪穴建物跡（SI3）（遺構第７図、遺物第61図、遺構写真４、遺物写真97）

［位置・確認状況・重複関係］IVD・IVE83グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。

〔規模・形態〕平面形は長軸約4.2m、短軸3.1m以上の円形もしくは楕円形と推定され、検出面からの深さは20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、炉の周囲が硬化している。
〔覆土〕5層に分層した。Ⅲ層由来の黒色～黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒が混入する。
〔炉〕中央部に位置する窪みが炉と推定される。規模は長軸44cm、短軸40cmで円形を呈する。断面は皿状である。焼土は認められない。1層がしまりのやや強いにぶい黄褐色土であり、貼床が施されたものと推定される。炉に貼床が施されることから、本建物にはもう1基の新しい炉があると想定される。調査時点では図化していないものの、硬化範囲南端付近に浅い窪みがあり、これが炉となる可能性が考えられる。推定上端範囲を図示した。
〔柱穴・付属施設〕ピットは9基検出された。pit1・3・7にSP75を加えた4基が炉を囲む方形配置となることから、主柱穴と推定される。pit3～6、pit8は壁柱穴と考えられる。なお、SP75はSI17に伴う可能性もある。
〔出土遺物〕土器431g、スクレイパー1点、二次加工剥片3点などが出土し、土器1点、石器2点を図示した。遺物はいずれも覆土から出土したことから、混入と推定される。円筒下層a～b1式に比定される61-3は深鉢の口縁部である。口唇部に円形刺突が施される。
〔時期・所見〕周囲に位置する同形態の建物跡の時期や出土遺物などから、本遺構の時期は円筒下層a～c式期と推定される。

（中澤）

第4号竪穴建物跡(SI4)（遺構第8図、遺物第61図、遺構写真5）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣB・ⅣC76グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。
〔規模・形態〕本建物跡は東への緩斜面に位置し、西側はⅣ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは確認できなかった。平面形は長軸約3.2m、短軸1.8m以上の楕円形と推定され、検出面からの深さは14cmである。残存部の壁はやや開いて立ち上がる。底面はほぼ平坦であり、部分的に硬化している。
〔覆土〕4層に分層した。1～3層はⅢ層由来の黒色～黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒が混入する。4層は暗褐色を呈し、Ⅴ層由来のローム粒を多く含むことから、壁崩落土の可能性がある。
〔炉〕竪穴の中央に位置する浅い窪みが、炉と推定される。炭化物を含む黒色土が堆積する。根による攪乱が激しく、底面は凹凸が激しい。火床面は確認できなかった。
〔柱穴・付属施設〕ピットは3基確認された。pit1は欠番である。炉を挟み南北に位置するpit2、pit3が主柱穴と考えられる。
〔出土遺物〕土器69gが出土し、1点を図示した。土器は小片であり、覆土から出土したことから、混入と推定される。61-6は深鉢の胴部である。円筒下層a～b1式に比定される。
〔時期・所見〕周囲に位置する同形態の建物跡の時期や出土遺物などから、本遺構の時期は円筒下層a～c式期と推定される。

（中澤）

第5号竪穴建物跡(SI5)（遺構第8図、遺物第61図、遺構写真5）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢY・ⅣA79・80グリッドに位置し、Ⅳ～Ⅴ層で検出した。
〔規模・形態〕本建物跡は東への緩斜面に位置するため、西側はⅣ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは確認できなかった。平面は長軸3.7m、短軸1.4m以上の楕円形と推定され、検出面からの深さ

は26cmである。残存部の壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はほぼ平坦である。西半部が硬化している。
〔覆土〕6層に分層した。Ⅲ層由来の黒色～黒褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒が混入する。
〔炉〕床面中央部に分布する炭化物の出土範囲(7層)が炉と推定され、若干掘り窪められている。
〔柱穴・付属施設〕ピットは2基検出された。柱穴かどうかは判然としない。なお、炉周囲には調査時点で撹乱と推測した小穴が2基存在する。図化はしていないが、本建物に伴うピットだった可能性もある(完掘写真参照)。
〔出土遺物〕土器725g、二次加工剥片1点などが出土し、土器2点を図示した。土器はいずれも小片であり、覆土から出土したことから、混入と推定される。61-7は深鉢の口縁部片であるが、口唇部は残存していない。61-8は深鉢の胴部片である。どちらも結節回転文が施される。円筒下層a～b1式に比定される。
〔時期・所見〕周囲に位置する同形態の建物跡の時期や出土遺物などから、本遺構の時期は円筒下層a～c式期と推定される。

(中澤)

第6号竪穴建物跡(SI6)(遺構第8図、遺物第61～63図、遺構写真6、遺物写真98)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣB80グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。
〔規模・形態〕平面は楕円形と推定される。規模は長軸2.2m、短軸1.9m、検出面からの深さ52cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦であり、西半部が硬化している。
〔覆土〕7層に分層した。1～4層はⅢ層由来の黒～黒褐色土を主体とし、土器・石器を包含する。5～7層は黄褐色ロームブロックが混入する黒褐色土層であり、人為堆積と推定される。
〔炉〕なし。
〔柱穴・付属施設〕なし。
〔出土遺物〕土器13,757g、凹石4点、敲石1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器4点、石器3点、土製品2点、石製品1点を図示した。61-11～14・16、62-1、63-1は1層、61-9・10・15は覆土から出土した。

62-1は口径が57.2cm、残存高が69.1cmの大形の深鉢である。底部は欠失する。口縁部には結節回転文が施され、胴部には結節回転文と複節縄文が交互に施される。頸部には隆帯が2条巡り、隆帯上と隆帯両脇には爪痕を伴う指頭圧痕が施文される。円筒下層a～b1式に比定される。61-9は深鉢の胴～底部で円筒下層b1～b2式、61-10・11は深鉢の胴部で円筒下層a～b1式に比定される。61-15・16は円盤状土製品である。61-15は側面を荒く整形している。61-16は側面を丁寧に整形し、一部擦っている。63-1は不明石製品である。板状礫の側面に加工を加えたもので、スクレイパーの可能性がある。
〔時期・所見〕1層に大形の深鉢(62-1)が廃棄されていることから、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b1式と推定される。遺物は堆積土の上層(1層)から多く出土しており、下部を一定程度埋め戻した後、遺物が廃棄されたものと想定される。なお、本遺構には炉や柱穴が伴わず、同時期の竪穴建物跡とは規模や形態が異なることから、土坑の可能性もある。

(中澤)

第７号竪穴建物跡(SI7)（遺構第９図、遺物第63図、遺構写真７、遺物写真97）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣA・ⅣB81・82グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。SI8と重複し、本遺構が新しい。東側の大部分は撹乱を受ける。

〔規模・形態〕平面形は、長軸3.8m、短軸1.7m以上の円形もしくは楕円形と推定される。検出面からの深さは20cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〔覆土〕３層に分層した。Ⅲ層由来の黒色～黒褐色土を主体とし、２～３層に黄褐色ローム粒が混入する。

〔炉〕なし。本建物は撹乱を受けていることから、その際に滅失した可能性がある。

〔柱穴・付属施設〕ピットは５基検出された。主柱穴配置は判然としない。他に調査時点で撹乱と推測された小穴が本建物範囲内に４基存在する。図化はしていないが、本建物に伴うピットだった可能性もある（完掘写真参照）。

〔出土遺物〕土器76g、石皿１点などが出土し、土器１点、石器１点を図示した。出土土器は小片であることから、混入の可能性が考えられる。63-2は深鉢の口縁～胴部である。円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。63-3の石皿は１層から出土した。本遺構に帰属するか否かは判然としない。

〔時期・所見〕遺構の残存状態が悪く、本遺構に明確に帰属する遺物もないため、時期は不明であるものの、周囲には縄文時代前期中葉もしくは中期末葉の建物跡が存在することから、どちらかの時期と推定される。

（中澤）

第８号竪穴建物跡(SI8)（遺構第９図、遺物第63図、遺構写真７）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣB・ⅣC81・82グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。SI7と重複し、本遺構が旧い。南側は撹乱を受け、北側は風倒木により撹乱される。

〔規模・形態〕平面形は長軸2.5m以上、短軸1.3m以上の円形もしくは楕円形と推定される。検出面からの深さ10cmである。壁は開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〔覆土〕４層に分層した。Ⅲ層由来の黒褐色～暗褐色土を主体とし、黄褐色ローム粒が部分的に混入する。

〔炉〕炉の可能性がある黒色硬化範囲を確認したが、詳細は不明である。

〔柱穴・付属施設〕ピットは２基検出された。他に調査時点で撹乱と推測された小穴が本建物範囲内に４基存在する。図化はしていないが、本建物に伴うピットだった可能性もある（完掘写真参照）。

〔出土遺物〕土器578g、二次加工剥片１点などが出土し、土器２点を図示した。土器はいずれも小片であり、上層で出土したことから混入の可能性が考えられる。図示した土器はどちらも円筒下層ａ～ｂ1式に比定される深鉢の口縁部である。63-4は単節縄文、63-5は単軸絡条体第１類が施される。

〔時期・所見〕遺構の残存状態が悪く、本遺構に明確に帰属する遺物もないため時期は不明であるものの、周囲には縄文時代前期中葉もしくは中期末葉の建物跡が存在することから、どちらかの時期と推定される。

（中澤）

第９号竪穴建物跡(SI9)（遺構第９図、遺物第63図、遺構写真８、遺物写真97）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣD・ⅣE82グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。検出時は１棟の建物と認識していたが、竪穴を掘り進めた結果、南側に一段高い平坦面が確認されたことから、浅い竪穴と

深い竪穴の２時期と判断した。新旧関係については、土層断面では双方の可能性が考えられるものの、堆積土のロームブロックの混入量を重視し、浅い竪穴が新しいと推測した。ここではその仮定のもと、浅い竪穴をSI9a、深い竪穴をSI9bとし報告する。SI9aは土層断面で確認したため、竪穴の平面形は判然としない。SI9bは風倒木により攪乱される。

〔規模・形態〕SI9aの残存部分は長軸3.6m、検出面からの深さは23cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。SI9ｂの平面形は長軸3.1m、短軸1.8mの楕円形であり、検出面からの深さは54cmである。壁は開いて立ち上がり、底面はほぼ平坦である。

〔炉〕SI9bに伴う可能性がある炭化物範囲をpit4・6の間で検出した。ごく浅い堀り込みを伴う。

〔柱穴・付属施設〕ピットは９基検出した。位置の深さからpit2とpit6がSI9a、pit1とpit7がSI9bの主柱穴の可能性がある。

〔覆土〕９層に分層した。１層はⅢ層に対応する自然堆積層である。２～３層はSI9a堆積土、４層以下はSI9bの堆積土と推定した。

〔出土遺物〕土器1,511g、石匙１点、スクレイパー１点、凹石１点、敲石１点、磨石１点、半円状扁平打製石器１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器１点、石器３点を図示した。63-6～8は１層、63-9は覆土出土である。１層はⅢ層に対応する層であることから、包含層出土遺物と捉えられる。63-6は深鉢の口縁部である。頸部には指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。円筒下層ａ～b1式に比定される。

〔時期・所見〕周囲に位置する同形態の建物跡の時期から、SI9bの時期は円筒下層ａ～ｃ式期と推定される。SI9aの時期は特定できないものの、周囲には縄文時代前期中葉もしくは中期末葉の建物跡が存在することから、どちらかの時期と推定される。

（中澤）

第11号竪穴建物跡(SI11)（遺構第10図、遺物第64図、遺構写真８、遺物写真97）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢW・ⅢX76・77グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。ほぼ平坦な床面に構築された柱穴とみられるピットの配置状況等から建物跡であると判断した。

〔規模・形態〕竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅣ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。西壁はやや開いて立ち上がり、床面はほぼ平坦である。検出面からの深さは最深で50cmである。竪穴の平面形は、残存部分から径3.3m前後の円形もしくは楕円形と推定され、長軸が等高線に沿うように構築されている。

〔炉〕検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕ピットを２基確認した。建物中央付近の南北に位置する。建物跡長軸ライン上に、中央からほぼ等間隔に配置されていることや、深さなどの点で主柱穴と判断した。

〔覆土〕７層に分層した。全体的にⅡｂ～Ⅲ層由来の黒褐色シルトを主体とするが、１層にはⅥ～Ⅶ層由来の粘質土塊が混入するため、捨場Ⅱａ類似層に相当する可能性がある。

〔出土遺物〕土器1,397g、凹石３点、敲石１点、磨石１点、半円状扁平打製石器２点、二次加工剥片４点などが出土し、土器片２点、石器３点を図示した。遺物はすべて覆土出土であり、上層は捨場堆積土に相当する可能性があることから、捨場に帰属する遺物が含まれていると推定される。

図示した土器はどちらも深鉢の口縁部である。64-1は単軸絡条体6A類が施される。円筒下層b2式に比定される。64-2は低平な波状を呈し、細い原体による結節回転文が施される。円筒下層b1～b2

式に比定される。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。なお、遺物取り上げ時に混乱が生じており、「SI13南」とされたものは、本遺構に伴う。

〔時期・所見〕出土土器より、本建物の帰属時期は円筒下層b2式期と推定される。

（茅野）

第12号竪穴建物跡(SI12)（遺構第10図、遺物第64図、遺構写真9、遺物写真97）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢY・ⅣA80・81グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。床面に硬化範囲や炉跡、主柱穴とみられるピットを検出したため建物跡と判断した。北側が撹乱により一部破壊されている。ピットの配置状況と炉の新旧関係等により新旧２時期の変遷が推定される。

〔規模・形態〕竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅣ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ層を平坦に仕上げている。床面西側半分には硬化範囲が認められる。検出面からの深さは最深で34cmである。竪穴の平面形は、残存部分から径3.2m前後の円形もしくは楕円形と推定される。

〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉である。竪穴のほぼ中央に位置する。平面形は南北を長軸とする51cm×36cmの不整楕円形で、床面からの深さは８cmである。火床面や炭化物は検出されなかったが、覆土中に２面の硬化面が見られたため、新旧２時期が存在する。

〔柱穴・付属施設〕ピットを３基確認したほか、図化していないピット(pitA)もあり、推定上端線を図示した。いずれも炉周囲に位置し、２本一対の配置であった推定される。新旧関係は不明であるが、ピットの対応関係としてはpit2・3とpit1・Aがそれぞれ同時期の可能性がある。柱穴同士を結んだラインから炉跡がずれるのが特徴である。その他、竪穴南西側に土坑を検出しているが、図化していないため推定範囲を図に示した。

〔覆土〕５層に分層した。Ⅱb～Ⅲ層由来の黒褐色シルトが主体となる。

〔出土遺物〕土器444g、石匙１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器２点、石器１点を図示した。土器は小片であり覆土から出土したことから、混入と推定される。64-7は深鉢の頸胴部片である。頸部に隆帯が巡り、隆帯の両脇には爪形刺突列を伴う。64-6は深鉢の胴部である。どちらも円筒下層b1～b2式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器より、本建物の帰属時期は円筒下層b1～b2式期と推定される。壁際に土坑が構築されているのが特徴的である。

（茅野）

第13号竪穴建物跡(SI13)（遺構第10図、遺物第64図、遺構写真10、遺物写真97）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢX・ⅢY79・80グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。SI51a・SR27と重複し、本遺構が旧い。調査の進行手順により、北側を先行して調査し、埋め戻した後に南側を調査した。ほぼ平坦な床面に炉跡がみられたため建物跡と判断した。

〔規模・形態〕竪穴の平面形は径約3.3mの円形で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ層を掘り込み平坦に仕上げている。緩斜面に構築されるため、東壁は低く、西壁が高い。検出面からの深さは最深で50cmである。

〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉である。竪穴の中央やや南寄りに位置する。平面形は南北を長軸とする78cm×63cmの不整楕円形で、床面からの深さは６cmである。覆土に少量の炭化物を含むが、火床面

は確認されなかった。

〔柱穴・付属施設〕ピットは発見されなかった。

〔覆土〕６層に分層した。３層以下はⅡb～Ⅲ層由来の黒色シルトでⅤ層粒を含む。１・２層はⅡ層由来の黒色シルトで中期以降の土層と推定される。

〔出土遺物〕土器3,452gのほか、敲石１点などが出土し、土器２点、石器１点を図示した。64-9・10はともに深鉢の口縁部片である。小片であり覆土出土であることから混入と推定される。64-9は口唇部直下に縄文原体が押捺され、地文施文後に条痕が横位に施文されている。64-10は撚り戻し原体を横位回転施文後に縄を縦位に４条押圧している。どちらも円筒下層b2式と推定される。なお、遺物取り上げ時に混乱が生じており、「SI11南」とされたものは、本遺構に伴う。

〔時期・所見〕出土土器より、本建物の帰属時期は円筒下層b2式期と推定される。炉内から出土した炭化材はクリとイネ科に同定されている。

（茅野）

第14号竪穴建物跡(SI14)（遺構第11図、遺物第64図、遺構写真10・11）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣD80南側の斜面に位置する。Ⅳ層を精査中に楕円形状の黒色土の広がりを確認し、建物中央東西方向にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。SI15と重複していた可能性があるが、本建物跡は東側の範囲が不明瞭であるため、新旧関係など詳細は判然としない。東側は風倒木により攪乱を受ける。

〔規模・形態〕平面形は残存部が少ないため明確ではないが、主柱穴の位置から径３m前後の円形状を呈すると考えられる。確認面から床面までの深さは19cmである。竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅣ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。西壁はやや開いて立ち上がり、床面は東側にやや傾く。Ⅳ層に形成され、全体に硬く締まる。

〔炉〕検出されなかった。攪乱により滅失した可能性がある。

〔柱穴・付属施設〕ピットは５基検出された。そのうちpit3とpit5はいずれも床面からの深さが40cm弱で、建物中央を挟んで位置することから、主柱穴と考えられる。

〔覆土〕竪穴覆土は１層の黒色土で、一括で堆積していることから、人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器114g、二次加工剥片１点などが出土し、土器１点を図示した。出土土器はいずれも小片であり、混入の可能性が高い。64-12は深鉢の胴部片である。文様などは確認できない。円筒下層ａ～b1式に比定される。

〔時期・所見〕周囲に位置する同形態の建物跡の時期や出土遺物などから、本遺構の時期は円筒下層ａ～ｃ式期と推定される。

（久保）

第15号竪穴建物跡(SI15)（遺構第11図、遺物第64図、遺構写真10・11、遺物写真97）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣD80南側の斜面に位置する。Ⅳ層を精査中に円形状の黒色土の広がりを確認し、建物中央東西方向にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。SI14と重複していた可能性があるが、SI14の建物範囲が不明瞭であるため、新旧関係は判然としない。

〔規模・形態〕平面形は長軸4.5m、短軸1.8m以上の楕円形と推定され、確認面から床面までの深さは

15cmである。西側の壁は急傾斜に立ち上がることが確認できたが、東側は斜面地に位置するため、壁の立ち上がりは認められない。床面はⅣ層に形成される。床面は東側にやや傾いており、全体に硬く締まる。

〔炉〕検出されなかった。後世の耕作により削平されたと考えられる。

〔柱穴・付属施設〕ピットは2基検出された。いずれも床面からの深さが60cm弱で、建物中央を挟んで位置することから、主柱穴と考えられる。

〔覆土〕黒色土の単一層である。ロームブロックが含まれることから、人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器610gなどが出土し、土器1点を図示した。64-13は略完形の深鉢である。覆土から出土した。本遺構に帰属するものか、覆土に混入したものかは定かではない。円筒下層a～b1式に比定される。

〔時期・所見〕周囲に位置する同形態の建物跡の時期や出土遺物などから、本遺構の時期は円筒下層a～c式期と推定される。

（久保）

第16号竪穴建物跡(SI16)（遺構第12図、遺物第65・66図、遺構写真12・13、遺物写真97）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣE・ⅣF81・82グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲は地山直上まで削平を受けている範囲で、遺構上部は滅失していた。床面上に炉や柱穴を検出したため建物跡と判断した。整理段階の検討により、少なくともSI16a～cの3時期の変遷が推定される。詳しい変遷過程は柱穴の項を参照。

〔規模・形態〕竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅤ～Ⅵ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。検出面からの深さは最深で35cmである。西壁は最古段階(SI16a)の壁面で、やや開いて立ち上がる。床面はⅤ～Ⅵ層を掘削しており、北側部分がやや高くテラス状になっている。このテラス状の部分はSI16aに伴うと考えられる。床面の中央付近からやや南側にも段差がみられるが、この部分はSI16b･cに伴うと考えられる。竪穴の平面形はSI16aが検出部分から、径4.8m前後の円形もしくは楕円形と推定される。SI16b･cは東西4.6m前後、南北4m前後の楕円形と推定される。

〔炉〕SI16cに伴うのは、石組部と前庭部で構成される複式炉である。竪穴の東壁に接して位置すると推定される。石組部の平面形は南北を長軸とする88cm×70cmの隅丸長方形で、炉石が一重に巡っていたとみられる。石組部内側のⅤ層を炉床とする。床面から炉床までの深さは15cmである。炉石は13個検出され、西側は部分的に欠失する。欠失部分に明確な礫の抜け跡は確認できなかったものの、炉石を設置する際の掘方が、欠失部分を含めて方形の溝状に巡ることから、本来は炉石が存在していたと考えられる。炉石には10cm～20cm程度礫が用いられる。礫は石組部内側が強く被熱しており、一部外側にも及んでいる。前庭部は西側に開く台形平面で、東西約48cm、南北は最大で93cm、床面からの深さは10cmである。底面は硬化していた。

炉の範囲内でピットが3基検出された。2基は石組部の南北に位置し、礫設置前に使用されたことが確実であるため、SI16bに伴う可能性が高い。北側のピットは床面からの深さ26cm、南側のピットは床面からの深さ38cmである。もう1基(pit28)は前庭部の南東隅に位置し、SI16aに伴う可能性がある。

その他、床面中央西寄りに焼土を検出した。床面が被熱して赤変している。焼土上面が削平されて

いないことからSI16b･cのどちらかに伴うと考えられる。

[柱穴・付属施設]ピットを30基確認したが、その内pit25～27はSI17に伴うものと判断した。一部のピットでは貼床の検出状況から重複関係がみられた。床面南側に位置するpit1周辺ではpit1・2・12・29-1・29-2が密集し、このうちpit1には貼床が上面に及ぶ。pit2・29は掘方上面に貼床が及ばず、覆土が一様であるため同時存在と判断した。pit12は確認面に礫が廃棄されているためpit1より新しいが、深さが15cm程度と浅く柱穴とするには浅いと判断した。他に、pit6-1とpit2は覆土が一様であることから同時存在と判断した。従ってSI16cに伴うと推定されるのはpit2・6-1・6-2・10・16・18・21・29-1・29-2で、長方形に棟持ち柱(pit6)を加えた五角形の配置となる。この内pit6-1・16・18・21・29-1・29-2は主柱穴と考えられる。細長い掘方を持ち、板状に加工された柱が据えられていた可能性がある。pit2・6-2・10は、丸い掘方を持ち、これも主柱穴の可能性がある。SI16bに伴うと推定したのはpit1・8・19、炉内pit1・2である。この段階の炉跡は不明である。SI16aに伴うと推定したのはpit5・7・9・17・22・23・24・28、SP81・82の10本である。本段階に伴う炉跡は不明である。また、本段階では床面の北側がやや高く掘り残されており、テラス状遺構であった可能性がある。

[覆土]８層に分層した。黒色シルト質土主体でおおむねⅡ層由来と考えられる。１・２層がSI16c廃絶後の覆土と判断した。復元された中期末葉の土器がほぼSI16cの範囲内に収まることからもその蓋然性が高い。３・４層は２層に比べV層粒の含有量が多い。SI16aの覆土の可能性がある。

[出土遺物]土器5,617g、石匙１点、凹石３点、敲石１点、石核１点、二次加工剥片２点などが出土し、土器９点、石器５点、土製品１点を図示した。石器は66-3がpit16、66-4・6が２～５層、66-5が覆土からの出土である。先述の通り掲載土器はすべてSI16aの範囲内の床面直上から２層中にかけて出土した。建物跡の東半分は覆土をほぼ失っているため本来は炉の周辺にも65-5のような状態で多数の土器が含まれていた可能性が高い。土器は床面出土ではないので建物跡廃絶時に覆土と一緒に廃棄された可能性が高い。

掲載土器はすべて大木10式併行に比定される深鉢である。65-1は略完形、65-2・4は口縁部である。65-3は小形の深鉢であり、口縁部から底部が出土したが接合はできない。65-5・6は胴部、65-7、66-1・2は胴部～底部である。65-7には鰭状隆帯も認められる。３点ともに底面には網代痕が認められる。66-8はミニチュア土器の口縁部である。器種は判然としない。

[時期・所見]SI16cは、覆土の出土遺物から大木10式併行期の複式炉を持つ建物跡と考えられる。柱穴の形状や配置が特徴的である。SI16bはそれ以前のほぼ同様の時期に帰属すると考えられるが形状や炉跡の種類などは不明である。SI16aは、伴う土器がほとんどなく時期不明であるが、重複関係から縄文時代中期末葉以前に帰属すると考えられる。なお、65-6・7の土器の下から得られた炭化種実を分析したところ、オニグルミと同定されている。

(茅野)

第17号竪穴建物跡(SI17)（遺構第11図、遺物第66図、遺構写真14）

[位置・確認状況・重複関係]ⅣE・ⅣF82・83グリッドに位置する。V層で検出した。周囲は地山直上まで削平を受けている範囲で、遺構上部は滅失している。竪穴や柱穴の規模や炉跡の存在により建物跡と判断した。炉・貼床・ピットの新旧関係からSI17a～cの３時期の変遷を推定した。

〔規模・形態〕最新のSI17aのみ規模が推定できる。竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はV層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。西壁はやや開いて立ち上がり、床面はV層を掘削し、中央の炉跡に向かい緩く傾斜が認められる。検出面からの深さは最深で15cmである。竪穴の平面形(SI17a)は、検出部分から6.3m前後の円形もしくは楕円形と推定される。ちなみに、竪穴外部南側には竪穴プランに沿うようにピットが等間隔に検出された。

〔炉〕炉と考えられる小規模・不整円形を呈した床面の凹みを９基検出した。いずれも竪穴のほぼ中央に位置する。炉の平面形と深さは炉１:50cm×38cm、深さ４cm、炉２:39cm×37cm、深さ８cm、炉３:53cm×45cm、深さ８cm、炉４:52cm×49cm、深さ10cm、炉５:55cm×40cm、深さ４cm、炉６:27cm×25cm、深さ４cm、炉７:38cm×29cm、深さ５cm、炉８:平面規模不明、深さ３cm、炉９:平面規模不明、深さ３cmである。このうち、確実に単独で機能していたと判断できるのは炉２・３・４のみであり、これらは深さが８cm程度と深めである。炉3では焼土を検出できた。火床面である可能性がある。炉２・４では火床面は確認できなかった。炉４は貼床により埋められている。その他の炉は浅く、貼床直下に炉の掘方底面を検出したことから、貼床より新しい炉３(最新段階)の直前に使用されていたか、貼床に伴う掘方である可能性が考えられる。これらの炉では焼土は検出できなかった。ただし、貼床の直下の床面が斑状に赤く変色している箇所を数か所確認した。これらは被熱ではなく鉄分の沈着である可能性を指摘しておく。新旧関係は炉２・４→炉１・５～９→貼床→炉３の順に新しくなると判断した。炉とピットの関係では、炉３がpit17より新しく、炉７(貼床)がpit18-2・19-2より新しいことが判明している。これらの状況から、炉３と貼床がSI17aに、炉２と炉４がSI17b･cに伴うものと考えられる。

〔柱穴・付属施設〕遺構内及び周辺から柱穴を41基確認した(内１基(pitA)は図化していないため、推定上端線を図示した)。SI17aに伴うと判断したものは、次の通りである。配置状況と規模の点からpit1・2・15・16はSI17aの主柱穴と判断した。また、壁際にみられるpit3～13・19-1・20～22・25は規模や深さと等間隔に配置されることから、SI17aの壁柱穴と判断した。竪穴西側では壁が残存しているにもかかわらず明らかに壁柱穴が途切れる部分(pit19-1とpit20の間)があり、この部分の壁にSI16pit25～27とpitAがみられる。これら４基は壁に構築されているため、用途や性格の違いが想定される。pit23・24・26・27は削平を受けた範囲から検出しているため伴わない可能性もある。竪穴外のpit26、SP71～77・89・220は竪穴プランと等間隔且つ柱穴自体も等間隔に配置される状況から、SI17aの上屋構造の一部か、付随する柵のようなものと推定した。なお、SP75はSI3に伴う可能性もある。この他、pit17は床面の中央部に位置し、炉３の直下にある。深さの点で主柱穴よりかなり浅いため柱穴ではないと判断した。覆土中には炉３に伴う貼床がみられ、その下位層にはV層由来の土塊が多く含まれるため、人為的に埋められた可能性がある。炉の下部構造か、掘り込みの深い炉として用いていた可能性を指摘しておく。

SI17b･cに伴うものとして判断したものは、炉や貼床との新旧関係がみられるpit14・18-1・18-2・19-2である。これらはすべて炉ないし貼床より旧いことが検出状況や土層断面から明らかである。これらは配置状況からpit18-2･14がSI17bに、pit18-1･19-2がSI17cに伴うものと推定した。

〔覆土〕遺構上位が大きく削平され、建物覆土は西側で部分的に残存するのみである。

〔出土遺物〕土器392g、半円状扁平打製石器１点、二次加工剥片２点などが出土し、土器１点を図示

した。土器はいずれも小片であり覆土出土であることから、混入と推定される。66-9は円筒下層b2～c式に比定される深鉢の口縁部である。羽状縄文が施される。

[時期・所見]出土土器より、本建物の帰属時期は円筒下層b2～c式期と推定される。主柱穴が1間×1間の方形配置をとり、壁柱穴をもつ楕円形の竪穴建物跡で、本遺跡の前期後葉期では大型の部類である。なお、炉3から出土した炭化材を分析した結果、クリとニレ属に同定されている。

(芽野)

第18号竪穴建物跡(SI18)(遺構第13図、遺物第67図、遺構写真15、遺物写真99)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢD66グリッドに位置する。Ⅴ層上面で炭化物粒が入る暗褐色土が広がり、円形に配置された礫が検出されたことから、建物跡と想定して精査を行った。規模及び構築面は不明瞭である。

[規模・形態]残存部から、平面形は円形もしくは楕円形と推定される。残存部の長軸は3.7m、検出面から床面までの深さは最大で31cmを測る。南西部では緩やかに立ち上がる壁が確認できたものの、明確な壁は検出されなかった。床面はほぼ平坦であるが、硬化面は確認できなかった。

[炉]床面の中央部付近で石囲炉を確認した。炉の規模は長軸60cm、短軸50cmで扁平な円礫を舟形に配置し、その上端のレベルはほぼ水平となる。使用する礫の大きさに応じて、掘り込まれる溝の深さも異なる。炉の底面は平坦である。明確な火床面は認められないが、礫の上端は被熱により赤色化している。

[柱穴・付属施設]ピットは6基検出され、そのうちpit4とpit6は平面形が30cm前後の円形状を呈し、配置から主柱穴となる可能性がある。

[覆土]竪穴覆土は2層に分層した。1層は暗褐色土を主体とし、Ⅵ層に由来するローム粒が微量混入する。炉覆土は4層に分層した。

[出土遺物]土器1,971g、石匙1点、スクレイパー1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器2点、石器1点を図示した。土器はいずれも小片であることから、覆土に混入したものと推定される。67-3の石匙も覆土出土であることから、本建物に帰属するか否かは判然としない。図示した土器2点はどちらも深鉢の口縁部片である。共に大木10式併行に比定される。

[時期・所見]炉の形態から、本建物の時期は縄文時代後期初頭の可能性が高い。

(中澤)

第19号竪穴建物跡(SI19)(遺構第14図、遺物第67～69図、遺構写真16、遺物写真99・100)

[位置・確認状況・重複関係]ⅡY63グリッド、調査区南西端の尾根頂部から南西方向に下る斜面に位置する。Ⅳ層上面を精査中に円形状の黒色土の広がりを確認し、十字にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。遺構の上面及び南側は後世の撹乱及び耕作土により削平されている。SR12と重複するが、後述のとおりSR12は本建物に伴う土器埋設遺構と考えられる。

[規模・形態]平面形は柱穴配置から、径約5m前後の円形を呈すると考えられる。確認面から床面までの深さ37cmである。東側の壁は外へ開きながら立ち上がるが、西側は斜面地に位置するため、壁の立ち上がりは認められない。床面はⅣ層及びⅦ層に形成される。床面は西側でやや起伏が見られるが、概ね平坦で、硬く締まる。

[炉]検出されなかった。撹乱により滅失した可能性がある。中央やや西よりの覆土(9層～11層)に

焼土が確認されたが、床面が焼けていないことから廃絶後に廃棄されたものと考えられる。
〔柱穴・付属施設〕ピットのほか、壁溝が確認された。ピットは22基検出され、主柱穴は配置や覆土などからpit1・2・7とpit4・10・16の組み合わせが想定される。pit1・2・7は平面形が38～48㎝の円形である。堆積土は暗褐色土を主体とし、pit1には焼土ブロックや炭化物が含まれる。pit4・10・16の平面形は25～37㎝の円形である。これらの堆積土は黒色土主体である。pit1・2・7の覆土はpit4・10・16と比較してしまりが強いことから、pit1・2・7が新しく、pit4・10・16が旧い可能性が示唆される。pit9、pit11、pit20～22は平面形が９～21㎝の円形状を呈する。深さは10～30㎝で、壁柱穴と考えられる。また、建物の西端と考えられる箇所で埋設土器(SR12)が出土し、埋甕の可能性がある。正位の土器の上に石皿が伏せられた状態で確認された。主柱穴との配置の関係から、新段階のものと考えられる。
壁溝は１条検出された。幅18㎝、深さ17.5㎝で壁が検出された建物東側の壁際に存在する。
〔覆土〕13層に分層した。暗褐色土を主体とする。６～８層、１・２層はⅦ層由来のロームブロックが混入する。２～５層、13層は暗褐色土と黒褐色土が互層になっており、いずれも人為堆積と考えられる。１層は表土の耕作土である。
〔出土遺物〕土器16,357g、石皿２点などが出土し、土器10点、石器２点、土製品１点を図示した。床面直上出土の67-5、68-1、３層出土の67-6、69-1は残存状況が良好である。覆土が一括の人為堆積と考えられることから、埋め戻しと同時に土器を廃棄したものと想定される。68-2の土器と69-4の石皿はpit18から出土した。69-4とSR12の上に伏せた状態で出土した石皿(152-3)は、石質や使用状況から同一個体と考えられ、ⅢX81で出土した246-8も同一個体の可能性がある。また、67-6はSI32上層出土の85-1とSI40の２層出土の93-10と同一個体である。
掲載土器は69-2が鉢、その他は深鉢である。67-5、69-1は略完形、67-6、68-1は口縁～胴部の大形の破片である。67-5と67-6は文様構成が共通する。68-1は口縁部内面に隆帯を伴う。67-4、68-2・3は胴部片である。67-4には沈線文に刺突が充填される。以上の土器は大木10式併行に比定される。69-2は口縁部である。文様は施されず、ナデ調整である。縄文時代後期～晩期と推定される。68-4は円筒下層ａ～ｂ1式に比定される口縁～胴部の大破片である。69-5は鉢のミニチュア土器である。内外面ともナデ調整である。
〔時期・所見〕本建物の帰属時期は、床面から出土した土器(67-5)から、大木10式併行期と考えられる。SR12の上に伏せられた石皿(152-3)が、pit18出土の石皿(69-4)と同一個体と考えられることから、SR12は本建物に伴う土器埋設遺構と考えられる。なお、SR12の石皿(152-3)は出土レベルが床面より高いことから、表出していた可能性が高い。

(久保)

第20号竪穴建物跡(SI20)（遺構第13図、遺物第70図、遺構写真17、遺物写真100）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢQ・ⅢR75グリッドに位置する。Ⅴ～Ⅵ層で検出した。床面で検出した炉跡と柱穴の配置状況により建物跡と判断した。SR2と重複する可能性が高く、出土土器の時期から、本遺構が旧いと推定される。またSK19とも重複すると思われるが、新旧は不明である。
〔規模・形態〕竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅤ～Ⅵ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅥ層を掘削し平坦に仕上げている。検出面からの

深さは最深で36㎝である。竪穴の平面形は、検出部分から径３m前後の楕円形と推定される。
〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉である。竪穴のほぼ中央に位置する。炉の平面形は43㎝×39㎝の不整円形で、床面からの深さは10㎝である。火床面や炭化物は検出されなかった。
〔柱穴・付属施設〕主柱穴を２基確認した。炉を挟んで南北に位置する。
〔覆土〕３層に分層した。最上位に粘質土塊を含むⅡa層に類似する土層が堆積し、その下位層はⅡb～Ⅲ層由来の黒褐色シルトが堆積する。
〔出土遺物〕土器601g、石匙１点、凹石１点、二次加工剥片２点などが出土し、土器１点、石器２点を図示した。遺物はいずれも覆土からの出土であることから、混入と推定される。70-1は深鉢の口縁部片である。結節回転文が施され、頸部には隆帯が巡る。円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。
〔時期・所見〕出土土器より、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期と推定される。

（茅野）

第21号竪穴建物跡（SI21）（遺構第13図、遺物第70図、遺構写真18、遺物写真100）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢS74グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で検出した。最初に炉跡の焼土が検出され、その後周囲に不整円形の暗褐色の範囲がみられた。焼土の精査中に石囲炉であることが判明したため建物跡と判断し精査した。
〔規模・形態〕竪穴は斜面の落ち際に構築されるため、西側はⅣ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。西壁はやや開いて立ち上がる。床面は東側がⅢ～Ⅳ層、西側がⅣ～Ⅴ層を掘削し、ほぼ平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で17㎝である。竪穴の平面形は、検出部分から径３m前後の円形もしくは楕円形と推定される。
〔炉〕土器埋設石囲炉である。竪穴のほぼ中央に位置する。炉の平面形は東西を長軸とする63㎝×54㎝の卵型である。石組は拳大の礫を卵形に並べており、東端部の頂点に細長い角状の礫を立て立石としている。炉の掘方は礫設置範囲の直下に溝状に巡る。炉体土器はほぼ完形の粗製の深鉢(70-4)である。土器埋設部は土器の形状に合わせた掘方がみられる。火床面は厚さ４㎝で23㎝×16㎝の範囲が赤変している。火床面周囲から炉外にかけて炭化したクルミの殻が少なくとも15点検出された。多くが半割状態であった。埋設土器の体部が被熱し砕片化しているため炉の構築当初は土器内部で燃焼していた可能性があるが、火床面が炉体土器を完全に覆うことから最終的には土が被せられた上で火を焚いていたと考えられる。検出されたクルミの殻は火床面の下からも出土しているため、一時期に廃棄されたものではなくある程度の期間の間に廃棄され炭化したものと考えられる。また、炉の西側に70-5の土器片が置かれ、上部に炭化材と焼土が検出された。補助的な炉跡の可能性がある。
〔柱穴・付属施設〕ピットなどは確認できなかったが、西側の竪穴外に立石を検出した。70-8の石棒を垂直に樹立している。Ⅳ層を掘削した掘方に立てていると推定されるが、明確な掘方は検出できなかった。
〔覆土〕６層に分層した。おおむねⅡ層由来の暗褐色土が堆積している。
〔出土遺物〕土器12,126g、石錘１点、凹石１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器３点、石器１点、石製品１点を図示した。70-4は炉体土器である。70-5は炉の西側で出土した。出土状況から、これら２点は本建物に帰属するといえる。70-6は覆土から出土した小破片であることから、混入と推定される。70-7の石錘は建物西壁上位で出土した。土器小破片などと共に混入したと考えられる。また、

竪穴外部で出土した石棒(70-8)は、安山岩の柱状節理を加工したもので、平らな面を下にして立った状態で出土した。出土地点と炉の立石とを結ぶラインが炉の中心を通過する。なんらかの祭祀に関連した出土状況と推定される。70-4・5は粗製深鉢で、70-4は完形、70-5は胴部片である。縄文時代後期後葉～晩期前葉に比定される。70-6は深鉢の口縁部片である。大木10式併行と推定される。

〔時期・所見〕炉周辺から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った結果、2,832±22yrBPの値を得た。出土土器からみた帰属時期と相違なく、本建物は縄文時代後期後葉～晩期前葉に帰属すると考えられる。また、炉に立石、竪穴外に石棒設置がみられるなど、祭祀的な性格が強い遺構と推定される。なお、炉や焼土から出土した炭化種実を分析したところ、オニグルミが非常に多く、クリが少量、イヌタデ属が僅かに得られた。

(芋野)

第22号竪穴建物跡(SI22)

(遺構第15・16図、遺物第71～79図、遺構写真19・20、遺物写真100～102)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢT76グリッド付近に位置する。Ⅳ～Ⅴ層で検出した。確認面付近には円筒下層b1～b2式土器がまとまって出土しており、小規模な捨場が形成されていたと考えられる。捨場の遺物を取り上げていく段階で長楕円形のプランを確認できた。精査により炉跡や複数の柱穴が検出できたため、建物跡と判断した。なお、本建物跡は少なくとも4時期(SI22a～d)の変遷過程を推定した。SN19と重複し、本遺構が旧い。SK22とも近接するが新旧は不明である。

〔規模・形態〕斜面に構築されるため、西側はⅣ～Ⅵ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。西壁は開いて立ち上がり、床面はおおむね各時期Ⅴ～Ⅵ層を掘り込んで平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深(SI22a)で58cmである。竪穴の平面形は、SI22aが4.5m×3.4mの楕円形、SI22bがおよそ2.3m×1.7mの楕円形、SI22cがおよそ5.5m×3.3mの楕円形、SI22dがおよそ12.4m×5mの隅丸長方形、と推定される。重複関係はSI22c・dが、SI22a・bより古いのは確実である。

〔炉〕SI22a：床面中央に位置する炉1が対応する。床面を浅く掘り込んだ炉である。火床面や炭化物等は検出されなかった。SI22b・c：炉跡は検出されなかった。SI22d：焼土1～8が対応する。焼土4は欠番である。焼土1・3・8は建物跡長軸上に配置されている。その他の焼土は長軸ラインの東側(斜面下方)に寄った位置にある。火床面は厚さ7～13cm程度でしっかりと被熱し赤変しているものが多いが、焼土範囲が不整形で大きなもの(焼土1・5・6)があり、単に炉として機能していたのか疑問が残る。これらの焼土の断面観察からは、焼土上位層が下位層より色調がぼやけている場合がみられ、火床面の更新が行われた結果であると推定される。

〔柱穴・付属施設〕ピットは59基検出した(内7基は図化していない)。各建物跡の主柱穴を推定すると次のようになる。SI22a：pit2・14。SI22b：なし。SI22c：pit8・39。SI22d：pit10・25・31・32・33・SP151・166の他取り忘れピット3基。SI22a・cは楕円形の平面形で長軸線上に主柱穴が2本配置される特徴をもつ。SI22dは1間×4間で竪穴中央部の梁間がやや広くなる柱穴配置の長軸両端に、棟持柱が付加される柱穴配置を持つと推定される。

〔覆土〕11層に分層した。1・2層は上面に形成された捨場の土層で、円筒下層b1式土器を多数包含する。3層(相当)は広く分布し、SI22a・bのほか、SI22dの一部分(7層・粘土範囲)も覆っている。Ⅵ層由来の白色粘土塊を多数含む土層で、円筒下層a式土器が出土している。

[出土遺物]土器114,796g、石鏃1点、石鏃未成品3点、石匙9点、石錐1点、石箆2点、石箆未成品?1点、スクレイパー11点、磨製石斧2点、凹石12点、敲石7点、磨石1点、半円状扁平打製石器13点、台石1点、石核5点、異形石器1点、二次加工剥片26点などが出土し、土器22点、石器36点、石製品1点を図示した。71-1は床面で出土したことから、SI22aに帰属する遺物と考えられる。71-2・3、76-6はSI22a床面直上で出土しており、これらも本建物に帰属する可能性が高い。また、71-4、72-1はSI22c・dの床面直上(3～5層ないし7層)から出土したため、SI22c・dの廃絶時もしくはSI22aの構築時あたりに廃棄されたと考えられる。他は覆土(3層より上位)から出土しており、特にSI22aの上位あたりからは72-2～4,74-1・2・4,75-2・4等が出土している。これらの遺物(Ⅲ層出土遺物)は捨場に帰属する可能性が高い。また,71-6や73-1は刺突状の文様がみられるが、これらは弘前市神原(2)遺跡(青森県教委2013)で木の枝等の回転圧痕とされたものに類似する。71-6は回転圧痕B類に、73-1は回転圧痕A類に類似する。石鏃、石匙、石箆、二次加工剥片、磨製石斧、凹石、磨石、半円状扁平打製石器などが出土し、円筒下層式期の道具がおおむね揃っている。また、79-8は磨製石剣である。粘板岩製の細長い礫を研磨し整形している。被熱により変色している部分がある。なお、3層から出土した黒曜石製の二次加工剥片1点及び剥片2点(いずれも掲載外)の産地分析の結果、3点とも木造出木島群と推定されている。

[時期・所見]出土土器から、円筒下層a～b1式期の竪穴建物跡と考えられ、4時期の変遷が考えられる。特にSI22dの時期は本遺跡の前期中葉期最大級の竪穴建物であり、かつ最古期のものである可能性がある。炉跡が地床炉である点も本遺跡のこの時期では特異である。細長い形状からいわゆるロングハウスに分類される。SI22aが廃絶された後、覆土上位には円筒下層b1～b2式期の捨場が形成されている。なお、1層および3b層から出土した炭化種実の分析の結果、クリとオニグルミと同定され、炭化材同定ではクリとシオジ節が確認されている。

(茅野)

第23号竪穴建物跡(SI23)(遺構第17図、遺物第80・81図、遺構写真21・22、遺物写真103)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢR・ⅢS72・73グリッドに位置する。Ⅵ層で検出した。SK18・SK25・SK76と重複し、本遺構が一番新しい。SK23とも重複する可能性が高く、本遺構が新しい。

[規模・形態]周囲は削平がみられ、竪穴の掘込は南側の一部のみ検出し、北側の立ち上がりは確認できなかった。南壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅥ層を平坦に仕上げるが、炉跡周辺がやや低くなっている。検出面からの深さは最深で25cmである。竪穴の平面形は、検出部分から径4.2m前後の円形もしくは楕円形と推定される。

[炉]石組部と前庭部で構成される複式炉である。竪穴の東壁に接して位置すると推定される。石組部の平面形は南北を長軸とする67cm×56cmの隅丸長方形で、炉石が一重に巡る。石組部内側のⅥ層を炉床とする。炉石は11個検出された。東辺には15cm程度の比較的小さい礫が用いられ、他は30cm程度の比較的大きい礫を用いる。基本的には扁平な礫の短軸を立てて配するが、東辺に据えられた小振りの炉石には拳状の礫も見受けられる。炉石は、西辺が高く、東辺は低く据えられる。炉石の掘方は、炉石の大きさと概ね合致することから、炉石の大きさに合わせて、個々に上端が揃うように掘削したものと推定される。礫は地表に突き出した部分の全面が被熱するが、炉内部側が特に強く被熱し赤変している。前庭部は一辺約70cmの隅丸方形と推定される。床面からの深さは8cmである。底面及び

その周囲の床面が硬化している状況がみられた。

[柱穴・付属施設]ピットは確認できず、焼土と土器埋設遺構を検出した。

焼土は建物ほぼ中央の床面に形成される。平面形は長軸61cm、短軸32cmの不整楕円形で、被熱の深さは10cmに及ぶ。断面を観察するとVI層由来の粘質土主体で全体が赤みを帯びる中に赤く変色した土粒がみられる。床面が被熱した可能性もあるが、焼土範囲がSK76の開口部に収まるため土坑への廃棄土が焼土に見えただけの可能性もある。

土器埋設遺構は建物南西に位置する。埋設土器(83-3)は深鉢底部で、逆位に埋設される。掘方は長軸53cm、短軸31cmの楕円形平面で、床面からの深さは10cmである。掘方底面は南側が深く、その部分に土器が埋置される。埋設土器は床面出土の80-1と同一個体である可能性が高く、竪穴の南側にほぼ等間隔に遺物が出土する状況からも、意図的に埋置された可能性は高い。

[覆土]にぶい黄褐色土の単一層である。周囲のII～III層は褐色が基本であるため、本竪穴内部の土層もこれらが由来と考えられる。

[出土遺物]土器7,854g、石篦1点、ピエス・エスキーユ1点、凹石4点、敲石1点、磨石1点、台石1点、二次加工剥片4点などが出土し、土器3点、石器6点を図示した。80-1は口縁～胴部上位が逆位で、80-2は正位で、建物南側で床面に並んで置かれた状態で出土した。80-1は西側で出土した大破片と接合したため、本来底部のみを欠き倒立した状態で据え置かれたものと推定される。また、調査区際にも復元できず非掲載の個体が倒れた状態でみられる。80-1は胴部が膨らむ深鉢の上半部で80-3と同一個体である可能性が高い。口縁部直下に無文帯がみられ、胴部には沈線区画がみられ、縄文が充填される。区画は「J」字状を呈し、末端部に鰭状の隆帯がつく。口縁部内面にも鰭状の隆帯が4単位でみられる。80-2は体部が丸みを帯びる鉢形土器である。口縁部は平縁で、口縁直下2.5cm程で口縁部が内側に屈曲し、外面に稜線がみられる。外面は無文である。底面はおおむね平底だが底部と体部を区分する明瞭な稜線はみられない。ともに大木10式併行に比定される。81-1・3は床面で出土したことから、本建物に帰属するものと考えられる。81-2は炉石に転用されていた台石である。

[時期・所見]床面出土遺物から、本建物の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。床面南側の壁際に土器が並んで出土した。竪穴覆土がほぼ一様な状況であるため、建物の廃絶時に上屋を撤去した後に深鉢を底部と体部上半とに分割し、底部を床面に埋置、上半部を無文の鉢等と並べて床面に据え置き、ある程度土を被せた状態が看取される。

(茅野)

第24号竪穴建物跡(SI24)(遺構第18図、遺構写真22)

[位置・確認状況・重複関係]IVI・IVJ85グリッドに位置する。IV～V層で検出した。規模と底面の状況から建物跡と判断した。

[規模・形態]平面形は、長軸2.2m、短軸1.78mの楕円形である。壁は開いて立ち上がり、床面はVI層を平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で26cmである。

[炉]検出されなかった。

[柱穴・付属施設]検出されなかった。

[覆土]3層に分層した。III層由来の黒色シルトが主体である。

[出土遺物]2層から土器片が10g出土したが、小片のため時期は特定できず、図化はしていない。

〔時期・所見〕詳細な時期は不明であるが、覆土の状況から縄文時代に帰属する可能性がある。本遺跡の縄文時代竪穴建物跡中、最も沢に近接する。

（芋野）

第25号竪穴建物跡(SI25)（遺構第18図、遺構写真22）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣG83・84、ⅣH83グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲はⅠ～Ⅳ層が削平を受けており、遺構の上部は破壊されている。規模・床面の状況や柱穴の検出等から建物跡と判断した。

〔規模・形態〕削平のため、南～西側の竪穴堀方は確認できたが、北～東側の立ち上がりは認められない。検出面からの深さは最深で５cmである。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ層を平坦に仕上げており、南側には2.3m×1.1mの範囲で硬化面がみられる。竪穴の平面形は、検出部分から径約4.5mの円形もしくは楕円形と推定される。

〔炉〕削平のため検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕ピットを９基確認した。深さが40cmを超えるものが４基(pit1～3・5)あり、主柱穴の可能性があるが、配置は不規則である。

〔覆土〕覆土は南西側の一部のみ残存する。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔時期・所見〕炉が検出されておらず、遺物も出土していないため、本建物の時期は不明であるものの、周囲で縄文時代前期中葉の建物が多く検出されていることから、本建物も同時期の可能性が高い。

（芋野）

第26号竪穴建物跡(SI26)（遺構第19図、遺物第81・82図、遺構写真23、遺物写真103）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣI81グリッド他に位置する。Ⅴ層で検出した。２時期あり、東側をSI26a、西側をSI26bとした。SI26aが新しい。建物内に風倒木が２か所検出され、どちらも本建物より新しい。規模・床面の状況や柱穴の検出等から建物跡と判断した。

〔規模・形態〕斜面地に立地することと、Ⅰ～Ⅳ層が削平されているため、西側の堀方は確認できたが、東側の立ち上がりは認められない。検出面からの深さは最深で40cmである。西壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ～Ⅵ層を平坦に仕上げている。竪穴の平面形は、SI26aが検出部分から長軸約8.6m(短軸推定5.9m)の楕円形と推定される。SI26bは長軸が推定7.2mの楕円形と推定される。

〔炉〕風倒木に壊されたため検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕ピットを15基確認した。SI26aに伴う柱穴はpit3・5・6・12・15で、四隅の柱穴の深さが60cm超で揃っていることから梁行１間桁行２間の長方形配置と推定される。SI26bに伴う柱穴はpit2・4・7・8・10・13で、おおむね深さが40cm前後で揃うことから梁行１間桁行２間の長方形配置と推定される。pit8は貼床により蓋をされておりSI26bに伴うものと判断した。他に、pit1は風倒木の影響で生じた凹みである可能性がある。竪穴南西部では壁溝を検出した。幅は6～16cm、床面からの深さは最深で24cmである。SI26aに伴うものと考えられる。

〔覆土〕覆土は７層に分層した。おおむねⅢ層由来の黒色シルト質土が母材となり、Ⅴ層の粒・塊が混入しているのが特徴である。

〔出土遺物〕土器8,620g、凹石１点、半円状扁平打製石器３点、石皿２点、二次加工剥片７点などが

出土し、土器4点、石器4点、石製品2点を図示した。81-4～6は竪穴覆土から出土した。いずれも小片であることから、覆土に混入したものと推定される。81-7はpit1から出土した。82-2の石皿は床面直上で出土したことから、本建物に帰属する可能性が高い。81-8・9、82-1は覆土から出土しており、混入したものと推定される。82-3・4の石製品は覆土からの出土である。

土器は、円筒下層a～c式土器の破片が出土している。81-4・6は円筒下層b2～c式に比定される。81-4は口縁部に単軸絡条体第1類の側面が押圧される。81-6は底部片である。やや上げ底状で、端部が張り出す。単軸絡条体第1類が縦方向に回転施文され、底部直上にはR原体が1条押圧される。底面にもR原体が押圧される。81-5・7は円筒下層a式の深鉢口縁部片である。81-5は口縁部にRLR複節縄文が施され、頸部には指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。81-7は深鉢口縁部片である。指頭圧痕が施される。82-3は不明石製品である。赤みを帯びた頁岩の円礫に平坦面を作出し擦ったものである。82-4は不明石製品である。側面をやや荒く加工している。

[時期・所見]出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層b2～c式期と考えられる。

(茅野)

第27号竪穴建物跡(SI27)（遺構第20図、遺物第82図、遺構写真22）

[位置・確認状況・重複関係]ⅣG81・82、ⅣH81グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲はⅠ～Ⅳ層が削平されており、一部分の壁とピットのみの確認となった。ピットが一定範囲にまとまることと、炉跡が確認されたため建物跡と判断した。

[規模・形態]削平のため、竪穴の掘方は南西の一部のみ検出した。検出面からの深さは最深で10cmである。検出した部分の壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ層をおおむね平坦に仕上げている。竪穴の平面形は、柱穴配置より、径4.5m前後の円形もしくは楕円形と推測される。

[炉]床面を浅く掘り込んだ炉である。平面形は長軸83cmの不整形で、床面からの深さは12cmである。確認時は柱穴の可能性も考えたが、浅いことと柱穴群のほぼ中央に位置し、底面がやや硬くなっていることから炉跡と判断した。

[柱穴・付属施設]ピットを12基確認した。検出位置から本建物に伴うと推定した。各ピットに新旧関係がなく、覆土からも明確な前後関係を見いだせないため柱穴配置と変遷については不明である。但し、配置状況のみから推察するならば、pit2・4-2、pit3・4-1・6・9、pit7・10～12、pit1・8・11・12の組み合わせが考えられる。

[覆土]覆土は南西の一部のみ残存する。

[出土遺物]土器40gなどが出土し、土器1点を図示した。明確に本建物に帰属する根拠はなく小片であることから、覆土に混入した可能性が考えられる。裏面が丁寧に磨かれることから円筒下層b2～c式に比定される可能性がある。

[時期・所見]出土土器から、本建物の帰属時期は縄文時代前期後葉以降とみられる。推察される柱穴は位置からは2本一対から1間×1間の方形配置へと変化した可能性が考えられる。

(茅野)

第28号竪穴建物跡(SI28)（遺構第18図、遺物第82図、遺構写真24、遺物写真104）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢM・ⅢN71・72グリッドに位置する。Ⅶ層を精査中に黒褐色土の広がりを確認し、十字に試掘溝を掘削したところ中央に炉が検出されたことから、竪穴建物跡と認定した。

本建物のほぼ中心にはSK77が位置し、本建物が新しい。北東側は風倒木により撹乱を受けている。

[規模・形態]壁際の覆土(8層)がⅦ層に類似しており、遺構確認時点では平面プランが不明瞭であったものの、試掘溝の断面でⅦ層中に床面と思われる平坦面と、壁と思われる立ち上がりを確認した。平面形は長軸4.20m、短軸3.62mの隅丸方形で、確認面から床面までの深さは33cmである。床面は中央付近が浅く窪み、全体的に硬く締まる。壁はやや外傾して立ち上がる。

[炉]石囲炉である。建物中央に位置する。炉の平面形は東西を長軸とする長軸104cm、短軸62cmの楕円形で、短軸側には炉石は検出されなかった。礫の抜け跡等、炉石が設置されていた痕跡が認められないことから、短軸側には礫が配置されない状態で機能していたものと考えられる。

炉石は北側に6個、南側に5個配され、用いられる礫は円礫・亜角礫・角礫など様々である。角礫は遺跡北側で露出する頁岩由来であり、円礫・亜角礫は、遺跡外から持ち込まれたと考えられる。炉石の大きさは10～20cm程度で扁平なものが多い。炉の構築にあたっては、炉全体を建物床面から20cmほど掘り窪め炉石を配した後、全体を埋め戻し上面を炉床としている。炉石は短軸もしくは長軸を立てて据えられているが、礫の下端レベルは一様ではなく、掘り込み底面にも接しないことから、設置の際は土を充填しつつ上端を直線的に揃えたものと考えられる。

焼土は東西を長軸とした長軸84cm、短軸46cmの不整楕円形の範囲で形成されており、深さは最大で20cmに及ぶ。中心部は強く被熱しブロック化するが、周囲の被熱は弱い。炉石には、基本的に被熱痕が認められないが、北東端に位置する1点のみ強く被熱している。炉石周囲の被熱状況が弱いことから、この強く被熱した炉石については、転用されたものと考えられる。

また、炉検出時に、炉内及び周囲に炉石以外の礫が8点検出されたが、炉床には接せず、被熱も認められない。なお、その内の1点は凹石である(82-10)。

[柱穴・付属施設]ピットを1基確認した。建物東壁に接する。柱痕跡は確認できなかった。ピット内から径15cm前後の礫が2点検出された。1点は柱穴の東壁に立てかけた状態であり、もう1点はその上で検出された。

[覆土]覆土は9層に分層した。9層は炉上面に堆積する黒褐色土である。炉に伴う堆積と推測される。8層は壁際に堆積するⅦ層由来土である。地山由来土であることから、人為堆積と推定される。3～7層は暗褐色土であり、1・2層は黒褐色土である。堆積要因は定かではない。なお、5層には礫が数点含まれ、8層からは石鏃が出土した。

[出土遺物]土器423g、石鏃1点、石篦1点、凹石1点、石皿1点、石核1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器2点、石器4点を図示した。82-6は深鉢である。炉上面で出土した。同一個体片が覆土から多く出土しており、中には隆帯を伴う破片も見受けられることから、後期初頭の所産と考えられる。いずれも器面は被熱による劣化が著しい。82-7はpit1から出土した大木10式併行の深鉢の口縁部片である。波頂部下に鰭状隆帯を伴う。82-10は炉上面で出土した凹石である。82-9の石篦と82-11の石皿は覆土からの出土である。82-8の石鏃は8層から出土した。掲載土器と凹石(82-10)は本建物に帰属する。そのほかの掲載遺物は、覆土に混入した可能性も考えられる。

[時期・所見]廃絶時期は、炉上面で出土した82-6や炉の形態から、縄文時代後期初頭の可能性が考えられる。

(岩井)

第29号竪穴建物跡(SI29)（遺構第20図、遺物第82図、遺構写真25、遺物写真104）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣF・ⅣG80グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲はⅠ～Ⅳ層が削平されており、東側半分は撹乱により破壊されている。

〔規模・形態〕撹乱による破壊のため、竪穴の掘方は西側のみ検出した。検出面からの深さは最深で20cmである。検出した部分の壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ層を掘削し、斜面下方に若干傾斜している。竪穴の平面形は、伴う柱穴の軸方向や西側の掘方などより長軸4m、短軸2.6m程度の楕円形と推測される。

〔炉〕pit1の北側の床面に若干凹んだ硬い部分がみられたが、木の根の影響などによる凹凸が激しく断定できなかったので炉は不明である。

〔柱穴・付属施設〕ピットを4基確認した。本建物跡に確実に伴うのはpit2・3である。床面中央部を挟み竪穴長軸線上に配置されている。

〔覆土〕覆土は2層に分層した。おおむねⅢ層由来の黒色シルト質土が母材である。

〔出土遺物〕土器224g、石篦1点などが出土し、土器1点、石器1点を図示した。82-12の土器は円筒下層a～b1式に比定される小片であり、覆土からの出土であることから、混入と推定される。82-13は石篦とみられ、覆土からの出土であり、混入の可能性が考えられる。

〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は縄文時代前期中葉以降と考えられる。

（茅野）

第30号竪穴建物跡(SI30)（遺構第20図、遺物第83図、遺構写真25、遺物写真104）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣK・ⅣL83・84グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。SI30cの部分でSK26と重複し、本建物が旧い。付近はⅠ～Ⅳ層が削平されていたため遺構上位は破壊されていた。規模や床面の構築状況の他、ピットが一定範囲にまとまって検出されたことなどから建物跡と判断した。少なくとも4軒の建物跡が重複するとみられるが、削平のため新旧関係や付属施設の帰属先は多くが不明である。

〔規模・形態〕SI30a～dの4棟の建物跡が重複する。SI30aは直径約2m程度の円形と推定される。覆土上面の3層（貼床）が全面を覆うため本建物群の中で最古段階であることが確実である。壁はⅤ層を掘り込み、まっすぐ立ち上がる。床面はⅤ層を平坦に仕上げている。SI30bは北側から西側の壁は確認できたが南～東側については確認されなかった。平面形状は隅丸方形か楕円形の可能性があるが規模は不明である。床面はⅤ層を掘り込み平坦に仕上げている。また、SI30aの部分には貼床が貼られている。貼床の範囲外にも硬化範囲が広がりpit38あたりまで広がる。SI30cはSI30bの西側に段差として検出された。西側壁の一部分と床面を検出したが、SI30bとSI30dとの重複関係も含め詳細は不明である。SI30dはSI30bの南側に位置する。SI30cの南側壁に段差を認め、柱穴配置の検討から存在を推定した。平面形や規模は不明である。

〔炉〕SI30aでは床面中央や東側に浅い凹みを確認したが、調査時点で炉と認定できていないため作図していない。推定位置のみ示す。もし炉であれば掘り込み炉の可能性が高い。SI30bは撹乱の部分が炉跡であった可能性があるが詳細は不明である。SI30cでは炉は検出されなかった。SI30dではpit36の西側付近に床面に僅かな凹みを確認したが調査時点で炉と認定しなかったため作図していない。推定位置のみ示す。もし炉であれば掘り込み炉の可能性が高い。

[柱穴・付属施設]竪穴範囲内と付近で関連する可能性があるピットを41基確認した。このうち３基(pitA～C)は図化していないため、推定上端線を図示した。また、pit2～6・11・24・32・34・37は覆土最上位に貼床がみられる。SI30aに伴うのはpit30・Aで、主柱穴と判断した。柱穴同士を結んだ線状に炉は存在しない可能性が高い。SI30b・cに伴うピットとその配置状況は不明である。SI30dに伴うのはpit1・10・38・39-1と判断した。ほぼ直線上に並び、２基ずつ２時期の変遷が想定される。
[覆土]覆土についてはSI30a・b以外は不明である。確認した部分では５層に分層した。３・５層はSI30aを埋めた土層である。４層はその上に貼られたSI30bの貼床である。１・２層はSI30bの覆土である。Ⅲ層由来の黒色土にⅤ層由来粒・土塊を多く含んでいる。
[出土遺物]土器254g、石匙１点、スクレイパー１点、凹石２点、二次加工剥片３点などが出土し、土器３点、石器２点を図示した。土器はいずれも小片であり、床面からの出土でないことから、覆土に混入したものと推定される。83-4の石匙は床面で出土した。本建物に帰属する可能性が考えられる。83-5は覆土からの出土である。混入と推定される。

83-3は鉢の胴部片である。２条の沈線間に短沈線列が施される。大洞B1式に比定される。83-1・2は深鉢の口縁部片である。83-1は、LRとRの合撚の原体が回転施文される。83-2は単軸絡条体第１類が斜方向に回転施文される。２点とも円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。
[時期・所見]本建物跡は重複と削平が激しく、時期比定が難しいが、SI30aとSI30dについては柱穴配置と形状から縄文時代前期に帰属する可能性が高い。SI30bもほぼ同様の時期の可能性がある。出土土器のうち晩期前葉のものについては、削平時点での混入の可能性も考えられる。

（茅野）

第31号竪穴建物跡(SI31)（遺構第27図、遺物第83図、遺構写真26、遺物写真104）
[位置・確認状況・重複関係]Ⅲ167グリッドに位置する。第Ⅶ層上面を精査中に円形状の黒色土の広がりを確認し、十字にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。北東部は風倒木により撹乱される。
[規模・形態]平面形は径2.5mの円形を呈する。確認面から床面までの深さは13cmである。斜面地に位置するため、南側はⅥ層を掘り込むが、北側の立ち上がりは認められない。壁はやや開いて立ち上がり、床面は南西側がやや窪む。Ⅶ層を床面とし、全体に硬く締まる。
[炉]検出されなかった。
[柱穴・付属施設]ピットは２基検出されたが、柱痕跡は確認できず、明確に柱穴と判断できない。
[覆土]４層に分層した。３・４層はⅤ層由来のロームブロックが混入することから人為堆積と考えられる。２層は風倒木より前、１層は後に堆積するが、堆積要因は定かではない。
[出土遺物]土器677gなどが出土し、土器３点を図示した。遺物は覆土からの出土であり、床面出土ではないことから、混入と推定される。図示した３点はいずれも深鉢の口縁部片である。83-6は、丁寧なミガキ調整が施された器面に、L原体の押圧により文様が描出される。縄文時代後期初頭に比定される。83-7は口縁部がやや内側に屈曲する。縄文時代中期末葉(大木10式併行)から後期初頭に比定される。83-8は地文縄文に沈線文が施される。大木10式併行に比定される。
[時期・所見]出土土器から、本建物の帰属時期は縄文時代中期末葉(大木10式期)から後期初頭以降と考えられる。

（久保）

第32号竪穴建物跡(SI32)

(遺構第21・22図、遺物第83～87図、遺構写真26・27、遺物写真104・105)

[位置・確認状況・重複関係]Ⅲ67グリッド他に位置し、Ⅴ層上面で炭化物・焼土粒を含む黒褐色土の広がりで確認した。SK54と重複し、本遺構が新しい。西側は風倒木により撹乱を受ける。また、SK52とも重複する可能性が高い。

[規模・形態]竪穴の北側で壁が検出できなかったため、竪穴の規模は不明瞭であるが、残存部や柱穴配置から、平面形は径約6.5m前後の円形もしくは楕円形と推定される。検出面から床面までの深さは33cmである。壁は開いて立ち上がり、床面は概ね平坦である。

[覆土]8層に分層した。褐色土を主体とする。確認面では10～30cm大の礫が確認されたが、廃棄されたものである可能性がある。

[炉]竪穴南西部付近で、石組部と前庭部で構成される複式炉を確認した。石組部は二重の炉石で囲まれているが、炉石の基底部の設置面が上下2面あることや、火床面が2面認められることから、古段階と新段階の2時期に区分した。古段階の炉は新段階のそれの内側にあり、長軸86cm、短軸82cmで、小形の扁平な礫を主体としてロ字状に配置して構成されている。新段階の炉は古段階の炉の外側あるいは上面に構築され、長軸89cm、短軸88cmで、古段階と同様に小形の扁平な礫を主体としてロ字状に配置して構成されている。炉石の一部は抜き取られ、掘方のみ確認できた。両段階ともに炉に用いた礫は径9cm～26cm大の角礫が使用され、炉の底面はほぼ平坦である。礫の上端は被熱により赤色化している。炉内及びその周辺に焼土・炭化物が認められ、炉周辺の床面は硬化している。新段階の炉内上面から土器が確認された。

[柱穴・付属施設]ピットはⅤ層・Ⅵ層上面で26基確認した。そのうち、pit1・4・5・6・7・8・10・16・23・24は主柱穴、pit11・13・22・25・26は壁柱穴と考えられる。主柱穴は径29cm～50cmの円形を呈する。壁柱穴は径18～28cmの円形を呈する。本遺構は柱穴配置から、1回の建て替えが行われたと推測できる。各段階の配置は以下の通りである。

A段階：pit1・4・5・6・7・23・24を主柱穴とするもの。7角形の主柱穴配置。

B段階：pit8・10・16を主柱穴とするもの。4本の主柱穴配置。

ただし、A・Bの新旧関係は不明である。

また、炉の前庭部東隣では、扁平な円礫が1対立てられた状態で検出された。出入口の可能性がある。その他に、建物床面ではSK112が確認された。本遺構に伴う可能性もある。

[出土遺物]土器21,726g、石鏃3点、石鏃未成品2点、石匙1点、スクレイパー2点、凹石5点、磨製石斧1点、磨石3点、石皿2点、石核5点、両面調整石器1点、二次加工剥片13点などが出土し、土器11点、石器18点、土製品1点、石製品1点を図示した。86-7・8は炉石に転用された石皿である。83-9,84-2は炉上面で出土した。被熱痕が認められないことから、炉廃絶後に置かれたと考えられる。83-10、84-1、85-7、86-3・4・6・9、87-2は床面直上で出土したことから、本建物に帰属する可能性が高い。また、86-2の凹石はpit4から、85-6の石匙はpit5から出土した。これらも本建物に帰属する可能性が高い。その他は覆土から出土している。なお、上層出土の85-1は、SI19の3層出土の67-6とSI40の2層出土の93-10と同一個体である。

83-9・10,84-6・8,85-1は沈線文が施される。83-9・84-6には鰭状隆帯が伴い、84-8は波頂部にボ

タン状貼付を伴う。84-1には縦走縄文が施される。83-10、84-3・6・8は口縁内面に隆帯が施される。これらはいずれも深鉢で、大木10式併行に比定される。84-2・4は器壁が薄く、84-2には沈線文が施され、84-4は無文で口唇に刻みが施される。この2点は壺の可能性がある。84-5は波状口縁の鉢である。これら3点は縄文時代中期末葉(大木10式併行期)～後期初頭に比定される。84-7は縄文時代前期中葉の深鉢である。87-3はミニチュア土器である。深鉢形であるが底面形状が丸いため、自立しない。87-4は石棒である。棒状礫全体に擦りを施し、より丁寧に擦りを加える面を有する。85-5は、産地分析の結果、木造出来島群と推定されている。

〔時期・所見〕床面直上で出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した結果、3,937±25yrBPの値を得た。出土土器から推定される遺構の年代観と相違なく、本建物跡は大木10式併行期の竪穴建物跡と考えられる。炭化物及び焼土が広範囲で確認されたこと、2層中の礫が被熱を受けていることから、建物廃絶後に焼失した建物の可能性が高い。なお、下層から出土した炭化種実を分析した結果、イヌダテ属に同定された。

(中澤)

第33号竪穴建物跡(SI33)(遺構第27図、遺物第88図、遺構写真28、遺物写真105)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD・ⅢE64・65グリッドに位置し、Ⅴ層上面で炭化物・焼土粒を含む黒褐色土の広がりとして確認した。南側はSK8と重複し、本遺構が旧い。pit5はSR18と重複し、本遺構が旧い。南側は風倒木により攪乱を受ける。他に、SR17と重複する可能性がある。

〔規模・形態〕残存部から、径4～5m程度の円形もしくは楕円形を呈するものと推定される。検出面から床面までの深さは24cmである。壁は東側と南側で一部確認した。斜面下側である西側・北側の範囲は不明瞭である。床面は硬化している。

〔覆土〕6層に分層した。暗褐色土を主体とする。検出面で焼土範囲(旧SN7)に白頭山苫小牧火山灰(B-Tm)がブロック状に堆積しているのを確認したが、風倒木に伴う流れ込みと判断した。床面には炭化物粒や焼土粒が広がる。2～5層は風倒木の影響により攪乱を受けており、床面が安定しない。

〔炉〕石囲炉を確認した。Ⅵ層が被熱している。長軸88cm、短軸83cmで、ヨコの字状に扁平な円礫が配置されている。炉石の上面が被熱により赤色化している。炉跡内及びその周辺に焼土・炭化物が認められた。

〔柱穴・付属施設〕ピットは9基検出した。柱穴の配置は不規則であり、主柱穴は特定しがたい。

〔出土遺物〕土器4,366g、石匙1点、スクレイパー2点、凹石2点、敲石1点、石皿1点、二次加工剥片9点などが出土し、土器5点、石器5点を図示した。88-3は小片であるものの、床面直上から出土したことから、本建物に帰属する可能性がある。88-10は炉石に転用されていた石皿である。88-6の石匙は炉周辺で出土した。そのほかは覆土から出土している。覆土には比較的多くの遺物が含まれており、遺存状態が良好な遺物(88-2など)も見受けられることから、意図的な廃棄の可能性が考えられる。88-1は、炉の北西約1.5mの位置で出土した。本建物に伴う可能性がある。

88-1は深鉢の口縁から胴部である。沈線文に単節縄文が充填される。88-2は広口壺である。口縁部と胴部は接合せず、図上で復元した。口縁端部に穿孔が巡り、胴部には把手の痕跡が認められる。内面には赤色顔料が付着する。88-3～5は深鉢の口縁部である。沈線文を伴う土器の口縁部無文帯にあたると考えられる。5点とも大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

炉に近接してSR17やSR18が位置する。本遺跡の同時期には、建物内に土器を埋設する例が多いことから、これらは本建物跡に伴う可能性がある。ただし、本遺構出土土器片とSR17・SR18の埋設土器について接合を試みたが、同一個体は確認できなかった。

（中澤）

第35号竪穴建物跡(SI35)（遺構第23・24図、遺物第89～91図、遺構写真29・30、遺物写真106）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢⅠ・ⅢJ75に位置する。Ⅶ層上面を精査中に黒色土の広がりを確認し、十字にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。北東側は捨場の覆土を掘り込んでいる。SI39と重複しており、本遺構が新しい。

〔規模・形態〕平面形は覆土の状況や柱穴配置から、平面形は径約5.5mの円形状を呈すると考えられる。確認面から床面までの深さは15cmである。壁は西側の一部でしか確認できず、そこでは外へ開きながら立ち上がるが、それ以外は斜面地に位置するため、壁の立ち上がりは認められない。床面はⅦ層に形成される。床面は平坦で、東側にやや傾いており、全体に硬く締まる。北側から北東側にかけて、一部被熱している箇所がみられた。

〔炉〕東寄りに扁平な円礫が列状に並んでいたことから、石囲炉と認定した。しかし、建物床面がSI39の覆土で、断面では掘り込みを確認できなかった。炉石は若干被熱していたが、焼土は確認できず、また、割れている石があることから、建物廃絶時に壊された可能性もある。列状に配置された礫の東西が硬化しており、作り変えの可能性があるが、掘り込みが確認できなかったことから性格は定かではない。石囲炉周辺には被熱していない土器(89-2)が潰れた状態で出土した。

また、建物床面西寄りには床面が強く被熱している箇所があるが、これについては地床炉の可能性と廃絶後の焼失に伴う焼土の可能性がある。

〔柱穴・付属施設〕ピットはSI35・SI39の推定範囲内で合計41基検出された。SI39内に位置するピットのうち、pit19・21はSI39の覆土を掘り込むことからSI35に伴うと判断し、それ以外はSI39床面で検出したことから、SI39に伴うと判断した。その結果、22基が本建物に付属する可能性がある。本遺構は竪穴範囲が不明瞭であり、周囲には単独のピットも多数検出されていることから、本遺構に確実に伴うピットを抽出することは困難であるものの、規模や配置から、pit5・8・11・12・13・19・21が本遺構の主柱穴となる可能性が高い。

pit21はpit20と切り合う。pit12の1層は地山由来で水平に堆積し、硬く締まることから、床面として利用するため、埋めた可能性がある。これらについては柱穴の作り替えがあったと考えられる。

その他、北寄りで土器埋設遺構を検出した。正位で、上半部がみられなかったが、石囲炉周辺出土土器と接合した。

〔覆土〕9層に分層した。1～8層はそれぞれ焼土ブロックやロームブロック、炭化物を含む人為堆積と考えられる。9層は硬化面である。

〔出土遺物〕土器15,760g、石鏃2点、石錐1点、スクレイパー3点、磨製石斧1点、凹石1点、石皿2点、石核3点、二次加工剥片3点などが出土し、土器3点、石器10点、石製品1点を図示した。89-1は8層出土の深鉢の口縁部である。89-2は上半が石囲炉周辺で出土し、下半が埋設されていた土器である。略完形の深鉢で、口縁内面には鰭状隆帯を伴う。90-1はpit11から出土した深鉢の胴部である。3点とも大木10式併行に比定される。pit7の覆土からは石核(91-1)、pit8の覆土からはス

クレイパー類(90-6)が出土している。90-9は炉石に転用されていた石皿である。91-3は線刻礫である。鋭角状の石材で刻みを入れるものである。なお、90-2の土器片はSI39に帰属する。

[時期・所見]出土土器から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と推定される。

土器埋設遺構は、土器下半部が埋設された掘り込みが本遺構の床面精査中に確認され、一方、建物跡に伴う石囲炉の内外で同一個体の上半部が出土していることから、建物が廃絶した後、埋没する前に土器が埋設され、不要な上半部は割取られて廃棄されたと考えられる。

(久保)

第36号竪穴建物跡(SI36)（遺構第25・26図、遺物第91・92図、遺構写真31・32、遺物写真107）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢG・ⅢH75・76グリッドに位置する。Ⅶ層上面を精査中に黒色土の広がりを確認し、十字にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。SI65と重複しており、本遺構が旧い。

[規模・形態]平面形は残存部分から、径5m以上の円形もしくは楕円形を呈すると考えられる。確認面から床面までの深さは48cmである。西側の壁は外へ開きながら立ち上がるが、東側は斜面地に位置するため、壁の立ち上がりは認められない。床面はⅦ層に形成され、東側にやや傾いており、平坦で、全体に硬く締まる。東側の一部は後世の攪乱及び耕作土により削平されている。

[炉]検出されなかった。

[柱穴・付属施設]ピットは18基検出され、そのうちpit7-2～11-2、21-2、24-2、25-2は壁柱穴と考えられる。SI65で報告しているピットは明確にSI65と判断できるものがないことから、本遺構のものも含まれる可能性がある。

[覆土]9層に分層した。暗褐色土を主体とし、内側にほぼ同時期の建物跡が存在することから、人為堆積と考えられる。なお、1～3層はSI36およびSI65を通して堆積していることから、これらが埋没した後に堆積したといえる。

[出土遺物]土器21,168g、石鏃3点、石鏃未成品3点、石匙4点、石錐2点、石錐未成品1点、スクレイパー4点、磨製石斧1点、凹石5点、敲石1点、半円状扁平打製石器7点、石核3点、二次加工剥片21点などが出土し、土器6点、石器16点、土製品1点を図示した。遺物は覆土からの出土で、残存状況はよくない。91-4～6は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。91-4・5はL原体の押圧を伴う隆帯が施され、ボタン状貼り付けが付される。91-6は波頂部にボタン状貼り付けが付される。91-7は単軸絡条体第5類に刻目を伴う隆帯が施される。これらは縄文時代後期初頭に比定される。91-8・9は波状口縁を呈する深鉢の口縁部片である。91-9は沈線文に縄文が充填されるほか、縦位の刺突列が施される。91-8の波頂部は捻りのある把手状である。これら2点は大木10式併行に比定される。92-7は円盤状土製品である。側面を荒く整形している。なお覆土上層で出土した黒曜石剥片(分析No.K3、掲載外)の産地は、分析の結果(第4章第2節)木造出来島群と推定されている。

[時期・所見]出土土器に床面直上出土のものはなく、後期の土器は小片で、自然堆積する過程で流入したと考えられる。一方、大木10式併行の土器はpit2-2でも出土していることから、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

(久保)

第37号竪穴建物跡(SI37)（遺構第28図、遺構写真30）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢE・ⅢF75グリッドに位置する。Ⅴ層上面を精査中に黒色土の広がりを確認し、十字にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。SK92より旧く、SR26との新旧関係は不明である。

[規模・形態]平面形は残存部分から、長軸6.1m、短軸3.2m以上の楕円形を呈すると考えられる。確認面から床面までの深さは16cmである。西側の壁は外へ開きながら立ち上がるが、東側の壁の立ち上がりは認められない。床面はⅤ層に形成され、東側にやや傾いており、平坦である。中央2m前後の範囲が硬く締まる。

[炉]中央南寄りに小規模な焼土範囲が確認されたが、明確に炉跡と判断できなかった。

[柱穴・付属施設]ピットは8基検出され、主柱穴は不明瞭だが、pit1とpit2がそれぞれ平面形26cm、40cmの円形、深さが58cm、43cmを測り、これにあたる可能性がある。

[覆土]2層に分層した。2層上面が硬化面のため、床面と推定される。

[出土遺物]土器52g、石錘1点などが出土したが、図示はしていない。出土土器は縄文時代前期中葉の所産である。

[時期・所見]出土土器が小片のため本建物の帰属時期は不明であるものの、周囲の竪穴建物跡は縄文時代前期中葉もしくは縄文時代中期末葉～後期初頭であることから、本遺構もどちらかの可能性が高い。

（久保）

第38号竪穴建物跡(SI38)（遺構第28図、遺物第92・93図、遺構写真32、遺物写真107）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢD75グリッドに位置し、Ⅴ層上面で炭化物を含む黒褐色土の広がりとして確認した。南東側は調査区外に広がる。

[形状・規模]残存部から、径4.5m前後の平面円形もしくは隅丸方形と推定される。検出面から床面までの深さは15cmである。床面は硬化しているが、Ⅴ層を床面とする北側は判然としない。

[炉]床面中央部で皿状の掘り込みを確認した。南東端は調査区外に延びる。掘り込みの周囲はやや高く掘り残されることから、周堤炉の可能性がある。

[柱穴・付属施設]ピットは14基検出した。深さから、pit1は主柱穴の可能性がある。pit2～10は壁柱穴と考えられる。

[覆土]3層に分層した。黒褐色土及び暗褐色土で、3層は炉跡覆土である。

[出土遺物]土器2,170g、石匙1点、スクレイパー1点、磨石1点、敲石1点、二次加工剥片4点などが出土し、土器1点、石器3点、石製品1点を図示した。いずれも覆土からの出土である。大木10式併行の土器のほか、円筒下層式の土器も多く含まれる。92-8は深鉢の口縁から胴部の大破片である。2層上面で出土した。口縁部は小波状を呈する。本建物から出土した中期の土器は、すべて大木10式併行であることから、92-8も同時期と推定される。93-3は不明石製品である。側面をやや荒く加工している。

[時期・所見]出土土器から、本建物の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

（中澤）

第39号竪穴建物跡(SI39)（遺構第23・24図、遺物第90・93図、遺構写真29・30、遺物写真107）

[位置・確認状況・重複関係]Ⅲ176グリッドに位置する。Ⅶ層上面を精査中に黒色土の広がりを確認し、

十字にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。北東側は捨場の堆積土を掘り込んでいる。SI35と重複しており、本遺構が旧い。

[規模・形態]平面形は径約3.5m、確認面から床面までの深さ21cmの円形を呈する。南西側の壁はやや外へ開きながら立ち上がるが、北東側は斜面地に位置するため、壁の立ち上がりは認められない。床面はV層およびVII層に形成される。床面はやや東側に傾いており、起伏がある。中央から北側にかけて、一部硬化面が確認された。

[炉]検出されなかった。

[柱穴・付属施設]ピットは19基検出され、これらはSI35掘削時には確認されなかったことから本遺構に伴うものとした。そのうちpit23～25・27・31～35・41が壁柱穴と考えられる。

[覆土]8層に分層した。覆土は概ね地山由来のロームブロックが含まれる。

[出土遺物]土器399g、磨石1点などが出土し、土器2点、石器1点を図示した。掲載土器はどちらも10層から出土した。覆土から出土し小片であることから、本遺構には帰属しない可能性が高い。90-2は口縁部片、93-4は胴部片である。どちらも大木10式併行に比定される。

[時期・所見]時期を特定できる要素に欠けるため時期は不明であるものの、周囲の竪穴建物跡は縄文時代前期中葉もしくは縄文時代中期末葉～後期初頭であることから、本遺構もどちらかの可能性が高い。

(久保)

第40号竪穴建物跡(SI40)(遺構第28図、遺物第93～95図、遺構写真33、遺物写真108)

[位置・確認状況・重複関係]IIIG・IIIH64・65グリッドに位置し、V層上面で炭化物を含む黒褐色土の広がりとして確認した。北西側は調査区外に広がる。

[規模・形態]残存部から、平面形は径約3mの円形もしくは楕円形と推定される。検出面から床面までの深さは11cmを測る。南西側ほど壁が不明瞭となる。VI層を床面とし、硬化しているが、V層を床面とする南側は判然としない。

[炉]床面中央部で炉石の一部と推定される角礫を1点確認したが、構造・規模等は判然としない。中央付近では炭化物や焼土粒がその周囲に比べて多い。また調査区西壁で炭化物を含む黒褐色土が検出されており、炉石抜き取り痕の可能性も考えられる。また、建物周辺には前述の角礫と同規模のそれが数点認められることから、炉石が何らかの行為によって移動した可能性も考えられる。

[柱穴・付属施設]ピットは6基検出したが、明確に柱穴とは判断できなかった。

[覆土]4層に分層した。黒褐色～にぶい黄褐色土を主体とする。

[出土遺物]土器9,490g、スクレイパー1点、磨製石斧3点、凹石2点、二次加工剥片3点などが出土し、土器12点、石器5点、土製品3点を図示した。いずれも覆土から出土し、床面に接しているものはない。しかしながら、94-1・2など、比較的遺存状態が良好な資料も多く、遺物の出土量も多いことから、建物廃絶に伴う意図的な廃棄の可能性がある。

図化した土器は95-2が鉢、他は深鉢である。94-4など底部のみのものは器種を特定し難いが深鉢と思われる。93-6は口縁部から胴部上半の大破片で、条痕文が施される。93-7・8は口縁部片であり、93-7は波頂部に発達した舌状隆帯が付される。93-8は波頂部が捻りのある把手状である。93-9は沈線文が施される。土器片が広範囲に散在して出土した。93-10は胴部、94-1、94-2は略完形の個体である。94-3・4、95-1・3は胴部下半から底部であり、底面には網代痕が残る。93-9は縄文時代後期

初頭、95-2は中期末葉(大木10式併行)～後期初頭、その他は大木10式併行に比定される。95-11はミニチュア土器である。すくい具であり、柄の部分が折損している。付着物は確認できない。95-9は土偶である。臍が刺突で表現されている。脚の痕跡がみられる。

〔時期・所見〕出土遺物から、縄文時代中期末葉(大木10式併行期)～後期初頭の竪穴建物跡と考えられる。

(中澤)

第41号竪穴建物跡(SI41)(遺構第29図、遺物第96図、遺構写真33、遺物写真107)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣI～ⅣK82・83グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲はⅠ～Ⅳ層が削平されているため遺構上部は滅失している。規模・柱穴と炉跡などから建物跡と判断した。ピットや炉の新旧関係から2時期(SI41a・b)の変遷が認められ、SI41aがSI41bより新しい。

〔規模・形態〕現存する平面プランと床面はSI41aのものである。削平のため、西側の掘方は確認できたが、東側の立ち上がりは認められない。検出面からの深さは最深で60㎝である。検出した部分の壁はやや開いて立ち上がり、床面はⅤ層を平坦に仕上げている。竪穴の平面形は、検出部分の形状より、径6m前後の円形もしくは楕円形と推測される。

〔炉〕床面中央付近から2基検出した。どちらも床面を浅く掘り込んだ炉で重複はせず、火床面はみられない。覆土の観察からSI41aに伴うのは炉1である。平面形が径約40㎝の円形で、床面からの深さは4㎝である。炉2の確認面には貼床状の粘土がみられたため、これがSI41bの炉とみられる。平面形は径約35㎝の円形で、床面からの深さは8㎝である。

〔柱穴・付属施設〕ピットを11基確認した。SI41aに伴う柱穴はpit1・2・3・4で、1間×1間の長方形配置となる。SI41bに伴う柱穴はpit7・9-1・10・11の4本と推定され、1間×1間の長方形配置となる。その他、竪穴南西部分と北部分には壁溝を伴う。壁溝の幅は約7～13㎝、床面からの深さは約10㎝である。

〔覆土〕覆土は2層に分層した。おおむねⅢ層由来の黒色シルト質土を母材とする。

〔出土遺物〕土器4,340g、石錐1点、スクレイパー1点、凹石3点、半円状扁平打製石器5点、石核1点、異形石器1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器3点、石器4点、土製品1点を図示した。いずれも覆土からの出土であるが、96-1・2は残存状況が良好であることから、一次廃棄の可能性も考えられる。石器や土製品は覆土出土であることから、混入と考えられる。

96-1・2は円筒下層b2～c式に比定される。96-1は略完形の深鉢である。条痕文が口縁部は横位に、胴部は縦位に施される。口縁部は緩く外反し、内面は丁寧に磨かれている。底面は上げ底となっている。96-2は深鉢の口縁～胴部である。羽状縄文が口縁部と、胴部に帯状に施文され、胴部には単軸絡条体第1類も縦位に回転施文されている。96-3は深鉢の口縁から胴部片である。頸部に指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。円筒下層a～b1式に比定される。96-8は円盤状土製品である。側面をやや荒く整形している。

〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層b2～c式期と考えられる。SI41aは規模の点で本遺跡前期後葉期の竪穴建物跡の中で大型の部類である。なお、炉2の2層で出土した炭化材の同定の結果、クリが確認されている。

(茅野)

第42号竪穴建物跡(SI42)（遺構第29図、遺構写真34）

[位置・確認状況・重複関係]ⅣS86・87グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲はⅠ～Ⅳ層の削平がみられ、遺構上部は破壊されている。炉の検出と床面などの状況から建物跡と判断した。新旧２時期(SI42a･b)の変遷が想定される。

[規模・形態]現存する壁はSI42aのものである。削平のため、竪穴の掘方は南西の一部のみ検出した。北西部分は調査区外に広がる。検出面からの深さは最深で26㎝である。検出した部分の壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ層を平坦に仕上げている。竪穴の平面形は、土層断面より、径約2.5ｍの円形もしくは楕円形と推定される。

[炉]床面を浅く掘り込んだ炉である。平面形は径約55㎝の不整円形で、床面からの深さは８㎝である。火床面や炭化物は検出されなかった。

[柱穴・付属施設]ピットを４基確認した。pit1・3・4が本遺構の主柱穴とみられる。pit4は柱の設置痕が２か所みられたため重複する２基のピットである可能性がある。pit1は覆土が建物覆土と近似した黒色土主体であるのでSI42aに伴うのものと考えられる。pit3・4は上層にⅤ層由来土が堆積しており、貼床状に蓋がされたと推定されることから、SI42bの柱穴とみられる。柱穴の配置は竪穴の全容が不明であるため提示できないが、炉跡を挟んで柱穴が対置するものと考えられる。

[覆土]覆土は５層に分層した。１～３層はⅢ層由来の黒色土主体である。４・５層は貼床の可能性がある。

[出土遺物]遺物は出土していない。

[時期・所見]調査部分の形状からは詳細な時期比定は不可能だが、炉の形状から円筒下層式期に帰属する可能性が高い。

（茅野）

第43号竪穴建物跡(SI43)（遺構第30図、遺物第97・98図、遺構写真34、遺物写真109）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢT～ⅢV77グリッドに位置する。黒色土(Ⅲ～Ⅳ層)中に褐色土(Ⅱａ類似層)のプランを検出した。規模・床面の状況・炉の存在から建物跡と判断した。

[規模・形態]斜面地のため、竪穴の掘方は西側のみ検出した。検出面からの深さは最深で45㎝である。検出した部分の壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅣ～Ⅴ層を平坦に仕上げている。竪穴の平面形は、残存する西側の形状より、長軸5.5ｍ、短軸2.7ｍ程度の細長い楕円形と推定される。

[炉]床面を浅く掘り込んだ炉である。平面形は長軸74㎝、短軸50㎝の楕円形で、床面からの深さは８㎝である。火床面や炭化物は検出されなかった。

[柱穴・付属施設]本遺構に伴う柱穴を３基確認したが１基は図化していないため、推定される上端線を図に示した。また、pit1は２本の柱穴が重複しているため新旧２時期の配置が考えられる。２時期共に炉跡を挟んで南北に配置されるとみられる。

[覆土]覆土は３層に分層した。最上位にⅡａ層に類似する土層が堆積し、１～３層はⅡ～Ⅲ層由来の黒褐色シルト質土を母材とし、暗褐色の粘質土塊を含む。

[出土遺物]土器14,755ｇ、石匙１点、石篦１点、凹石１点、敲石４点、半円状扁平打製石器１点、石核１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器６点、石器７点を図示した。いずれも覆土から出土しており、混入と考えられる。また、Ⅱ層で出土した97-1・3・4、98-2は、本建物の上面に形成される

捨場に廃棄された遺物の可能性がある。97-2は1層から出土している。

97-1・2は円筒下層b2式に比定される。2点とも口縁形態は波状で、口縁部文様帯は上下幅が広い。頸部には低い隆帯が巡る。97-1は口縁部に縄文原体が縦位と横位に押圧される。97-2は羽状縄文が施される。97-3・4は円筒下層a～b1式に比定される。97-3は胴部中位がやや膨らむ器形で、頸部に指頭圧痕がみられる隆帯の上下に爪形刺突が施されている。97-4は指頭圧痕がみられる隆帯を持ち、全面に結節回転文が施される。97-6は大木10式併行に比定される口縁部破片である。

[時期・所見]1層出土の土器が円筒下層b2式土器に比定されるため、本遺構の帰属時期はそれ以前となる可能性が高い。

(茅野)

第44号竪穴建物跡(SI44)(遺構第30図、遺物第98図、遺構写真35、遺物写真108)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢV77・78、ⅢW78グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層中にⅡa類似層に由来する暗褐色土のプランを検出した。規模・炉の存在や柱穴の配置状況から建物跡と判断した。炉跡の確認状況等から新旧2時期(SI44a・b)の変遷を確認した。

[規模・形態]現存する竪穴プランはSI44aのものである。緩斜面に構築されるため、西側はⅢ～V層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。竪穴の平面形は、長軸3.8m、短軸2.4mの楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅣ～V層を平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で64cmである

[炉]2基検出した。どちらも床面を浅く掘り込んだ炉で、火床面は検出されなかった。建物ほぼ中央に位置し、重複はしないが、炉1の1層は貼床のため、炉2が炉1より新しく、SI41aに伴うと判断した。炉2の平面形は径約40cmの不整円形で、床面からの深さは5cmである。SI44bに伴う炉1の平面形は70cm×58cmの不整形で、床面からの深さは10cmである。2層は掘方上に充填された土で、この土の上面が炉床の可能性がある。

[柱穴・付属施設]床面でピットを4基確認した。炉をはさんで北側に2基、南側に2基位置する。SI44aに伴うものはpit1・2で、SI44bに伴うものはpit3・4となる。炉跡との対応関係をみると、それぞれのピットを結んだラインと炉がずれる特徴がみられる。

[覆土]6層に分層した。上半の1・2層はやや褐色がかった色調で、Ⅱa類似層由来の粘質土塊を含む。下位層はⅡb～Ⅲ層由来の黒色シルト質土にV層粒が混入している。

[出土遺物]土器1,400g、石核1点などが出土し、土器2点と石核1点を図示した。図化した土器2点はいずれも円筒下層a～b1式に比定されるが、1～2層から出土しており、小片であることから、覆土に混入した可能性が考えられる。他に図化はしていないが、炉1、炉2脇、床面直上から縄文時代前期中葉の土器破片が出土している。98-10の石核は炉2脇から出土していることから、本建物に伴う可能性が考えられる。

[時期・所見]出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層a～b1式期以降と考えられる。

(茅野)

第45a号竪穴建物跡(SI45a)(遺構第31図、遺物第99・100図、遺構写真35、遺物写真109・110)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢT・ⅢU80・81グリッドに位置する。Ⅲ層中に暗褐色土のプランと炉の石組を検出した。炉の存在や床面の状況等から建物跡と判断した。SI45b、SI54、SI67と重複し、

本建物が最も新しい。

[規模・形態]SI45aは単時期の建物跡である。竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅡ～Ⅲ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。南壁は開いて立ち上がり、床面はSI45bの覆土を平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で42cmである。竪穴の平面形は、検出部分から径約4mの円形もしくは楕円形と推定される。

[炉]石囲炉である。竪穴床面の東側に位置する。SI16やSI23の複式炉石組部に類似することから、複式炉の可能性も考えられるが、明確な前庭部は検出できなかった。平面形は南北を長軸とする72cm×67cmの隅丸長方形である。SI45bの覆土3層を炉床とし、床面から炉床までの深さは13cmである。炉石は9個検出された。一辺に2個の礫が配され、北西隅には小礫が1個伴う。炉石には15cm～35cmの扁平な礫が用いられ、短軸を立てて据えられている。炉石の掘方は溝状であり、炉石個々の掘方は持たない。炉内の西寄りには焼土面が形成される。被熱の深さは約8cmである。炉に使用された礫は炉内外共に被熱し赤変していた。炉の周辺からは扁平でやや大型の礫が5個出土した。いずれも床面には接しておらず廃絶時に廃棄されたと考えられる。特にpit12には礫が詰められたような状況が見られる。これらの礫は被熱していない。

[柱穴・付属施設]本遺構に伴うのはpit5・6・12・Aの4基で、1基(pitA)は図化していないため、推定の上端線を図示した。また、炉の南側の礫付近には本来ピットが存在する可能性があったが検出できなかった。これらを総合した状況から主柱穴は五角形の配置になると推定される。建物西壁付近では土器埋設遺構(pit3)を検出した。埋設土器(99-1)は底部が意図的に欠かれた深鉢で、正位に埋設される。口縁上端から10cm程度の範囲には、竪穴覆土の1層が堆積することから、埋設土器は上端が10cm程度表出していたと復元される。掘方は径約30cmの円形平面と推定され、床面からの深さは32cmである。2層はV層粒をやや多く含むため、掘方を掘削した土を埋め戻した可能性がある。2層の上面は竪穴床面とほぼ同レベルであり、その上に1層に近似した土層がみられることから、少なくとも竪穴廃絶時までは土器の口縁部付近が床面に突き出た状態であったと考えられる。その他の、SI45bとの重複範囲に位置するピットは、どちらに帰属するか特定しがたい。

[覆土]Ⅱ層由来の黒色シルト質土の単層である。

[出土遺物]SI45bを含む覆土などから土器15,240g、石鏃2点、スクレイパー4点、凹石2点、敲石2点、石核4点、二次加工剥片6点などが出土し、土器7点、石器8点、土製品3点、石製品2点を図示した。出土土器は大木10式併行のほか、円筒下層式に属するものも多い。99-1は埋設土器である。99-7は中央部の覆土からまとまった状態で出土した。99-5は99-7の同一個体の可能性がある。

99-1は底部が意図的に欠かれた深鉢である。縄文が縦走する。99-7は深鉢の口縁から胴部である。地文縄文に沈線文が施される。99-2・3は深鉢の口縁部片である。99-3は内面に、99-2は外面に鍔状隆帯が付される。99-4深鉢の胴部片である。沈線文に縄文と刺突が充填される。99-5は底部である。底面に網代痕が残る。これら6点は大木10式併行に比定される。99-6は深鉢の口縁から胴部片である。単軸絡条体第1類を格子目状に施文する。円筒下層a～b1式に比定される。100-9は土製品である。すくい具であり、柄の部分が折損している。付着物は確認できない。100-10は板状土偶である。頭部は後頭部がやや後方へ突き出し、頭頂部には未貫通孔がみられる。顔面は鼻を粘土貼付で整形し、刺突で鼻孔を1か所表現している。両目は刺突で表現されている。両腕は斜め上に広げ、斜め方向に

貫通孔がみられる。両腕から脚部にかけての前面には3列の刺突列が体側部に沿ってみられ、臍部分で合流している。背面には腕先端部から脚部にかけて刺突列が1列みられる。臍と乳房は粘土粒貼付により成形され、頂部に刺突がみられる。脚部は前後にせり出し、足裏側からの未貫通孔がみられる。出土状況は定かでないが、覆土中から出土したことは確実であるため、縄文時代中期末葉に帰属すると思われる。通常当地域のこの時期の土偶は顔面が筒状に突き出す一本松土偶型式が一般的だが、本例は顔面が平板な点が特異である。100-11は円盤状土製品である。側面をやや荒く整形している。100-12・13は不明石製品である。どちらも側面をやや荒く加工している。

〔時期・所見〕本建物の帰属時期は、床面に構築された土器埋設遺構の時期から大木10式併行期と考えられる。

（茅野）

第45b号竪穴建物跡(SI45b)（遺構第31図、遺物第101図、遺構写真36、遺物写真110）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢT・ⅢU80・81グリッドに位置する。Ⅴ層中およびSI45a精査中に検出した。SI45a、SI54、SI67、SI68と重複し、SI45aより旧く、SI67、SI68より新しい。規模・床面の状況や柱穴の配置状況等から建物跡と判断した。なお、南側壁際付近が風倒木により破壊されている。この風倒木はSI45aより旧い。SI54との新旧関係は不明である。

〔規模・形態〕竪穴の平面形は、長軸5.1m、短軸4.1m程度の隅丸方形とみられる。壁はⅢ～Ⅴ層を掘り込みやや開きながら立ち上がり、床面には南と西側隅付近の2か所に比高24cm程度のテラスを構築し、床面中央部ではⅤ層を平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で74cmである

〔炉〕床面中央付近に僅かな凹みを数か所確認したが、炉と認定できるものはなかった。

〔柱穴・付属施設〕pit2・7・10・13が規模や配置の状況から主柱穴と判断した。pit2・7はテラスの角付近に穿たれている。柱穴配置は1間×1間の長方形か台形である。pit14・16など、SI45aとの重複範囲に位置するピットについては、どちらに帰属するか特定しがたい。

〔覆土〕3～5層が相当する。Ⅲ層由来の黒色シルト質土にⅤ層粒が混入する。

〔出土遺物〕土器2,650g、石鏃1点、石匙1点、スクレイパー1点、凹石1点、半円状扁平打製石器1点、石核1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器4点、石器5点を図示した。土器はいずれも小片であり、覆土から出土したことから、混入と推定される。石器も覆土から出土しており、本遺構に帰属するか否かは判然としない。図示した土器はすべて深鉢の口縁部片である。101-1～3は口縁部に結節回転文、101-4は単軸絡条体第1類が押圧される。4点とも円筒下層b1～b2式に比定される。

〔時期・所見〕重複関係から、本建物の帰属時期は円筒下層b2式期以降と考えられる。床面隅にテラスを2か所持つ竪穴建物である。なお、pit3の2層で出土した炭化材の同定の結果、クリとケンポナシ属が確認され、1～2層ではクリとニレ属、イネ科が確認されている。

（茅野）

第46号竪穴建物跡(SI46)（遺構第30図、遺物第101図、遺構写真36）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢV76、ⅢU・ⅢV77グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で検出した。北東部は風倒木により攪乱を受けており、南部は調査時の掘削により滅失する。炉跡の存在から建物跡と判断した。

〔規模・形態〕竪穴の掘方は北西部分のみ検出した。壁は開いて立ち上がり、床面は炉跡に向かって緩

く傾斜している。検出面からの深さは最深で40㎝である。残存部分から、竪穴の平面形は径約2.7mの円形もしくは楕円形と推測される。

〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉である。風倒木などにより滅失しており、部分的に確認した。床面からの深さは10㎝である。

〔柱穴・付属施設〕ピットを1基確認した。炉の北西に位置する。おそらく主柱穴と考えられるが、詳細は不明である。

〔覆土〕4層に分層した。Ⅱb～Ⅲ層由来の黒褐色シルト質土が母材である。

〔出土遺物〕土器1,200g、二次加工剥片1点などが出土し、土器1点を図示した。101-10は円筒下層b1～b2式に比定される。口縁部が外反して開く。小片であり、覆土から出土したことから、混入と推定される。

〔時期・所見〕出土土器から、本遺物の帰属時期は円筒下層b1～b2式期以降と考えられる。

（茅野）

第47号竪穴建物跡(SI47)（遺構第32図、遺物第101・102図、遺構写真37、遺物写真110）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢS・ⅢT77・78グリッドに位置する。Ⅲ層中にⅡa類似層由来の褐色土のプランを検出した。南側で風倒木と重複するが、本遺構が新しい。規模・炉跡と柱穴の存在などから建物跡と判断した。

〔規模・形態〕緩斜面に構築され、斜面下方が攪乱により破壊されているため、竪穴の掘方は西側のみ検出した。確認した深さは最深で75㎝である。壁は開いて立ち上がり、床面はⅣ～Ⅴ層を平坦に仕上げている。残存部分から竪穴の平面形は、長軸3m前後の楕円形と推測される。

〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉である。建物中央やや南寄りに位置する。平面形は41㎝×33㎝の楕円形で、床面からの深さは6㎝である。焼土や炭化物等は検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕本遺構に伴う主柱穴を2基確認した。炉を挟んで南北に位置する。

〔覆土〕5層に分層した。上位層（1層）はⅡa類似層由来の粘質土を多く含む捨場の堆積土である。2層も色は黒みが強いが同じ性格の土層と考えられる。3層以下はⅡb～Ⅲ層由来の黒色シルト質土母材の土層でⅤ層粒を含む。

〔出土遺物〕土器11,400g、石匙3点、スクレイパー1点、磨製石斧2点、凹石1点、敲石3点、半円状扁平打製石器3点、石皿1点、台石1点、石核2点、両面調整石器1点、二次加工剥片4点などが出土し、土器4点、石器14点を図示した。比較的多くの遺物が出土したが、本建物の上面には捨場が形成されることから、上層から中層で出土した遺物は捨場に帰属する可能性がある。図示した土器は全て円筒下層a～b1式に比定される。その中で、101-14は中層で出土したが帰属層位は2層である可能性が高い。101-14は口縁部・胴部に結節回転文が帯状に施文されている。胴部の地文は単軸絡条体第1類を縦位に回転施文している。頸部には指頭圧痕を伴う隆帯がみられる。なお、上層から出土した黒曜石の剥片（掲載外）の産地分析（分析NoK4）の結果、木造出来島群と推定されている。

〔時期・所見〕出土土器から、本遺物の帰属時期は円筒下層a～b1式以降と考えられる。

（茅野）

第48号竪穴建物跡(SI48)（遺構第32図、遺物第103図、遺構写真37、遺物写真111）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢR77グリッドに位置する。Ⅲ層中に暗褐色のプランと遺物の集中を検

出した。床面が若干硬化している状況や柱穴配置などから建物跡と判断した。
〔規模・形態〕斜面部に構築されているため、竪穴の掘方は西側のみ検出した。検出面からの深さは最深で54cmである。壁はやや開いて立ち上がり、床面はⅣ～Ⅴ層を平坦に仕上げている。残存部分から竪穴の平面形は、径約2.5mの円形もしくは楕円形と推測される。
〔炉〕確認されなかった。
〔柱穴・付属施設〕本遺構に伴う主柱穴を２基確認した。
〔覆土〕２層に分層した。おおむねⅡb～Ⅲ層由来の黒色シルト質土が母材で、Ⅴ層粒やⅣ層由来と推定される暗褐色土塊を少量含んでいる。
〔出土遺物〕土器1,860g、スクレイパー１点、敲石１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器２点を図示した。２点共に円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。103-1は小片であり、覆土から出土したことから、混入と推定される。103-2は壁際の２層で出土した。初期覆土に混入していた可能性がある。頸部に刺突を伴う高い隆帯が巡り、口縁部と隆帯直下に結節回転文が施文される。
〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と考えられる。

（茅野）

第49号竪穴建物跡(SI49)（遺構第32図、遺構写真37）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣN85、Ⅳ0 84・85、グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲はⅠ～Ⅳ層が削平されており、遺構上部は破壊されている。炉跡や柱穴の存在から建物跡と判断した。
〔規模・形態〕削平のため、竪穴の掘方は西側のみ検出した。検出面からの深さは最深で22cmである。壁は開きながら立ち上がる、床面はⅤ層を平坦に仕上げており、中央部分に硬化範囲を検出した。また、南側に比高約10cmの半円状のテラスをもつ。残存部分から竪穴の平面形は長軸4.5m程度の楕円形と推定される。
〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉である。建物中央付近に位置する。平面形は長軸50cm前後の楕円形で、床面からの深さは４cmである。底面は硬化している。火床面や炭化物は検出されなかった。
〔柱穴・付属施設〕本遺構に伴う柱穴を２基確認した(pit2・6)。柱穴を結ぶラインと炉の位置がずれている。pit2はテラス端部に構築されている。床面北側には70cm×50cm、深さ12cmの浅い土坑(pitA)を検出した。覆土は建物跡２層と同じであるため、廃絶時まで開口していたと考えられる。用途等は不明である。また、周辺には大小のピットが他に11基存在するため、併せて図示した。
〔覆土〕３層に分層した。おおむねⅢ層由来の黒色シルト質土を母材とし、Ⅴ層粒をやや多く含む。
〔出土遺物〕覆土から剥片が出土したのみである。図化はしていない。
〔時期・所見〕柱穴配置や炉の特徴のほか、床面端部にテラスを持つことなどから縄文時代前期に帰属する可能性が高い。

（茅野）

第50号竪穴建物跡(SI50)（遺構第32図、遺物第103図、遺構写真37、遺物写真111）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣM・ⅣN83～85グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。周囲はⅠ～Ⅳ層が削平されているため遺構の上部は無くなっている。炉の覆土の状況と柱穴配置から新旧２時期(SI50a・b)の変遷が想定される。
〔規模・形態〕現存する平面プランはSI50aのものである。削平のため、竪穴の掘方は西側のみ検出した。

検出面からの深さは最深で22cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ～Ⅵ層を平坦に仕上げている。残存部分や柱穴の配置から竪穴の平面形は径約6.5mの円形もしくは楕円形と推定される。

〔炉〕建物跡中央付近に床面を浅く掘り込んだ炉を検出した。規模は72cm×55cm、深さ16cmである。覆土の観察から新旧２時期で使用された可能性がある。SI50aに伴う新期炉跡は3層下部のⅤ層塊が層状に堆積する部分の上面を、SI50bに伴う古期炉跡は4～5層上面を炉床としていた可能性がある。共に炭化物粒は検出されたが焼土は検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕ピットを22基確認した。また、遺構周囲にも柱穴がみられるため併せて図示した。まず、壁際にはほぼ等間隔に小規模な壁柱穴が９基(pit1～pit7・36・37)みられる。おそらくSI50aに伴うとみられる。主柱穴はSI50aに伴うものがpit12・30・32、SP549で、SI50bに伴うものがpit11・35・31、SP548と判断したが、根拠は無い。

〔覆土〕覆土は大半が失われているため詳細は不明であるが、Ⅲ層由来の黒色シルト質土を母材としているようである。

〔出土遺物〕土器310g、石鏃未成品１点、敲石１点、二次加工剥片２点などが出土し、土器１点、石器１点を図示した。いずれも覆土から出土していることから、覆土に混入したものと考えられる。103-3は深鉢の口縁部片である。円筒下層b2～c式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器や建物形状等から、本建物の帰属時期は円筒下層b2～c式期以降と考えられる。

(芋野)

第51a号竪穴建物跡(SI51a)（遺構第33・34図、遺物第103～105図、遺構写真38、遺物写真111）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢW・ⅢX79・80グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層で検出した。SI13、SI51b・SI52a・b・SR27と重複し、本遺構が新しい。平坦な床面と石囲炉・柱穴を確認したことから建物跡と判断した。柱穴や炉の新旧関係から少なくとも３時期(SI51a新・中・古)の変遷が推定される。

〔規模・形態〕現存する平面プランはSI51a新段階のものである。竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅢ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは土層断面以外では確認できなかった。検出面からの深さは最深で54cmである。壁は開いて立ち上がり、床面はⅢ～Ⅴ層を掘削し、平坦に仕上げている。床面中央部分にはⅤ層を母材とした貼床が施されている。残存部分から竪穴の平面形は径5.3mの円形もしくは楕円形と推定される。中段階と古段階の規模は不明である。

〔炉〕石囲炉である。竪穴の東側に位置する。SI16やSI23の複式炉石組部に類似することや、石組部東側の床面が若干低いことから、複式炉の可能性も考えられるが、明確な前庭部は検出できなかった。平面形は南北を長軸とする100cm×80cmの長方形である。火床面の状況から３時期の変遷が推定される。火床面は最上面の1層と最下面の4層の赤みが強い。これは、１層は炉外７層に対応する貼床であることと、４層はⅤ層が被熱したため赤くなりやすかったことに起因するとみられる。間隙の３層は炉外の８層に相当するとみられ、暗褐色土層が母材であることからあまり赤くならなかったとみられる。１層が新段階、３層が中段階、４層が古段階の火床面と判断した。新段階の床面から1層炉床までの深さは８cmである。58cm×47cmの範囲が被熱している。炉石は17個検出された。炉石には25cm～50cm程度の扁平な礫が用いられ、短軸を立てて据えられる。西辺のみ二重に配されており、外側には15cmほどの小礫が用いられる。外側にみられる小礫は古段階の掘方の直上に８層で埋めることで立てられているため、中段階で付加されたと判断した。その後７層の貼床を貼られている。他に、

北東隅と南東隅、東辺の一部にも小穴が配される。炉石の掘方は溝状に巡っている。穴は内外共に被熱で赤変しているが、中段階で付加された西側の列については被熱が弱い。

[柱穴・付属施設]床面でピットを21基確認した。この内３基(pitA～C)については図化していないため、推定上端線を図示した。また、柱の設置痕が複数確認されたものが３基ある(pit1～4・7)。これらは重複関係を持つ２基の柱穴であるがpit1以外の新旧を確認できなかった。配置から2段階を想定した。新段階に伴うピットはpit3-1・4-2・9・10・11・13・A・B・Cの９本である。壁際にみられ、多角形の配置となる。pit11には廃絶時に103-5の深鉢が廃棄されている。中段階に伴うpitはpit1-3・2-1・3-2・4-1・5・7-1・17の７本である。pit1-3は最終的に１層により埋められていることから本段階に伴うものとした。古段階に伴うピットはpit1-1・2-2・6・14・16の５本である。他に、建物中央付近では５層が被熱した焼土(5a層)を検出した。建物北側では壁溝を２条検出した。どちらもピットに接続する。

[覆土]９層に分層した。全体に付近のⅡ層由来の黒～黒褐色土シルト質土主体の土層である。５層は炭化材をやや多く含み、Ⅱa類似層由来の土層を含んでいる。おそらく人為的に埋め戻されており出土遺物の多くもこの５層と同時に廃棄されたものと判断した。ちょうど炉跡上面にはⅤ層上面が被熱した焼土が帯状に検出された。５層より上位の土層は自然流入の可能性が高い。

[出土遺物]SI51ｂを含む覆土などから土器17,646g、石錘１点、スクレイパー１点、凹石１点、磨石２点、半円状扁平打製石器２点、石核４点、二次加工剥片３点などが出土し、土器９点、石器７点、土製品１点、石製品１点を図示した。出土土器は大木10式併行のほか、円筒下層式に属するものも多い。103-5はpit11から出土した(整理時には最下層のP-7出土として登録されている)。103-6・7、104-1は最下層(５・６層に相当)から出土している。覆土の項でも触れたが、本建物の廃絶に伴い廃棄された可能性が高い。104-1は５層の最上位付近から出土した。103-8は漆液容器である。覆土出土とあるが、pit7付近の５・６層に相当する層から出土したことを調査段階で確認している。103-6・7が赤色顔料容器であることから、関連性が窺われる。他は土器・石器ともに覆土から出土していることから、覆土に混入した可能性が考えられる。

103-5、104-1は略完形の深鉢である。地文縄文に沈線が施される。103-5は口縁部に歪みが認められる。103-8は小形の鉢である。外面はナデ調整である。上面観と底面が楕円形を呈し、口縁部の対向する位置に細い工具による焼成前の穿孔が１対設けられる。内面には全面に漆膜が付着し、底面から約１cmの高さに喫水線がみられ、それより下位に縮み皺が顕著である。漆膜は黒色を呈するが、膜が薄い部分は極暗赤褐色である。外面口縁部と底部付近には液垂れが認められる。外面下部には被熱痕跡もみられるが、建物焼失の際の二次被熱である可能性もある。103-6・7は小形深鉢の底部である。内面全面に赤色顔料が付着することから、赤色顔料容器と考えられる。土器上端の欠損部には赤色顔料の付着や磨滅が認められず、使用時の容器形状は特定し難いものの、２点の赤色顔料容器および前述の漆液容器の法量に斉一性が認められることから、現状が使用時の形状である可能性が高い。

103-9～12は深鉢の口縁部片である。103-9は波頂部に蛸状隆帯を伴う。103-10は小形品で外面に縄文が施文されている。103-11は口縁内外面に隆帯と刺突列を伴う。これら３点は大木10式併行に比定される。103-12は口縁部に結節回転文が施される。円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。105-2は円盤状土製品である。側面をやや荒く整形している。105-3は不明石製品である。柳葉状を呈する。

他に図示はしていないが、角柱状に加工した棒状礫を折って整形した石棒も出土している。
〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。３時期にわたる変遷がみられ、最終的に遺物や土が廃棄された後に火をかけられ廃絶した焼失建物である。漆工に関連する容器が出土したことが特記される。

（茅野）

第51b号竪穴建物跡(SI51b)（遺構第33・34図、遺物第105図、遺構写真39、遺物写真111）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢV・ⅢW 79・80グリッドに位置する。SI51aを精査中にⅢ～Ⅳ層で検出した。SI51a･SI52と重複し、SI51aより旧くSI52aとの新旧関係は不明である。床面の状況と規模から建物跡と判断した。
〔規模・形態〕SI51aに北側を掘削されているため、竪穴の掘方は西側のみ検出した。検出面からの深さは最深で30cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅣ～Ⅴ層を平坦に仕上げている。床面南側にはⅤ層由来の土層が面的に広がる貼床と、テラス状の高まりがみられる。pit2の南側には床面が硬化した部分を確認した。残存部分から竪穴の平面形は円形もしくは楕円形と推定される。
〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉を硬化範囲の南端で検出した。平面形は49cm×36cmの不整な楕円形で深さは10cmである。火床面等は確認されなかった。pit1・2を結ぶラインより東にずれている。
〔柱穴・付属施設〕ピットを７基確認した。規模や配置からpit1・2が主柱穴と考えられる。pit1はテラスの端部に位置する。pit3～7は壁際に巡ることから、壁柱穴と考えられる。
〔覆土〕４層に分層した。Ⅲ層由来の黒色シルト質土が主体でⅡa類似層由来の褐色土塊が少量混入している。
〔出土遺物〕土器740g、石錐１点などが出土し、土器１点、石器１点を図示した。いずれも覆土からの出土であることから、混入の可能性が考えられる。105-4は深鉢の底部である。上げ底を呈し、底面にも縄文がみられる。円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。
〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と考えられる。床面長軸端部にテラスを持つ建物跡である。

（茅野）

第52号竪穴建物跡(SI52)（遺構第33・34図、遺物第105図、遺構写真39、遺物写真111）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢV78、ⅢW78・79グリッドに位置する。SI51a精査時にⅣ～Ⅴ層で検出した。床面、炉、柱穴の検出状況から建物跡と判断しSI52aとした。南西壁に段差がみられたため、その部分をSI52bとした。新旧関係は不明である。また、SI51aより旧く、SI51bとの新旧関係は不明である。
〔規模・形態〕規模についてはSI52aのみ記述する。竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅢ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりはSI51aに掘削されているため認められない。検出面からの深さは最深で20cmである。壁はやや開きながら立ち上がり、床面はⅤ層を平坦に仕上げている。残存部分から竪穴の平面形は長軸3.4m、短軸2.4m程度の楕円形と推定される。
〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉で床面のほぼ中央に位置する。平面形は76cm×53cmの不整な楕円形で、床面からの深さは14cmである。北側がやや深く南側の浅い部分と２時期あることが想定される。火床面等は検出されなかった。なお、pit6は炉を構築する際にⅤ層由来土で蓋をされていた。

〔柱穴・付属施設〕ピットを７基確認したが、内１基(pitA)は図化していないことから、推定上端線を図示した。ほぼ長軸に沿って並んで検出された。pit4は建物廃絶段階で蓋をされているため、pit4・6は最終段階の柱穴ではないことがわかる。確認状況等からpit6が最古段階の柱穴で、単独で上屋を支えていたとみられる。次の段階はpit3・7が主柱穴と想定される。次の段階はpit2・4が主柱穴と想定される。最終段階はpit1と5が主柱穴と想定されるが、これらの段階と炉との対応関係は不明である。

〔覆土〕３層に分層した。Ⅲ層由来の黒色シルト質土が主体でV層粒・塊が混入する土層である。②層にはV層由来の土塊がやや多く混入することから人為的に投棄された土層と考えられる。最上層にはⅡa類似層由来の土層が堆積する。

〔出土遺物〕土器3,660g、凹石３点、敲石３点、半円状扁平打製石器２点、石皿１点、両面調整石器１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器３点、石器６点、土製品１点を図示した。105-7・9・10は③層(取り上げ時４層)から出土している。③層は床面直上の層だが②層との時間差があまりない可能性があるため、①～③層出土遺物はいずれも覆土に混入したものと考えられる。

図示した土器は３点とも深鉢の口縁部片である。105-6は口縁部に結束第1種羽状縄文が極浅く施文され、頸部に３条の沈線が巡る。105-7は結節回転文が施文される。105-8は単軸絡条体第１類が施文される。いずれも円筒下層b2～ｃ式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層b2～ｃ式期以降と考えられる。

(茅野)

第53号竪穴建物跡(SI53)（遺構第35図、遺物第106～109図、遺構写真40、遺物写真112）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢT78、ⅢS～ⅢU79グリッドに位置する。Ⅲ層中にⅡa類似層由来の褐色粘質土のプランを検出した。規模・柱穴配置状況、炉の存在などから建物跡と判断した。SK111と重複するが新旧関係は不明である。

〔規模・形態〕竪穴の平面形は長軸5.1m、短軸4.5mの楕円形で、検出面からの深さは最深で1mである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はV層をほぼ平坦に仕上げている。床面中央には硬化範囲と重なる変色範囲がみられた。この部分は壁際の床面より若干低くなっている。

〔炉〕３基検出した。いずれも床面を浅く掘り込んだ炉で建物ほぼ中央に位置する。重複はしない。いずれも平面形は円形で、炉１は径約35cm、床面からの深さ2cm、炉２は径約35cm、床面からの深さ４cm、炉３は径約30cmである。火床面は検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕ピットを７基確認した。炉跡が３基あるが、主柱穴配置として新旧の配置が想定できたのは２時期である。新期はpit1・3・4・7が、古期はpit2・6が対応する。pit1・4・7は建物覆土８・９層が上位に堆積することを確認しているため、廃絶時まで開口していたと考えられる。pit2・6は確認面に貼床がみられたため古期と判断した。したがって、２本から４本へ主柱穴配置が変化したことになる。

〔覆土〕10層に分層した。１・２層はⅡa類似層由来の粘質土であり、掘場の土層である。３・４層は上位層に比べ黒みが強いが、粘質土塊を含む層であり、Ⅱa類似層の下部に相当する可能性がある。５層より下位層はⅢ層由来の黒色シルト質土が母材でV層粒が混入する。

〔出土遺物〕土器19,820g、石鏃未成品１点、石匙３点、石錐１点、スクレイパー３点、凹石５点、敲

石３点、磨石３点、半円状扁平打製石器９点、石皿５点、石核６点、二次加工剥片13点などが出土し、土器６点、石器21点、円盤状石製品３点を図示した。107-6・7の石皿や109-5の円盤状石製品は床面で出土したことから、本建物に帰属すると考えられる。106-2・5は最下層で出土しており、本建物の時期を示す遺物の可能性がある。他はすべて覆土上層から出土した。土器とともに、石器の出土点数が多いことが特筆される。

106-1～3・5は円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。106-1・2・5の口縁部には結節回転文が施文され、106-5の頸部には隆帯上とその裾部に指頭圧痕が連続施文されている。SI61覆土出土の116-4と同一個体とみられる。106-4・6は円筒下層b2式に比定される。106-4は口縁部に単軸絡条体第6A類が施文される。106-6は頸部破片で頸部に２条の隆帯が巡り、隆帯間と両脇に竹管状刺突列を伴う。109-3～5は円盤状石製品である。109-3・4は表裏を、109-5は側面を擦っている。そのほかに、図示はしていないが、床面から側面をやや荒く加工している不明石製品が２点出土した。

[時期・所見]出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と考えられる。

（茅野）

第54号竪穴建物跡(SI54)（遺構第35図、遺物第109図、遺構写真40、遺物写真113）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢS・ⅢT81グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。風倒木により大半が破壊されている。隣接するSI45a・bとの重複関係は不明である。床面の状況と柱穴の存在から建物跡と判断した。

[規模・形態]風倒木による破壊のため、竪穴の掘方は南西部分のみ検出した。検出面からの深さは最深で30㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅤ層をほぼ平坦に仕上げている。残存部分から竪穴の平面形は楕円形の可能性があるが、規模など詳細は不明である。

[炉]破壊されていたため検出されなかった。

[柱穴・付属施設]本遺構に伴う可能性があるピットを１基検出した。

[覆土]３層に分層した。おおむねⅢ層黒色シルト質土を母材としている。

[出土遺物]土器4,900ｇが出土し、土器１点を図示した。109-6は１層で出土した。残存状況が良好であることから、意図的に廃棄された可能性も考えられる。略完形の深鉢で、口径に比較して底径が小さい。円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。

[時期・所見]出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期と考えられる。

（茅野）

第55号竪穴建物跡(SI55)（遺構第36図、遺物第110・111図、遺構写真41、遺物写真113）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢU～ⅢW81～82グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層中にⅡａ類似層由来の褐色土ブランを検出した。SI68と重複し、本遺構が新しい。規模や柱穴の配置状況等から建物跡と判断した。

[規模・形態]竪穴は緩斜面に構築されるため、南東部分の立ち上がりは認められない。竪穴の平面形は長軸5.4m、短軸4.5mの楕円形で、検出面からの深さは最深で50㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅣ～Ⅴ層を平坦に仕上げるが、北西と南西隅に比高7～10㎝程度の扇形をしたテラスが構築されている。テラスの上面は普通に硬化しているが、際だってはいない。また、床面中央部は他の部分より若干低く凹んでおり、その部分が硬化・変色している。変色範囲内には一部に貼床がみられる。

〔炉〕明確な炉跡とみられる掘り込みや火床面は検出されなかったが、貼床の内側部分では床面が若干凹んでおり、若干の赤変部分もみられたためこの周辺が炉跡となる可能性はある。
〔柱穴・付属施設〕ピットを８基確認した。主柱穴とみられるのはpit1～5である。１間×１間の方形配置に棟持柱状の柱が付加され五角形を呈する。その他、pit8では覆土中と確認面より上位に赤色物質が存在するのを確認している。柱穴内に柱痕状にみられるため赤漆もしくは赤色顔料を塗布した小さな柱を樹立していたことも考えられよう。
〔覆土〕18層に分層した。２～５層はⅡa類似層由来の粘質土塊を含む捨場の土層と考えられる。その下位層はⅢ層黒色シルト質土を母材とし、Ⅴ層粒をやや多く含んでいる。
〔出土遺物〕土器8,150g、スクレイパー３点、凹石７点、敲石４点、半円状扁平打製石器２点、石核２点、異形石器１点、二次加工剥片５点などが出土し、土器３点、石器10点を図示した。土器・石器ともに覆土からの出土であることから、覆土に混入したものと考えられるが、礫石器の出土量が比較的多いことから、意図的な廃棄が行われた可能性も想定される。

110-1～3は円筒下層ａ～ｂ2式に比定される。110-1は深鉢の口縁部片である。口唇部に竹管状の刺突が施される。110-2・3は深鉢の頸部片である。また、図示はしていないが、石刀の可能性がある石製品が出土している。長方形の板状を呈し、側面に細かな打撃を加え整形している。
〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ2式期以降と考えられる。本建物跡は２か所のテラスを持つ特異な建物である。

（茅野）

第56号竪穴建物跡(SI56)（遺構第37図、遺物第111・112図、遺構写真42、遺物写真113）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢW・ⅢX81・82グリッドに位置する。Ⅴ層で検出した。SI70と重複し、本建物が新しい。また、竪穴北東部分が風倒木と重複し、本建物が旧い。規模・床面の状況等から建物跡と判断した。
〔規模・形態〕竪穴の平面形は長軸4.8mの不整楕円形と推定される。検出面からの深さは最深で54cmである。壁は、床面から中位付近はほぼ垂直に立ち上がり、中位から検出面までは開く。床面はⅤ～Ⅵ層を平坦に仕上げている。中央付近に硬化・変色範囲が検出された。また、南西壁際に比高４～８cm程度のテラスが構築されている。南東壁側にも同様の微妙な段差がみられるためテラスが構築されていた可能性がある。
〔炉〕検出されなかった中央部の硬化・変色範囲付近に存在した可能性がある。
〔柱穴・付属施設〕ピットを８基確認した。確実に本遺構の主柱穴となるものは断定できないが、配置状況からpit1・8が相当する可能性がある。
〔覆土〕６層に分層した。１・２層にⅡa類似層由来の粘質土を含む。その下位層はⅢ層由来の黒色シルト質土が母材でⅤ層粒を含む。
〔出土遺物〕土器7,350g、石匙１点、スクレイパー１点、磨製石斧１点、敲石３点、半円状扁平打製石器11点、石皿１点、石核３点、二次加工剥片９点などが出土し、土器４点、石器８点、石製品１点を図示した。111-9の敲石、111-8と112-2の半円状扁平打製石器、112-3の石皿は床面直上で出土したことから、本建物に帰属する可能性が高い。図示した土器及びその他の図示した石器は、覆土からの出土であることから、覆土に混入したものと推定される。土器は111-3が円筒下層b2～ｃ式期、

114-4が大木10式併行、111-5・6が後期末葉～晩期初頭に比定される。111-3以外は遺構確認時にプラン周辺で出土しているため、風倒木痕に混入したものを本遺構覆土として誤認したものと考えられる。111-3は深鉢の大形破片である。口縁から胴部上半に羽状縄文、胴部下半に単軸絡条体第1類が縦位に回転施文される。頸部には単軸絡条体第1類の回転文を伴う低い隆帯が巡る。111-4は深鉢の口縁部である。地文縄文に沈線文が施される。111-5・6は鉢の小片である。111-6は彫去状の沈線による入組文が施文される。ⅢW79のⅡ～Ⅲ層で同一個体が出土している。111-5は器壁が薄く、細い原体による縄文が施される。112-5は不明石製品である。側面をやや荒く加工している。そのほかに図示していない石製品として、円礫の表裏面に複数の条痕を有し、片面に鋭角の刻みを有するもの線刻礫が攪乱から出土している。

〔時期・所見〕本遺構は、形状や覆土の状況から円筒下層b1～b2式期以降に帰属する可能性が高い。

(茅野)

第57号竪穴建物跡(SI57)（遺構第37図、遺物第113図、遺構写真43）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢV・ⅢW81・82グリッドに位置する。Ⅳ層中に暗褐色土のプランを検出した。

〔規模・形態〕竪穴の平面形は、長軸4.7m、短軸3.1mの楕円形である。竪穴は緩斜面に構築されるため、西側はⅢ～Ⅴ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは土層断面以外では確認できなかった。壁は開いて立ち上がり、床面はⅣ～Ⅴ層を平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で34cmである。

〔炉〕2か所が床面を浅く掘り込んだ炉跡と推定されるが、図化していないため、推定上端線を図示した。特に北西壁際の推定範囲は8層の下位で検出されており、古期の炉跡の可能性がある。

〔柱穴・付属施設〕ピットを7基確認した。古期に伴う柱穴はpit2・8、新期に伴う柱穴はpit3・7と推定される。

〔覆土〕7層に分層した。1・2層にはⅡa類似層由来の粘質土塊が含まれる。下位層はⅢ層由来の黒色シルト質土が母材となる。8層は上面が硬く締まっており、本来この付近はテラス状に高低差最大10cm程度盛り上がっていた可能性がある。

〔出土遺物〕土器550gが出土し、土器1点を図示した。土器は覆土からの出土であることから、覆土に混入したものと推定される。113-1は深鉢の口縁部である。円筒下層a～b1式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層a～b1式期以降と考えられる。

(茅野)

第58号竪穴建物跡(SI58)（遺構第37図）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢR81グリッドに位置する。調査区東側壁面で検出したため、平面図は作成していない。北側が風倒木により破壊されている。大部分が調査区域外に存在する。

〔規模・形態〕不明である。

〔炉〕検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕検出されなかった。

〔覆土〕5層に分層した。おおむねⅢ層由来の黒色シルト質土を母材としている

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔時期・所見〕帰属時期等は不明である。

(茅野)

第59号竪穴建物跡(SI59)（遺構第38図、遺物第113～115図、遺構写真44、遺物写真114）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK75・76グリッドに位置する。平坦面から斜面へ下る落ち際付近のV～Ⅵ層を精査中に、半円状に広がる黒色土を確認した。東側半分は斜面のⅢ層中に位置し、検出段階ではプランが不明瞭であったため、十字に試掘溝を掘削したところ、平坦な床面が検出されたことから竪穴建物跡と認定した。

〔規模・形態〕平面形は長軸4.3m、短軸3.8mの不整円形で、確認面から床面までの深さは最大で71cmである。斜面へ下る落ち際に位置するため、竪穴の西側はⅣ～Ⅵ層を掘り込むが、東側の立ち上がりは認められない。検出した西壁はやや外傾して立ち上がる。床面は西側がⅥ層中、東側はⅢ層中に形成されており、やや凹凸があるものの、全体的に硬く締まる。

〔炉〕掘り込みを伴う炉である。建物中央やや南西寄りに位置する。炉の平面形は28cm×23cmの不整楕円形で、深さは5cm程度である。炉上面から炉内にかけて炭化物が堆積するものの、焼土は認められない。

〔柱穴・付属施設〕ピットを4基確認した。pit1とpit4は炉を挟んで位置することから、主柱穴と考えられる。

〔覆土〕覆土は6層に分層した。1～4層はⅢ層由来の黒色～黒褐色土である。いずれも地山(Ⅳ～Ⅶ層)由来土を含むことから、人為堆積と考えられる。5層は炉の西側に堆積する黒褐色土で非常に硬く締まる。炉使用時の痕跡であると推定される。6層は炉内及び炉上面に堆積する炭化物由来の黒色土である。炉使用時の堆積と推定される。

〔出土遺物〕土器14,070g、石鏃1点、石槍1点、スクレイパー1点、凹石3点、半円状扁平打製石器3点、石核1点、両面調整石器1点、二次加工剥片5点などが出土し、土器9点、石器7点を図示した。113-2や115-3が下層から出土したほかは、多くが上層からの出土である。上層から出土した土器は比較的残存状態が良好であり、復元率が高い。115-1は石鏃である。床面で出土したことから、本遺構に付随するものと考えられる。

図示した土器はすべて深鉢であり、113-3～6、114-1は略完形の個体である。113-3は結節回転文と単軸絡条体第1類、113-4は複節の斜行縄文、113-5・7は単軸絡条体第1類、113-6は結節回転文、114-1は単節の斜行縄文と結節回転文が施される。これら7点は円筒下層a～b1式に比定される。114-2は口縁部片、114-3は胴部片であり、これら2点は大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕本遺構東側の斜面には捨場が位置する。土層断面などでは本遺構と捨場の新旧関係を明確に特定することは出来なかったが、本遺構の1層からは捨場と同時期の遺物が多く出土し、比較的残存状況が良好であるなど、捨場と同様の様相を呈する。このことから、本遺構の1層を含む上層は、捨場と連動した堆積の可能性が想定される。

廃絶時期は、形態や構築位置などがSI60に類似することや、上面に捨場と連動すると推定される堆積が認められることから、縄文時代前期中葉以前と考えられる。このため中期の遺物は後世の混入と考えられる。

（岩井）

第60号竪穴建物跡(SI60)（遺構第38図、遺物第115・116図、遺構写真45、遺物写真115）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢL・ⅢM75・76グリッドに位置する。平坦面から斜面へ下る肩部付近の

Ⅴ～Ⅵ層を精査中に、半円状に広がる黒色土を確認した。東側半分は斜面のⅢ層中に位置し、検出段階ではプランは不明瞭であったため、十字に試掘溝を掘削したところ、平坦な床面が検出されたことから、竪穴建物跡と認定した。SK80と重複し、本建物が旧い。また、捨場の覆土が本建物を被覆することから、捨場より旧いと判断できる。

[規模・形態]建物東側は斜面地に位置し、壁の立ち上がりは確認できない。竪穴の形状は、現存部分から短軸3.1m、長軸は推定で3.5m程度の楕円形と推定される。残存する箇所の壁はやや外傾して立ち上がる。床面は西側がⅥ層中、東側はⅢ層中に形成されている。やや凹凸があり、全体的にしまりが弱い。

[炉]炉と明確に特定できる施設は確認できなかったものの、床面中央付近で硬化範囲を確認した(9層)。炉に関係する痕跡の可能性も考えられる。

[柱穴・付属施設]ピットを2基確認した。どちらも浅いことから、性格は不明である。

[覆土]覆土は9層に分層した。1～8層はⅢ層由来の黒色～黒褐色土である。4層には砂が帯状に含まれる。2～7層には基質土以外の土が斑に含まれることから、人為堆積と考えられる。1・8層は混入物を含まない均質な黒色～黒褐色土であり、自然堆積の可能性もあるが判然としない。9層は床面中央で確認した硬化範囲である。

[出土遺物]土器5,145g、石匙2点、凹石1点、磨石2点、半円状扁平打製石器3点、石皿1点、石核2点、二次加工剥片1点などが出土し、土器3点、石器6点を図示した。いずれも覆土からの出土である。115-8は深鉢の口縁部片である。頸部に高い隆帯が巡る。円筒下層a～b1式に比定される。115-9は深鉢の口縁部片である。比較的器壁が薄い。大木10式併行に比定される。115-10は縄文原体の側面押圧により文様を描出する。縄文時代後期初頭に比定される。

[時期・所見]本建物の帰属時期は、遺構上面に捨場が形成されることから、縄文時代前期中葉以前と考えられる。このため、中期や後期の遺物は後世の混入と考えられる。

(岩井)

第61号竪穴建物跡(SI61)(遺構第39図、遺物第116図、遺構写真46、遺物写真115)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢS80・81、ⅢT80グリッドに位置する。Ⅳ層中にⅡa類似層由来の暗褐色プランを検出した。SI62と重複し、本遺構が新しい。

[規模・形態]竪穴の平面形は4.5m×3.8mの楕円形である。検出面からの深さは最深で45cmである。壁は、床面から中位付近はほぼ垂直に立ち上がり、中位から検出面までは開く。床面はⅤ層を平坦に仕上げている。北西隅は半円状の範囲が床面より5～10cm高くテラス状になっている。

[炉]竪穴中央やや東寄りに2基検出した。どちらも床面を浅く掘り込んだ炉で、東西に並び、上端が重複するが新旧関係は不明である。火床面は検出されなかった。

[柱穴・付属施設]ピットを12基検出した。主柱穴はpit1・2で炉を挟んで南北に位置する。pit3～pit11は壁際に巡ることから、壁柱穴と考えられる。pit12はSI62の主柱穴と判断した。

[覆土]8層に分層した。1層はⅡa類似層由来の粘質土塊を含む捨場由来の層である。2層より下位はⅢ層由来の黒色シルト質土を母材とし、Ⅴ層粒を含む。

[出土遺物]土器1,450g、石鏃未成品1点、石皿3点、石核1点、異形石器1点、二次加工剥片5点などが出土し、土器3点、石器4点を図示した。116-5～7の石皿は床面で出土したことから、本建

物に帰属する遺物と考えられる。図示した土器および116-8は覆土からの出土であることから、混入と考えられる。116-2～4は円筒下層b1～b2式に比定される。結節回転文や斜行縄文、単軸絡条体第1類が施される。116-4はSI53の最下層で出土したもの(106-5)と同一個体とみられる。

〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層b1～b2式期以降と考えられる。

(茅野)

第62号竪穴建物跡(SI62)（遺構第39図、遺物第117図、遺構写真46、遺物写真115)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢS・ⅢT79・80グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層中に褐色のプランを検出した。SI61と重複し、本遺構が旧い。

〔規模・形態〕SI61に掘り込まれるため、竪穴は西側の一部のみ検出した。検出部分から平面形は径約3.3mの円形もしくは楕円形と推定される。検出面からの深さは最深で41cmである。壁は開いて立ち上がり、床面はV層を平坦に仕上げている。pit1の東側付近はやや硬化していた。

〔炉〕検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕本遺構に伴う主柱穴を1基検出した。また、位置関係からSI61のpit12も本遺構の主柱穴とみられる。

〔覆土〕4層に分層した。1層はⅡa類似層由来の褐色粘質土塊を含む。下位層はⅢ層由来の黒色シルト質土が母材である。

〔出土遺物〕土器110g、両面調整石器1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器1点、石器1点を図示した。遺物はすべて覆土から出土したことから、混入と推定される。117-1は深鉢の胴部片である。円筒下層a～b1式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器と重複関係から、本建物の帰属時期は円筒下層b式期以前と考えられる。

(茅野)

第63号竪穴建物跡(SI63)（遺構第39図、遺物第117図、遺構写真47、遺物写真115)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢR・ⅢS78・79グリッドに位置する。Ⅲ層中に暗褐色土のプランを検出した。規模・床面の状況や柱穴と炉跡の存在等から建物跡と判断した。

〔規模・形態〕緩斜面地に構築されるため、竪穴の南東部分は検出できなかった。平面形は長軸4.8m、短軸3.2mの楕円形であり、検出面からの深さは最深で58cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、床面はⅢ～Ⅳ層を掘り込み平坦である。炉跡付近とテラス上面は若干硬化していた。また、北側が半円形のテラス状に約7cm高くなっている。

〔炉〕床面中央やや東寄りに1基検出した。床面を浅く掘り込んだ炉である。火床面は検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕本遺構の主柱穴を2基検出した。炉を挟んで対置するが、柱穴を結んだライン上より東側に炉がずれている。柱穴は確認面に裏込めの粘土がみられた。

〔覆土〕3層に分層した。1層にはⅡa類似層相当の粘質土塊を含む。下位層はⅢ層由来の黒色シルト質土が母材である。

〔出土遺物〕土器300g、石皿2点などが出土し、土器1点、石器2点を図示した。土器はすべて覆土から出土したことから、混入と推定される。117-4の石皿は床面付近から出土したことから、本建物に帰属する可能性が高い。117-3は深鉢の口縁部片である。頸部には高い隆帯が巡る。円筒下層a～b1式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器から、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期と考えられる。

（茅野）

第64号竪穴建物跡(SI64)（遺構第40図、遺物第117図、遺構写真47、遺物写真115）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢQ・ⅢR79グリッドに位置する。Ⅲ層中に黒褐色のプランと遺物の集中を検出した。床面の硬化状況等から建物跡と判断した。なお、調査手順の不手際により南側約1/3を未調査のまま掘削してしまったため、この部分は図面を作成していない。

〔規模・形態〕斜面地に構築され、且つ黒色土中での検出となったため、竪穴の掘方は、西側の一部のみ検出した。検出部分から竪穴の平面形は径3.3m前後の円形もしくは楕円形と推定される。検出面からの深さは最深で22cmである。壁は開いて立ち上がり、床面はⅢ層を平坦に仕上げている。pit1周囲から南側にかけて弱い硬化範囲がみられた。

〔炉〕検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕ピットを1基検出した。検出位置などからおそらく主柱穴とみられる。

〔覆土〕Ⅲ層由来の黒色土の単一層である。上面には捨場のⅡａ類似層～Ⅱｂ層が堆積している。

〔出土遺物〕土器1,300g、敲石1点などが出土し、土器2点と円盤状土製品1点を図示した。遺物はすべて上面(Ⅱａ類似層～Ⅱｂ層)で出土したことから、捨場初期段階に廃棄されたものと推定される。土器はすべて円筒下層b1～b2式に比定される。117-6は深鉢の口縁部片である。単軸絡条体第1類を口縁部と隆帯上に横位に回転施文している。口縁部の幅は狭い。117-7は深鉢の底部である。単軸絡条体第1類を施文した後、表面をナデ調整している。117-8は円盤状土製品である。側面を荒く整形している。

〔時期・所見〕出土土器及び土層の堆積状況から、本建物の帰属時期は円筒下層b1～b2式期以前と考えられる。

（茅野）

第65号竪穴建物跡(SI65)

（遺構第25・26図、遺物第117～122図、遺構写真31・32、遺物写真116・117）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢH76に位置する。Ⅶ層上面を精査中に黒色土の広がりを確認し、十字にベルトを設定して掘削したところ、平坦な床面を検出したことから竪穴建物跡と認定した。SI36と重複しており、本遺構が新しい。

〔規模・形態〕平面形は石囲炉との位置関係から、径5m前後の円形状を呈すると考えられる。確認面から床面までの深さは50cmである。西側の壁は外へ開きながら立ち上がるが、東側は斜面地に位置するため、壁の立ち上がりは認められない。床面はⅦ層に形成され、東側にやや傾いており、平坦で全体に硬く締まる。東側は撹乱を受けている。

〔炉〕東寄りに石囲炉を1基確認した。長軸約20～40cmの扁平な円礫と拳大ほどの小形の円礫を組み合わせて配置している。内部は赤変しており、深さは約10cmである。炉の平面形は南北を長軸とする長軸100cm、短軸75cmの長方形で、北東隅と南西隅では炉石が検出されなかった。抜け跡は北東側の一部を除きほぼ存在する。炉の構築にあたっては、ある程度炉石の大きさに合わせて地面を掘り窪めた後、炉石を配し、隙間に土を充填している。炉石は、短軸もしくは長軸を立てて据えられているが、礫の下端レベルは一様ではなく、掘り込み底面にも接しないものもあることから、設置の際は、

土を充填しつつ、上端を直線的に揃えたものと復元される。炉石は被熱が弱く、122-2の石皿は炉石に転用している。

〔柱穴・付属施設〕ピットは39基検出した。配置や深さから、pit3-1、4-1、5-1、17-1、19-1、22-1が主柱穴と考えられる。撹乱を受けている北東隅にも本来柱穴が存在していたと想定され、七角形の配置となる。pit29では正位の土器(118-1)が底面に張り付いた状態で出土した。上半部が破損していたが、同pit内に残っていたことから、埋没する過程で破損したと考えられる。なお、本遺構はSI36と重複することから、pit29を含むピットの一部はSI36に伴う可能性もある。

〔覆土〕15層に分層した。黒褐色土を主体とする。全体的に炭化物や焼土粒を含み、粘土等の廃棄もみられることから、建物の焼失後に埋め戻した可能性がある。

〔出土遺物〕土器23,220g、スクレイパー１点、凹石３点、敲石２点、半円状扁平打製石器４点、石皿３点、二次加工剥片６点などが出土し、土器15点、石器10点、石製品１点を図示した。遺物は覆土からの出土で、残存状況は比較的良好である。

建物跡の中央西寄りでは正位の上半部を欠損した土器が若干床面を掘り込んだ部分に立って出土した(117-9)。被熱痕がないことから建物焼失後に廃棄されたものであり、同種の土器埋設遺構がSI35などで検出されていることから、本例も掘り込みは浅いものの、土器埋設遺構と考えられる。同位置の覆土から粘土塊が出土したが、土器とは接していないことからこの土器とは関係なく廃棄したものと考えられる。また、床面で12cm×8cm×3cmのアスファルト塊が出土している。

118-1、119-2は壺、その他は深鉢である。117-9～120-4は残存状態が良好である。深鉢では118-2に沈線文が施されるほかは、いずれも縄文のみが施される。壺の２点は沈線文に縄文が充填される。これらは大木10式併行に比定される。121-2～4は小片であり、121-2・4には細い隆帯、121-3は原体の押圧により文様が描出される。これら３点は縄文時代後期初頭に比定される。120-6は５層で出土した縄文時代中期末葉から後期初頭に比定される底部である。内面の径約７cmの不整形範囲には黒色物質が薄く付着し、底面には被熱痕が認められる。アスファルトのパレットとして使用されたものと考えられる。121-1は円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。122-4は石刀である。全体の研磨は弱い。

〔時期・所見〕６層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した結果、4,105±24yrBPの値が得られた。出土土器から想定した遺構の帰属時期と相違ないことから、本遺構の時期は大木10式併行期と考えられる。床面が数箇所被熱しており、炭化物の出土もみられることから、焼失建物であった可能性がある。

本建物では、アスファルト塊とパレットと推定される土器が併せて出土し、特筆される。

（久保）

第66号竪穴建物跡(SI66)（遺構第40図、遺物第122～124図、遺構写真48、遺物写真118）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢⅠ・ⅢJ76・77グリッドに位置する。斜面の落ち際付近のⅢ層を精査中に、弧状に広がる黒色土を確認した。東側半分は斜面中に位置し、検出段階ではプランが不明瞭であったため十字に試掘溝を掘削したところ、平坦な床面が検出されたことから竪穴建物跡と認定した。上面に捨場が形成される。

〔規模・形態〕建物東側は斜面地に位置するため、壁の立ち上がりは認められない。西側はやや外傾して立ち上がる。平面形は長軸４m、短軸2.6mの不整楕円形と推定され、確認面から床面までの深さは

最大で62㎝である。床面は西側がV層中、東側はⅢ層中に形成されている。東側では、貼床状の堆積が部分的に薄く確認できたほか、硬化面も一部認められる。

〔炉〕建物中央付近に黒色土が堆積する浅い窪みが確認された。焼土や炭等の明確な炉の痕跡は認められなかったものの、SI1などの例から、炉と考えられる。平面形は南北を長軸とする65㎝×48㎝の不整楕円形で、深さは5㎝程度である。

〔柱穴・付属施設〕ピットを2基確認した。どちらも床面からの深さが40㎝以上あり、炉を挟んで位置することから、主柱穴と考えられる。

〔覆土〕覆土は9層に分層した。1～7層はⅢ層由来の黒色～黒褐色土を基質とし、V層由来土を一定量含むことから、人為堆積と考えられる。1～4層(上層)と5～7層(下層)の層界には大量の遺物や焼土塊が含まれる。8層は東側のみで検出されたしまりの強い堆積土である。竪穴東側はしまりの弱いⅢ層が底面となるため、貼床を施したものと考えられる。9層は炉の堆積である。

〔出土遺物〕土器16,950g、石錘未成品1点、スクレイパー1点、凹石2点、敲石1点、石皿1点、石核1点、二次加工剥片3点などが出土し、土器9点、石器5点を図示した。遺物はすべて覆土からの出土である。土器は残存状態が良好なものが多く、竪穴西側に弧状に分布していることから、埋め戻しの際に意図的に廃棄された可能性が高い。その他、白色の粘土塊も出土している。出土状況が土器と同様であることから、土器と一連の廃棄と想定される。

図示した土器9点は下層の上面で出土した一括遺物である。122-8、123-4は口径に対する器高が比較的大きく、胴部はやや膨らむ。結節回転文と単軸絡条体第1類回転文が施され、頸部には隆帯が巡る。122-5は口縁部に枝回転文と推定される文様が施される。122-6は結節回転文と複節の斜行縄文、123-1は複節の斜行縄文と単軸絡条体第1類回転文が施される。123-2は複節の斜行縄文、123-3は外面のほか底面にも結節回転文が施される。123-4は内面にも単軸絡条体第1類回転文が見受けられる。124-1は直前段反撚の原体が回転施文される。これら9点は円筒下層a～b1式に比定される。なお、覆土から出土した黒曜石の剥片(掲載外)の産地分析(分析No.K32)の結果、木造出来島群と推定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本建物の帰属時期は円筒下層a～b1式期と推定される。

(岩井)

第67号竪穴建物跡(SI67)(遺構第31図、遺物第124図、遺構写真36、遺物写真119)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢU79・80グリッドに位置する。SI45を精査中にⅣ層で検出した。SI45bと重複し、本遺構が旧い。また、大部分を風倒木により破壊されている。一部分の検出ではあるが床面の状況等から建物跡と判断した。

〔規模・形態〕北側が風倒木により、東側はSI45bに掘り込まれるため、竪穴の掘方は、西側の一部のみ検出した。検出部分から竪穴の平面形は隅丸方形と推定される。検出面からの深さは最深で22㎝である。壁は開いて立ち上がり、床面はⅣ～V層を平坦に仕上げている。

〔炉〕検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕検出されなかった。

〔覆土〕3層に分層した。おおむねⅢ層由来の黒色シルト質土が主体でV層粒等が混入している。

〔出土遺物〕土器1,190g、スクレイパー1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器1点、石器1点を図示した。いずれも覆土から出土したことから、覆土に含まれていたものと推定される。124-7は

深鉢の口縁部片である。単軸絡条体6A類が施文される。円筒下層b2式に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物と重複関係から、本建物の帰属時期は円筒下層b2式期以降と推定される。

（芳野）

第68号竪穴建物跡(SI68)（遺構第36図、遺物第124図、遺構写真41）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢU81・82グリッドに位置する。SI55を精査中にⅤ層で検出した。SI55・45bと重複し、本遺構がもっとも旧い。床面の状況等から建物跡と判断したが、全容は不明である。
〔規模・形態〕重複や緩斜面に構築されていること等のため、竪穴の掘方は、西側の一部のみ検出した。竪穴の平面形は不明である。検出面からの深さは最深で14㎝である。床面は断面からⅣ層を床面としていることがわかるが、明確に検出できたのは一部分であるため詳細は不明である。
〔炉〕検出されなかった。
〔柱穴・付属施設〕ピットは２基検出したが、本遺構に伴うものかどうかは不明である。
〔覆土〕単層である。
〔出土遺物〕土器120ｇが出土し、土器１点を図示した。土器は覆土から出土したことから、覆土に含まれていたものと推定される。124-9は円筒下層ａ～b2式に比定される深鉢の胴部片である。単軸絡条体第１類が施文される。
〔時期・所見〕出土遺物や重複関係から、本建物の帰属時期は円筒下層ａ～b2式期と推定されるが、全容は不明である。

（芳野）

第69号竪穴建物跡(SI69)（遺構第41図、遺物第125図、遺構写真49）
〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ166グリッドに位置し、調査区西壁で確認した。建物跡の南東部のみを検出し、北西部は調査区外に位置する。
〔規模・形態〕検出部分は長軸3.5ｍ以上、短軸87㎝以上、検出面から床面までの深さは13㎝を測る。
〔炉〕調査区内では確認できなかった。
〔柱穴・付属施設〕ピットは２基検出したが、明確に主柱穴とは判断できなかった。南側に途切れた壁溝がみられる。竪穴北側には土坑が位置する。平面は約75㎝の円形で、床面からの深さは48㎝である。竪穴底面で検出したため、本遺構より旧い土坑の可能性もある。
〔覆土〕３層に分層した。上層は後世の撹乱により削平されている。２層下部に厚さ１㎝程度の炭化物層が確認された。
〔出土遺物〕土器110ｇ、石核１点などが出土し、土器１点を図示した。小片であることから、覆土に混入した可能性が考えられる。深鉢の胴部片であり、縄文が施される。大木10式併行に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本建物の帰属時期は大木10式併行期以降と推定される。

（中澤）

第70号竪穴建物跡(SI70)（遺構第37図、遺物第125図、遺構写真49）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢX・ⅢY81・82グリッドに位置する。Ⅳ層で検出した。SI56と重複し、本遺構が旧い。小規模だが、床面の状況やピットの存在から建物跡と判断した。
〔規模・形態〕北側と南東側が風倒木に、南西側がSI56に掘り込まれるため、竪穴の掘方は、北西と

北東の一部のみ検出した。検出部分から竪穴の平面形は径約2.8mの円形もしくは楕円形と推定される。検出面からの深さは最深で38cmである。壁はなだらかに開き、床面はV層を平坦に仕上げている。
〔炉〕検出されなかった。
〔柱穴・付属施設〕ピットは1基検出した。覆土の状況から本遺構に伴うものと判断した。
〔覆土〕3層に分層した。1層にはⅡa類似層由来の粘質土塊が含まれる。
〔出土遺物〕土器300g、敲石1点などが出土し、土器1点を図示した。土器は覆土から出土したことから、覆土に含まれていたものと推定される。125-2は深鉢の頸部片で、指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。縄文時代前期（円筒下層b1～b2式）に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物と重複関係から本建物の帰属時期は円筒下層b1～b2式期以降と推定される。

（茅野）

第71号竪穴建物跡(SI71)（遺構第41図、遺物第125図、遺構写真50、遺物写真119）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢW・ⅢX80・81グリッドに位置する。Ⅲ～Ⅳ層中に黒褐色のプランを検出した。北東側でSI72と重複し、本遺構が新しい。また、南東側は風倒木により撹乱される。
〔規模・形態〕風倒木による撹乱のため、竪穴の掘方は、東側の一部のみ検出した。検出部分から竪穴の平面形は径約3.7mの円形もしくは楕円形と推定される。検出面からの深さは最深で79cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。床面はV層を平坦に仕上げており、中央部に硬化範囲と黒色土を充填した貼床が検出された。床面の状況から新旧2時期あることが推定され、古期床面はV層（地山）上面、新期床面は6層上面とみられる。
〔炉〕炉は確認されなかった。
〔柱穴・付属施設〕ピット4基と土坑1基を検出した。土坑(SK1)は建物南壁際に位置する。平面形は径約70cmの円形で、床面からの深さは42cmである。南壁がややオーバーハングし、底面はやや丸みを帯びる。覆土が建物覆土4層に近似するため本建物に伴う土坑と推測される。4基検出した柱穴の内北側2基は図化していないため、推定上端線を図示した。配置状況から新期にpit2・3が、古期にpit1・4が対応すると考えられる。
〔覆土〕SI72も含め10層に分層した。SI71の覆土は全体に捨場Ⅱa類似層由来とみられ、褐色且つ粘質である。
〔出土遺物〕土器130g、石錐1点などが出土し、土器1点、石器1点を図示した。125-5はSI71もしくはSI72から出土した。いずれも覆土からの出土であることから、混入と推定される。125-3は深鉢の胴部片である。単軸絡条体第1類が施文される。円筒下層b1～b2式に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本建物の帰属時期は円筒下層b1～b2式期以降と推定される。

（茅野）

第72号竪穴建物跡(SI72)（遺構第41図、遺物第125・126図、遺構写真50、遺物写真119）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢX・ⅢY80・81グリッドに位置する。Ⅳ～V層で検出した。北側でSI71と重複し、本遺構が旧い。また、東側は風倒木により撹乱される。
〔規模・形態〕竪穴の掘方は南西側の一部のみ検出した。検出部分から竪穴の平面形は楕円形とみられるが詳細は不明である。検出面からの深さは最深で6cmである。床面はV層を平坦に仕上げている。
〔炉〕検出されなかった。

〔柱穴・付属施設〕本遺構に伴う柱穴を２基検出した。炉との位置関係から主柱穴とみられる。
〔覆土〕８～10層が相当すると見られる。８・９層はⅡa類似層由来の粘質土である。10層は本遺構の本来的な覆土で、Ⅲ層由来の黒色シルト質土が母材とみられる。
〔出土遺物〕土器6,450g、石匙１点、石錐１点、スクレイパー３点、凹石３点、敲石４点、半円状扁平打製石器２点、抉入扁平磨製石器１点、石核３点、二次加工剥片６点などが出土し、土器６点、石器11点を図示した。125-11は円筒下層b1～b2式土器で９層から出土した。そのほかの土器や石器はすべて３～９層に相当する覆土からの出土であることから、覆土に含まれていたものと推定される。
125-6・7は大木10式併行に比定される深鉢の口縁部である。125-8～11は円筒下層b1～b2式に比定される。125-8は頸部に沈線が巡る。125-11は結節回転文が施される。125-9は半截竹管状の刺突に類似した文様がみられるが、これは枝(葉痕の付いた短枝)を回転施文したものの可能性がある。125-10は条痕文が施される。
〔時期・所見〕重複関係や出土土器から、円筒下層b1～b2式期以前の遺構と考えられる。
（茅野）

第73号竪穴建物跡(SI73)（遺構第42図、遺物第127・128図、遺構写真51、遺物写真119）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢP・ⅢQ78・79グリッドに位置する。Ⅲ層中に褐色のプランと遺物の集中を検出した。
〔規模・形態〕竪穴の掘方は、北側がトレンチのため滅失するが、残存部分から竪穴の平面形は長軸4.1m、短軸3.2mの楕円形と復元できる。検出面からの深さは最深で60cmである。壁はやや開いて立ち上がり、床面はⅣ層を平坦に仕上げており、中央部分が弱く硬化している。
〔炉〕床面を浅く掘り込んだ炉である。建物中央やや東寄りに位置する。平面形は20cmの円形で、床面からの深さは5cmである。火床面は検出されなかった。
〔柱穴・付属施設〕ピットは３基検出した。そのうちpit1・3が主柱穴とみられる。
〔覆土〕６層に分層した。１層は褐色粘質土を含み、上位に堆積する捨場Ⅱa層と関連した土層であるとみられる。２層以下はおおむねⅢ層黒色シルト由来の土層だが、褐色粘質土塊も含むため全体に色調が明るい。
〔出土遺物〕土器24,670g、石匙１点、スクレイパー５点、磨製石斧１点、半円状扁平打製石器５点、凹石７点、敲石２点、磨石２点、石核３点、二次加工剥片９点などが出土し、土器６点、石器12点を図示した。Ⅱa類似層出土の127-7、128-9の剥片石器や128-1～3の礫石器は本建物上面に形成された捨場に帰属する遺物の可能性がある。そのほかの遺物はいずれも覆土から出土しており、本建物に明確に伴う遺物は認められない。
127-1・3は略完形の深鉢である。127-1は単軸絡条体第１類、127-3は結節回転文と複節の斜行縄文が施される。127-2は深鉢の口縁から胴部と底部である。同一個体であるが、接合はできなかった。頸部には指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。127-4～6は深鉢の口縁部片である。これら図示した遺物はすべて円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。
〔時期・所見〕覆土の状況と出土遺物から本建物の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と推定される。
（茅野）

第74号竪穴建物跡(SI74)（遺構第42図、遺構写真51）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢM・ⅢN79グリッドに位置する。Ⅲ層を精査中に、弧状に広がる黒褐色土を確認した。東側の大部分が調査区外に位置する。規模や、床面と思われる平坦面が確認できたことから、竪穴建物跡と認定した。

[規模・形態]大部分が調査区外に位置するため平面形は不明であるが、検出した部分から円形もしくは楕円形と推定される。残存部分の最大長は約４ｍである。壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から床面までの深さは最大で46㎝である。床面は南側がⅤ層中、東側はⅣ層に形成されている。全体に平坦で硬く締まる。

[炉]検出されなかった。調査区外に位置する可能性がある。

[柱穴・付属施設]ピットは検出されなかった。調査区外に位置する可能性がある

[覆土]覆土は９層に分層した。いずれもⅢ層由来の黒色～黒褐色土を基質とし、Ⅴ層由来土を一定量含む。基質土や混入物が一様であることから、一連の人為堆積と考えられる。

[出土遺物]遺物は出土していない。

[時期・所見]Ⅲ層中に構築されることから、縄文時代の所産と考えられる。

（岩井）

２　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は２棟検出した。時期はどちらも縄文時代中期末葉～後期初頭である。

第１号掘立柱建物跡(SB1)（遺構第43図、遺物第129図、遺構写真52～54）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢP72グリッド他に位置する。Ⅶ層で確認した。それぞれの柱穴を単独で調査したが、当初土坑として調査したpit3(旧SK11)とpit4(旧SK12)で柱痕跡が確認できたことから、柱筋を検討し掘立柱建物と認定した。北西隅の柱穴は調査区外にあると想定され、調査区内には５基の柱穴が位置する。pit3はSP47と重複し、本遺構が新しい。また、建物内にSK21が位置し、本遺構が新しい。構成柱穴の調査時の番号は次のとおりである。pit1＝旧SK20、pit2＝旧SP16、pit3＝旧SK11、pit4＝旧SK12、pit5＝旧SP13。

[規模・形態]１間×２間の６本柱である。平面規模は長軸5.1m、短軸2.4m、柱間は2.5m前後である。調査した５基の柱穴からはいずれも柱痕跡が確認されている。

[柱穴]pit1は、平面形が108㎝×91㎝の楕円形で、確認面からの深さは60㎝である。壁は北東側で垂直に立ち上がり、南西側はなだらかに開く。底面は北東側が深く、平坦である。覆土中位で径40㎝の柱痕跡が平面的に確認でき、底面では柱の設置痕が残る。土層断面は、１～３層は地山土などを含む暗褐色土、４層は柱痕跡、５・６層が柱の裏込土である。土層断面の様相から、柱は抜き取られたものと推定される。

pit2は径約80㎝の円形で、確認面からの深さは77㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。底面では径約30㎝の柱の設置痕を確認した。土層断面は１層が柱痕跡、２～５層は柱の裏込土である。土層断面の様相から、柱は抜き取られていない、もしくは表出部分で切られたものと復元できる。

pit3は、平面形が長軸88㎝、短軸77㎝の楕円形で、確認面からの深さは58㎝である。壁は北東側で垂直に立ち上がり、南西側では、下半は垂直だが上半は開く。底面は平坦である。覆土中で柱痕跡の平面形を確認した。柱痕跡は径約40㎝の円形である。底面に柱の設置痕は認められない。E-E'断面では、1・2層が廃絶後の堆積、3～5層が柱痕跡に関連する堆積、6層が柱の裏込土である。F-F'断面では1層が柱痕跡に関連する堆積、2～4層は柱の裏込土、5層は柱設置前の堆積である。土層断面の様相及び柱穴の形状から、柱は抜き取られたものと推定される。

pit4は、平面形が長軸131㎝、短軸89㎝の楕円形で、確認面からの深さは64㎝である。壁は北東側でやや開いて立ち上がり、南西側では、下半はやや開き、上半は大きく開く。底面は平坦である。覆土中で柱痕跡の平面形を確認した。柱痕跡は径約40㎝の円形である。底面に柱の設置痕は認められない。土層断面では、1・2層が廃絶後の堆積、3～5層が柱痕跡に関連する堆積、6～8層が柱の裏込土、9・10層は柱設置前の堆積である。土層断面の様相及び柱穴の形状から、柱は抜き取られたものと推定される。

pit5は径約65㎝の円形で、確認面からの深さは71㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。底面では径約35㎝の柱の設置痕を確認した。土層断面は4層が柱痕跡、1～3層の堆積要因は判然としない。

〔出土遺物〕pit3出土の土器(129-1)とpit4出土の土器(129-2)を各1点図示した。129-1は深鉢の口縁部である。波頂部は捻りの把手状と推定される。129-2は深鉢の口縁部である。口縁内面に隆帯が施される。2点とも大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕pit3の柱痕跡(F-F'断面1層)から出土した炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、3,962±23yrBPの値を得た。出土遺物から想定した帰属時期と概ね相違ないことから、本遺構の帰属時期は縄文時代中期末葉(大木10式併行期)～後期初頭と考えられる。柱穴はいずれも柱痕跡が確認されており、柱痕跡から推定される柱の太さは30～40㎝である。3基の柱穴では抜きとり痕が確認された。本遺構の周囲にはSP17やSP47など本遺構の柱穴と同様の柱穴が一定数存在する。柱筋は復元できなかったが、周囲には同様の掘立柱建物跡が複数存在していたものと考えられる。

(岩井)

第2号掘立柱建物跡(SB2)(遺構第44図、遺物第129図、遺構写真54・55、遺物写真120)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE67グリッド他に位置する。Ⅶ層で確認した。それぞれの柱穴を単独で調査し、調査後に柱筋を検討した結果、8基の柱穴からなる掘立柱建物と認定した。北西隅の柱穴は調査区外にあると想定され、調査区内には5基の柱穴が位置する。pit5はSK36と重複し、本遺構が旧い。

構成柱穴の調査時の番号は次のとおりである。pit1＝旧SP395、pit2＝旧SK66、pit3＝旧SR21、pit4＝旧SR14、pit5＝旧SK36pit1、pit6＝旧SK51、pit7＝旧SP396、pit8＝旧SP393。

〔規模・形態〕1間×2間の長軸方向に棟持柱を伴う亀甲形の掘立柱建物である。平面規模は長軸7m、短軸2.5m、柱間は2.2～2.5mである。

〔柱穴〕ピットの底面は、概ね径35㎝前後であるが、棟持柱のpit1は径約15㎝、pit5は径約25㎝とやや小さい。pit6は他よりもやや大きく、径約45㎝である。確認面からの深さは52～92㎝、底面標高は135.3～135.7mであり、深さについては各ピットの値に幅がある。なお、棟持柱のpit5は確認面

からの深さが15cm、底面標高が136.4mであり、他のピットと比較して浅い。pit3では、断面で径約45cmの柱痕跡が確認できたものの、ほかの柱穴では、柱痕跡は認められなかった。
〔出土遺物〕129-3は土器の底部である。pit4の上面から正位の状態で出土した。出土状況から、柱抜き取り後に、意図的に埋置された可能性が考えられる。129-4はpit2から、129-5はpit3の柱痕跡部分(1層)から出土した。3点とも縄文時代中期末葉(大木10式併行)～後期初頭に比定される。
〔時期・所見〕廃絶時期は出土遺物から縄文時代中期末葉(大木10式併行期)～後期初頭と推定される。本遺構の周囲には本遺構の柱穴と同様の柱穴が一定数存在する。柱筋は復元できなかったが、周囲には同様の掘立柱建物跡が複数存在していたものと考えられる。

(岩井)

3　土坑

土坑は94基検出した。その内47基はフラスコ状土坑である。縄文時代前期(円筒下層a～c式期)が13基、縄文時代中期末葉(大木10併行期)～後期初頭が6基、古代～中世7基である。68基については時期を特定しがたいものの、フラスコ状を呈する32基は縄文時代前期(円筒下層a～c式期)もしくは縄文時代中期末葉(大木10併行期)～後期初頭と考えられる。

第1号土坑(SK1)(遺構第45図、遺構写真56)
〔位置・確認状況・重複関係〕調査区北西部ⅤB101グリッドに位置し、Ⅴ層で検出した。
〔規模・形態〕長軸127cm、短軸121cm、検出面からの深さ5cmで、平面形は不整円形を呈し、壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、中央部に炭化物・焼土が広がる。
〔覆土〕2層に分層した。1層は黒色土で炭化物・焼土を含み、2層は黒褐色土である。
〔出土遺物〕なし。
〔時期・所見〕1層から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を行った結果650±20yrBPの値を得たことから、中世の製炭土坑と推定される。

(中澤)

第3号土坑(SK3)(遺構第45図、遺物第129・130図、遺構写真56、遺物写真120)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢY79グリッドに位置し、Ⅳ～Ⅴ層で検出した。
〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は長軸167cm、短軸151cmのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは82cmである。底面はほぼ平坦である。
〔覆土〕14層に分層した。開口部にドーナツ状に黄褐色粘土ブロックが確認された(1・3層)。4～7層は赤褐色・黄褐色の粘土粒を含む黒褐色・暗褐色土、8～12層は黄褐色の粘土粒・粘土ブロックを含む黒色～にぶい黄褐色土である。1～12層はいずれも粘土ブロックが混入することから、一括の人為堆積と考えられる。13層は床面直上に堆積する炭化物を含む黒褐色土である。本遺構が機能あるいは機能停止直後に堆積した層と推定される。12層と13層の層界では遺存状態の良好な土器が3点(129-6・7、130-1・2)出土している。14層はⅤ層由来の黄褐色ロームブロックが黒褐色土に混じる土坑機能時の壁崩落土である。
〔出土遺物〕土器4,750g、石鏃未成品1点、石匙2点、スクレイパー1点、凹石1点、敲石1点、半

円状扁平打製石器４点、石核２点、二次加工剥片２点などが出土し、土器７点、石器６点を図示した。土器は、床面直上の黒褐色土(13層)と12層の層界から129-6・7、130-1・2、１層から130-3が出土した。いずれも遺存状態が良好であることから、意図的な廃棄が想定される。そのほかの図示した遺物はいずれも上～中層の出土である。覆土に混入したものも含まれると推測される。他に玉髄片が出土した。

129-6・7、130-1・2は略完形の深鉢である。130-1・2は同一個体である。いずれも単軸絡条体第１類が回転施文される。胴部はすべて縦位施文であるが、口縁部文様は、129-6が横位、129-7は斜位、130-1は縦位施文の後、口縁端部と口縁部中位に横位施文する。129-7と130-1の頸部には、単軸絡条体第１類の回転施文を伴う隆帯が巡る。129-7にはさらに隆帯上に単軸絡条体第１類の側面が押圧される。これら３点は円筒下層b2式に比定される。130-3は略完形の深鉢である。口縁部には単軸絡条体第５類が横位に、胴部には単軸絡条体第１類が縦位に施文される。円筒下層b1～b2式に比定される。130-4も口縁部には単軸絡条体第５類が横位に、胴部には単軸絡条体第１類が縦位に施文されるが、加えて頸部には沈線が２条巡る。円筒下層b1式に比定される。130-5は深鉢の底部である。底面に半截竹管状の刺突が施される。枝回転文の可能性もある。縄文時代前期中葉(円筒下層ａ～b1式)に比定される。

[時期・所見]底面付近の一括遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b2式期と推定される。なお、底面直上から出土した炭化種実の同定の結果、クリとキケマン属が僅かに確認された。炭化材同定では下層でクリが多く、カツラとケンポナシ属も確認されている。中層ではクリのみが確認された。

(中澤)

第４号土坑(SK4)(遺構第45図、遺構写真57)

[位置・確認状況・重複関係]ⅣU・ⅣV89グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。

[規模・形態]平面形は径約145㎝の円形である。確認面からの深さは26㎝である。壁は外へ開きながら立ち上がり、断面逆台形状を呈する。底面は中央部分が若干盛り上がるが、全体的に平坦である。

[覆土]Ⅲ層由来の黒褐色土の単一層である。

[出土遺物]遺物は出土していない。

[時期・所見]本遺構の構築時期は不明である。

(久保)

第５号土坑(SK5)(遺構第45図、遺物第131図、遺構写真57)

[位置・確認状況・重複関係]調査区北西部VF・V6104グリッドに位置し、Ⅴ層で検出した。

[規模・形態]平面は長軸81㎝、短軸76㎝、検出面からの深さ31㎝のフラスコ状土坑である。平面形は不整円形を呈し、底面は平坦である。

[覆土]３層に分層した。Ⅲ層由来土を主体とし、各層にⅤ層由来の黄褐色ローム粒を含む。

[出土遺物]土器20ｇが出土し、１点を図示した。小片であることから、覆土に混入したものの可能性が高い。図示した土器は深鉢の口縁部片である。波状口縁の波頂部であり、口縁形状に沿って沈線が施文される。縄文時代後期前葉に比定される。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の帰属時期は縄文時代後期前葉以降と考えられる。

(中澤)

第６号土坑(SK6)（遺構第45図、遺構写真57）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅤD99グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は径約110cmの円形もしくは楕円形と推定される。確認面からの深さは21cmである。北側はP1047と重複し、本遺構が旧い。北西側が調査区外に位置する。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底である。

〔覆土〕２層に分層した。いずれもⅢ層由来の黒褐色土である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔時期・所見〕本遺構の構築時期は不明である。

（久保）

第８号土坑(SK8)（遺構第45図、遺構写真57）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD64に位置する。Ⅳ層で確認した。SI33と重複し、本遺構が新しい。

〔規模・形態〕平面形は159cm×154cmの円形状を呈する。確認面からの深さは21cmで、壁は北側が緩やかに立ち上がり、南側が垂直に立ち上がる。断面逆台形状を呈する。底面は平坦である。

〔覆土〕８層に分層した。上部の１・２層で炭化物層がみられ、Ⅲ層由来の褐色土である３層を挟み、下部の４・５・８層で再び炭化物層がみられる。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔時期・所見〕覆土から出土した炭化物について、放射性炭素年代測定を実施した結果、1,196±21yrBPの値を得たことから、古代の製炭土坑の可能性がある。

（久保）

第９号土坑(SK9)（遺構第45図、遺物第131図、遺構写真58）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢB・ⅢC64グリッドに位置し、Ⅵ層上面で検出した。SK45と重複し、本遺構が新しい。

〔規模・形態〕長軸228cm、短軸194cm、検出面からの深さ29cmで、平面形はほぼ不整円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

〔覆土〕５層に分層した。炭化物粒をわずかに含む黒褐色土もしくは灰黄褐色土を主体とする。５層に白頭山苫小牧火山灰がブロック状に入る。

〔出土遺物〕土器410gなどが出土し、土器１点を図示した。土器は小片であり覆土から出土したことから、混入と考えられる。131-2は大木10式併行に比定される深鉢の口縁部片である。

〔時期・所見〕覆土に白頭山苫小牧火山灰がブロック状に入ることから、時期は古代と推定される。

（中澤）

第10号土坑(SK10)（遺構第46図、遺物第131・132図、遺構写真58、遺物写真120）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢB67グリッドに位置し、Ⅲ層下部で検出した。

〔規模・形態〕長軸241cm、短軸230cm、検出面からの深さ197cmのフラスコ状土坑である。平面形は円形を呈し、底面は平坦である。

〔覆土〕20層に分層した。上層は黒褐色土、下層は褐色土を主体とする。中端直下と底面付近で大形の礫が出土している。

〔出土遺物〕土器4,450g、石錘１点、凹石１点、両面調整石器２点、二次加工剥片３点などが出土し、

土器3点、石器4点を図示した。131-5,132-1・3・4は4・5層から出土した。132-2は下層出土である。131-5は深鉢胴部の大形破片と底部である。同一個体であるが、接合しない。単節縄文の原体の末端を別の原体で結節し、縦位施文する。底面には網代痕が残る。131-3と131-4は深鉢の口縁部と胴部の小片である。3点とも大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

（久保）

第13号土坑（SK13）（遺構第45図、遺物第132図、遺構写真59）

〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ072グリッドに位置する。Ⅶ層を精査中に礫の集中地点を検出し、周囲を精査した結果、プランを確認した。

〔規模・形態〕平面形は、東西を長軸とする68㎝×50㎝の楕円形である。東側に段を持ち、西側が深い。確認面からの深さは48㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、西壁の一部はオーバーハングする。底面は平坦である。

〔覆土〕2層に分層した。1層は西側にほぼ垂直に堆積する暗褐色土である。炭化物を多く含む。垂直に堆積することから、柱痕跡と考えられる。2層はⅦ層由来の褐色土である。柱の裏込土と考えられる。いずれも礫を多量に含む。

〔出土遺物〕土器420gが出土し、そのうち土器1点を図示した。132-5は遺構上面から出土した大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。小片であることから、混入と考えられる。

〔時期・所見〕遺構の形状及び土層の堆積状況から、本遺構は柱穴と判断できる。1層に礫が多量に含まれることから、柱は抜かれており、その後、礫が入れられたと考えられる。

なお、本遺構は東側がテラス状に浅く、西壁の中位がオーバーハングすることから、柱を掘える際は、本遺構の東側に柱を置き、西側に引き起こしたと復元される。出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期以降と考えられる。周囲には同種の遺構がいくつか存在するが、明確な柱配置は捉えられなかった。

（岩井）

第14号土坑（SK14）（遺構第45図、遺構写真58）

〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ073グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は、90㎝×82㎝の楕円形で、確認面からの深さは14㎝である。壁はなだらかに開いて立ち上がり、底面は平坦である。遺構北側の確認面から底面にかけて、被熱により赤色化している。

〔覆土〕4層に分層した。1～3層は、炭化物や焼土塊を含む黒～黒褐色土である。特に2層は炭化物の含有量が多い。4層はⅦ層が被熱した焼土層である。

〔出土遺物〕遺物は出土していない。

〔時期・所見〕2層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定の結果、974±20yrBPの結果が得られており、遺構の壁面や底面が被熱していることや、炭化物が覆土に多く含まれることから、古代の製炭土坑と考えられる。2層から出土した炭化種実の同定の結果、アワとイヌタデ属が僅かに得られている。

（岩井）

第15号土坑(SK15)（遺構第46図、遺物第132図、遺構写真59、遺物写真120）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢO・ⅢP75グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。

[規模・形態]平面形は134cm×85cmの楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。検出面からの深さは最深で32cmである。

[覆土]単層であり、Ⅲ層由来の黒褐色シルトが母材である。遺物の出土状況から、人為的に埋め戻された可能性がある。

[出土遺物]土器275g、石鏃1点、石鏃未成品1点、石匙1点、磨製石斧2点などが出土し、土器1点、石器4点を図示した。出土遺物のうち磨製石斧2点と図示しなかった石匙は東側から出土した。

132-6は覆土最上位から出土した深鉢の口縁部片である。波状口縁の波頂部であり、捻りのある把手状である。大木10式併行に比定される。本来的に本遺構には伴わないものと思われる。他に図示していないが、円筒下層a～b1式に比定される土器片が覆土から数点出土している。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の帰属時期は縄文時代前期に帰属し、遺物の出土状況や内容から土坑墓と考えられる。

（茅野）

第16号土坑(SK16)（遺構第46図、遺構写真60）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢR76グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で確認した。

[規模・形態]平面形は131cm×64cmの楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。検出面からの深さは最深で77cmである。

[覆土]6層に分層した。おおむねⅢ層由来と考えられるが、覆土下半(2層)は硬く締まっている。

[出土遺物]土器50g、石匙1点などが出土した。土器はいずれも縄文時代早期の遺物である。覆土に混入したものと考えられる。第237図に掲載した。

[時期・所見]覆土の硬化具合や確認状況から、縄文時代早期以降の土坑である可能性が高い

（茅野）

第17号土坑(SK17)（遺構第46図、遺物第132図、遺構写真60）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢP75グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。

[規模・形態]平面形は141cm×53cmの隅丸長方形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は丸みを帯びる。検出面からの深さは最深で54cmである。

[覆土]4層に分層した。Ⅱ層由来の黒色土が堆積する。

[出土遺物]土器50gが出土し、土器1点を図示した。132-11は底面から出土したものの、小片であることから、本遺構に帰属するか否かは定かではない。深鉢の口縁部片で、縄文が施される。大木10式併行に比定される。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期以降と考えられるが、かなり新しい可能性もある。

（茅野）

第18号土坑(SK18)（遺構第46図、遺物第132・133図、遺構写真60、遺物写真121）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢR・ⅢS73グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。SI23・SK23と重複し、SI23より旧くSK23より新しい。

〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は152cm×133cmの楕円形である。壁はオーバーハングし、底面は平坦である。底面の平面形は185cm×167cmの楕円形である。検出面からの深さは最深で59cmである。

〔覆土〕11層に分層した。全体的にⅥ・Ⅶ層土塊を主体とし、人為的に埋められたものと判断した。

〔出土遺物〕土器545g、石鏃2点、石匙1点、スクレイパー1点、半円状扁平打製石器3点、二次加工剥片3点などが出土し、土器1点、石器7点を図示した。132-12は円筒下層a～b2式に比定される深鉢の口縁部片である。下層から出土したが、小片であることから、覆土に混入したものと推定される。

〔時期・所見〕重複関係から、機能・廃絶時期は円筒下層b1～b2式期以降と考えられる。

（茅野）

第19号土坑（SK19）（遺構第47図、遺物第133図、遺構写真60、遺物写真121）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢQ75・76グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で確認した。SR2と重複し、本遺構が旧い。SI20とも重複する可能性があるが新旧は不明である。

〔規模・形態〕平面形は108cm×87cmの楕円形である。壁はなだらかに開いて立ち上がり、底面は凹凸がある。検出面からの深さは最深で24cmである。

〔覆土〕にぶい黄褐色土の単一層である。付近のⅢ・Ⅳ層が由来と考えられる。

〔出土遺物〕1層から石槍1点などが出土し、図示した。

〔時期・所見〕SR2より旧いことから縄文時代前期中葉以前の遺構と考えられる。

（茅野）

第21号土坑（SK21）（遺構第47図、遺物第133・134図、遺構写真61、遺物写真121）

〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ0・ⅢP71・72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SB1と重複し、本遺構が旧い。

〔規模・形態〕開口部から底面にかけて直線的に広がるフラスコ状土坑である。開口部の平面形は、120cm×98cm、底面の平面形は230cm×200cmで、どちらも楕円形である。確認面からの深さは92cmで、底面は平坦である。

〔覆土〕11層に分層した。いずれも地山（Ⅳ～Ⅶ層）由来土であることから、一括の人為的な埋め戻しと推定される。中～下位には10cm～30cm大の礫が多量に含まれる。礫はいずれも緑色を呈することから、意図的に選択された可能性がある。8・9層と10層の層界には炭化物層が広がる。その上面からは遺存状態の良好な土器が、複数個体押しつぶされた状態で出土したがいずれも完形ではない。

〔出土遺物〕土器3,610g、凹石1点、敲石2点、半円状扁平打製石器1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器1点、石器3点を図示した。8・9層と10層の層界から出土した土器は劣化が著しく、復元は一部に留まる。

133-5は深鉢である。器面劣化が顕著であるものの、胴部に単軸絡条体第1類の施文が認められる。頸部には隆帯が巡る。円筒下層b1～b2式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器から、廃絶時期は円筒下層b1～b2式期と考えられる。覆土に含まれる礫の石質について、柴調査員、根本調査員より、遺跡周辺で採取可能な凝灰岩・デイサイト・安山岩との見解を得た。なお10層から出土した炭化材の同定の結果、クリが確認されている。

（岩井）

第22号土坑(SK22)（遺構第47図、遺物第134図、遺構写真61、遺物写真121）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢT74グリッドに位置する。付近の捨場を掘削中にⅣ～Ⅴ層で確認した。SI22と近接するが、重複関係は不明である。

〔規模・形態〕斜面落ち際に構築されるため、東側の立ち上がりは確認できないものの、残存部分から平面形は長軸189㎝の不整楕円形と推定される。壁はなだらかに立ち上がり、底面は凹凸がある。検出面からの深さは最深で22㎝である。

〔覆土〕2層に分層した。Ⅲ層由来の暗褐色土が母材である。

〔出土遺物〕土器540g、石鏃3点、石匙1点、スクレイパー2点、両面調整石器1点、二次加工剥片5点などが出土し、石器3点を図示した。出土土器は円筒下層a～b2式に比定される。すべて小片であるため、図化はしていない。134-3の石匙は中央部の底面に近い位置から出土した。

〔時期・所見〕出土土器および確認状況から、本遺構の帰属時期は円筒下層a～b2式期と考えられる。形状から土坑墓の可能性があるが、根拠に欠ける。

（茅野）

第23号土坑(SK23)（遺構第46図、遺物第134図、遺構写真62、遺物写真121）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢS73グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。SK18と重複し本遺構が旧い。また、SI23と重複する可能性が高く、本遺構が旧い。

〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は径約170㎝の不整円形である。壁は、上半は北側で垂直に立ち上がり南側では開く。下半はオーバーハングする。底面は平坦である。底面の平面形は径約200㎝の円形である。検出面からの深さは最深で107㎝である。

〔覆土〕5層に分層した。Ⅴ・Ⅵ層由来の土塊を主体とする土層が堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。

〔出土遺物〕土器230g、石錘1点、凹石2点、敲石1点、半円状扁平打製石器1点、礫1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器1点、石器5点を図示した。いずれも覆土から出土した。134-6は円筒下層b1～b2式土器に比定される。深鉢の胴部である。複節の斜行縄文が施される。

〔時期・所見〕出土土器から、本遺構の帰属時期は円筒下層b1～b2式期以降と考えられる。

（茅野）

第24号土坑(SK24)（遺構第47図、遺物第135図、遺構写真62、遺物写真121）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢM・ⅢN72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は径約150㎝、底面は径約170㎝で、どちらも円形である。壁は、上位は開き中位から底面にかけて直線的にオーバーハングする。確認面からの深さは80㎝、底面は平坦である。底面中央には小穴が伴う。小穴の平面形は44㎝×36㎝の楕円形で、確認面からの深さは13㎝である。

〔覆土〕16層に分層した。1層は被熱した土器片を多く含む黒褐色土である。2・3層には強く被熱した焼土の小塊が集中的に含まれる。層界が不整合であることから、現地性の焼土ではないと考えられる。5・6層は比較的均質な黒褐色土である。堆積要因は定かではない。7層以下は暗褐～褐色土で、地山漸移層～地山層由来と推定されることから、人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器1,430gなどが出土し、土器2点、土製品1点を図示した。土器は1層から多数出土

したものの、小片で被熱による劣化が著しい個体が多い。粗製土器片が多数を占めるが、隆帯を伴う後期初頭の土器片も数点確認した。また、１層からは土製品(135-3)も出土している。

135-1は深鉢の胴部片である。刻みを伴う隆帯の両脇に円形刺突列が施される。縄文時代後期初頭に比定される。135-2は底部片である。底面に網代痕が残る。大木10式併行に比定される。135-3は不明土製品である。耳栓の可能性がある。

[時期・所見]１層から出土した土器の時期より、遺構の廃絶は縄文時代後期初頭と考えられる。遺構上位に焼土が検出されたが、ブロック状を呈することから、現地性ではなく廃棄されたものと判断できる。焼土直上(１層)で出土した土器小片群にも被熱が認められることから、これらは一連の堆積と想定される。

(岩井)

第25号土坑(SK25)（遺構第47図、遺物第135図、遺構写真62、遺物写真121)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢR73グリッドに位置する。SI23精査中にⅥ層及び床面で確認した。SI23と重複し本遺構が旧い。

[規模・形態]フラスコ状土坑である。開口部の平面形は150㎝×131㎝の不整楕円形である。壁は、上半はほぼ垂直に立ち上がり、下半はオーバーハングする。検出面からの深さは最深で69㎝である。底面は平坦で、平面形は185㎝×165㎝の不整楕円形である。底面には中央付近から西に伸びる溝を伴う。幅は約25㎝、底面からの深さは24㎝である。

[覆土]９層に分層した。全体的にⅥ層土塊を多く含む土層で構成されるため人為的埋め戻しを受けたものと判断した。なお、３層と４層の層界の上下で上位はほぼⅥ層のみ、下位はⅥ層土塊を含むというように覆土の状況が異なる。

[出土遺物]土器3,850g、石鏃未成品１点、石匙１点、スクレイパー１点、二次加工剥片１点、敲石１点などが出土し、土器２点、石器３点を図示した。図示した２点の土器(135-4・5)は略完形の深鉢であり、３・４層の層界で出土した。３・４層の層界では、他に焼土塊や径30㎝程度の扁平礫が出土している。４層埋め戻し後に、意図的な廃棄行為が行われた可能性が高い。135-4・5は略完形の深鉢であり、どちらも口縁形態は低平な波状である。口縁部と底部直上には単軸絡条体1類が横位に施文され、胴部には羽状縄文と縦位施文の単軸絡条体第１類が施される。頸部に隆帯は伴わない。135-5の口縁部には縦位の縄文原体押圧が伴う。これら２点は円筒下層b2～ｃ式に比定される。

[時期・所見]出土土器から、本遺構の帰属時期は円筒下層b2～ｃ式期と考えられる。

(茅野)

第26号土坑(SK26)（遺構第48図、遺物第136図、遺構写真63、遺物写真121)

[位置・確認状況・重複関係]ⅣK・ⅣL83グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。SI30と重複し、本遺構が新しい可能性が高い。

[規模・形態]削平のため東側の立ち上がりが確認できないものの、残存部分から平面形は170㎝×118㎝の楕円形と推定される。壁はやや開きながら立ち上がり、底面はⅤ層を平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で35㎝である。壁際には５基の小規模なピットを検出した。

[覆土]７層に分層した。おおむねⅢ層黒色シルト質土を母材とする。最下層にはⅤ層粒がやや多く含まれる。

〔出土遺物〕土器230gなどが出土し、土器２点と石製品１点を図示した。土器はいずれも小片であり、覆土から出土していることから、覆土に混入したものと推定される。石製品は３層下部から出土したが、本遺構に伴うものか不明である。土器は円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。どちらも頸部に指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。136-3は円盤状石製品である。全体を荒く擦り整形している。

〔時期・所見〕出土土器から、本遺構の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と考えられる。形状の点からは土坑墓の可能性もあるが根拠は無い。

（茅野）

第27号土坑(SK27)（遺構第48図、遺物第136図、遺構写真63）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK75グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は、94㎝×75㎝の楕円形で、確認面からの深さは20㎝である。壁はなだらかに開いて立ち上がり、底面は凹凸がある。

〔覆土〕にぶい黄褐色土の単一層である。10㎝～20㎝大の円礫が８個出土した。使用痕や規則的な配置は認められない。礫が含まれることから、人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器120gが出土し、そのうち土器１点を図示した。136-4は大木10式併行の深鉢の胴部片である。覆土出土であり小片であることから、混入の可能性が高い。

〔時期・所見〕出土土器から廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（岩井）

第28号土坑(SK28)（遺構第48図、遺物第136図、遺構写真63、遺物写真122）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK・ⅢL68グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。検出時にSR4・SR5とした遺構は、本遺構の覆土に土器の底部が含まれたものと判明したため、本遺構出土土器とした。

〔規模・形態〕平面形は、268㎝×177㎝の楕円形で、確認面からの深さは60㎝である。壁はやや開いて立ち上がり、底面は平坦である。

〔覆土〕７層に分層した。上位層（１～３層）は黒色～暗褐色土、下位層（５層）は褐色土、壁際の堆積は黒褐色～暗褐色土と大別が可能である。下位層の中央付近は柱痕状に黒色土が堆積する（４層）が、性格は特定できていない。１層には５～30㎝大の焼土塊が数個含まれる。

〔出土遺物〕土器400g、石匙１点、石槍１点、スクレイパー１点、凹石１点、二次加工剥片２点などが出土し、土器２点、石器４点を図示した。出土土器片は縄文時代前期中葉に属するものが多数を占めるが、図示した136-5を含め、縄文時代中期末葉の土器片が２点出土している。136-8・11は５層上面から出土した。136-8は２層と５層の層界に、刃先を下にして立てかけられたような状態で出土している。136-5は深鉢の口縁部片である。沈線文が施される。大木10式併行に比定される。136-6・7は深鉢の底部である。136-6は円筒下層b1～b2式、136-7は円筒下層b2式に比定される。

〔時期・所見〕出土土器から廃絶時期は円筒下層b2式期以降と考えられる。上位層と下位層で覆土の様相が異なることに加え、層界で刃先を下にした石槍(136-8)などが出土しており、特異な様相を呈する。

（岩井）

第30号土坑(SK30)（遺構第48図、遺物第136図、遺構写真63、遺物写真122）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢL74・75グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SP544と重複し、本遺構が旧い。東側は攪乱により上位が消失している。

〔重複関係・規模・形態〕フラスコ状土坑である。残存部分から、開口部の平面形は、径約100㎝の円形と推定される。底面は径約120㎝の円形である。壁は上端のみ開き、底面にかけて直線的にオーバーハングする。北壁は崩落が認められる。確認面からの深さは77㎝、底面は平坦である。底面中央には小穴と溝が伴う。小穴の平面形は径23㎝の円形で、確認面からの深さは５㎝である。溝は小穴から南北に延びる。深さは５㎝程度である。

〔覆土〕７層に分層した。１～４層はⅢ～Ⅳ層由来土、５層はⅢ層由来土、６・７層はⅦ層由来土である。１層は焼土塊を多く含む。いずれの層にも地山土塊や焼土塊が含まれることや、自然堆積層は認められないことなどから、一括の人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器240g、石鏃１点、石匙１点、磨製石斧１点、凹石１点、二次加工剥片２点などが出土し、土器１点、石器３点を図示した。小形の磨製石斧(136-14)と凹石(136-15)、石匙(136-13)は最下層である６層から出土している。詳細な出土状況は定かではないが、本遺構に帰属する可能性が高い。掲載していない石鏃は破損品で、１層から出土した。136-12は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。４層から出土しており小片であることから、覆土に混入したものと考えられる。

〔時期・所見〕出土土器の時期より、遺構の廃絶は大木10式併行期以降と考えられる。１層には焼土塊が混入する。SK31等、フラスコ状土坑の中位～上位に焼土塊が堆積する例があることから、本遺構も同種の性格の可能性がある。

（岩井）

第31号土坑(SK31)（遺構第48図、遺物第137図、遺構写真64、遺物写真122）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC67グリッドに位置する。Ⅲ層下部で確認した。東側は撹乱を受けている。

〔規模・形態〕平面形は230㎝×209㎝、円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは189㎝である。底面は平坦である。

〔覆土〕19層に分層した。黄褐色土を主体とする。４層は焼土で、直下(５層)から多量の土器片(137-3)と大形の礫が出土した。焼土は現地性のものではなく、土器と礫が廃棄された後に廃棄されたと考えられる。

〔出土遺物〕土器6,290g、石鏃１点、石錘１点、凹石１点、二次加工剥片３点などが出土し、土器３点、石鏃１点、凹石２点を図示した。出土した土器は縄文時代中期末葉前後のほか、前期中葉も出土している。図示した３点の土器は深鉢の口縁部片であり、１層もしくは２層から出土した。137-2は無文でナデ調整が施される。137-3は単節の斜行縄文が施される。これら２点は大木10式併行に比定される。137-1は刻目を伴う隆帯が貼り付けられる。縄文時代後期初頭に比定される。137-4の石鏃は床面直上で出土した。137-5の凹石は４層で出土したことから、焼土と共に廃棄された可能性がある。137-6は上層から出土した。

〔時期・所見〕出土土器から、本遺構の廃絶時期は縄文時代中期末葉～後期初頭以降と考えられる。

（久保）

第32号土坑(SK32)（遺構第49図、遺物第137図、遺構写真64、遺物写真122）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD・ⅢE65グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は235㎝×214㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さ196㎝

である。北側は攪乱を受けている。底面は平坦である。

〔覆土〕25層に分層した。黒褐色土及び褐色土を主体とする。4層上面では焼土塊が面的に検出された。同面の壁際では大形礫が出土している。

〔出土遺物〕土器6,290g、石鏃1点、石鏃未成品1点、凹石1点、敲石1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器3点、石器3点、土製品1点を図示した。

掲載土器はいずれも中層出土である。137-7・8は深鉢の口縁部片である。137-9は壺の体部片である。細い工具による沈線文が施される。これら3点は縄文時代後期初頭に比定される。石鏃(137-10)は上層、礫石器2点(137-11・12)は下層からの出土である。137-13はミニチュア土器である。深鉢形で、内外面にベンガラが塗布されている。口縁部が打ち欠かれている。遺構上層で出土した。

〔時期・所見〕出土土器から、本遺構の廃絶時期は縄文時代後期初頭以降と考えられる。

(久保)

第33号土坑(SK33)（遺構第48図、遺物第138図、遺構写真64・65、遺物写真122）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC・ⅢD64グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。

〔規模・形態〕長軸273cm、短軸250cm、検出面からの深さ103cmのフラスコ状土坑である。平面形はほぼ楕円形を呈し、底面はほぼ平坦である。

〔覆土〕20層に分層した。褐色土を主体とする。2層はⅦ層由来、4・5・10・13～20層にⅦ層由来のローム粒・ブロックを微量含む。一括の人為堆積と推定される。底面から扁平な礫が出土した。

〔出土遺物〕土器6,070g、スクレイパー1点、磨製石斧1点、石核3点、二次加工剥片1点などが出土し、土器4点、石器2点を図示した。土器は縄文時代中期末葉のほか、前期中葉のものも出土している。

138-3・4・6は確認面で出土した。そのほかの掲載遺物は覆土からの出土である。土器は小片であり、覆土に混入した可能性がある。138-1・2は深鉢の胴部片であり、138-3・4は深鉢の口縁部片である。138-1は縄文時代中期末葉(大木10式併行)～後期初頭、138-2～4は大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は縄文時代中期末葉(大木10式併行期)～後期初頭以降と考えられる。

(中澤)

第35号土坑(SK35)（遺構第49図、遺物第138図、遺構写真65、遺物写真122）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE69・70グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。SK61と重複し、本遺構が旧いと推定される。

〔規模・形態〕平面形は225cm×186cmの楕円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは175cmである。底面は平坦である。西側が攪乱溝と重複しており、本遺構が旧い。

〔覆土〕27層に分層した。上層は黒褐色土、下層は褐色土を主体とする。9層は焼土で、大形の被熱した礫が1点出土した。焼土はブロック状であることから現地性のものではなく、礫と共に廃棄されたと考えられる。

〔出土遺物〕土器1,930g、石鏃未成品1点、磨製石斧1点、敲石1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器4点、石器2点を図示した。中層から出土した土器は一部被熱痕が認められる。

138-7は中層から出土した壺の頸部片である。橋状把手が付される。138-8～138-10は深鉢の口縁部である。138-8は上層、138-9は焼土下層、138-10は中層で出土した。これらの土器は縄文時代大木

10式併行に比定される。掲載石器はどちらも焼土直下で出土した。
[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期と考えられる。

(久保)

第36号土坑(SK36)（遺構第50図、遺物第138図、遺構写真65、遺物写真122）
[位置・確認状況・重複関係]ⅢC・ⅢD67・68グリッドに位置し、Ⅴ層で検出した。SB2pit5と重複し、本遺構が新しい。
[規模・形態]長軸273cm、短軸250cm、検出面からの深さ17cmで、平面形はほぼ楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。
[覆土]4層に分層した。黒褐色・暗褐色土を主体とし、1～2層に炭化物が微量、3～4層にⅥ層由来のロームブロックが微量混入する。4層は人為堆積と推定される。2層上面で径10～20cm大の礫が確認され、本遺構廃棄時に投げ込んだものと推定される。
[出土遺物]土器1,290g、スクレイパー1点などが出土し、土器2点、石器1点を図示した。遺物はいずれも覆土から出土したことから、覆土に混入した可能性が考えられる。138-13は深鉢の波状口縁の小片である。無文でナデ調整が施される。大木10式併行に比定される。138-14は深鉢の胴部片である。単軸絡条体第1類が縦位施文される。円筒下層b1～b2式に比定される。
[時期・所見]重複関係から、本遺構の廃絶時期は縄文時代中期末葉～後期初頭以降と考えられる。

(中澤)

第37号土坑(SK37)（遺構第50図、遺物第138図、遺構写真66）
[位置・確認状況・重複関係]ⅢC・ⅢD65グリッドに位置し、Ⅴ層で検出した。
[規模・形態]長軸193cm、短軸156cm、検出面からの深さ89cmで、平面形は不整楕円形を呈する。南東壁はほぼ垂直に立ち上がり、南西壁と北東壁はオーバーハングする。北西壁は上半が開き、下半はややオーバーハングして立ち上がる。
[覆土]5層に分層した。1～3層は暗褐色土、4・5層は褐色土を主体とする。本遺構の壁は形状が一定ではないことから壁の崩落が想定され、4・5層が壁崩落土と考えられる。3層は南壁際のみに厚く堆積する層であり、人為堆積と考えられる。1・2層は、基質が比較的均質で皿状に堆積することから、自然堆積の可能性がある。
[出土遺物]土器470gなどが出土し、土器1点を図示した。遺物はいずれも覆土から出土したことから、覆土に混入した可能性が考えられる。138-16は2層から出土した深鉢の口縁部片である。羽状縄文と思われるが小片のため判然としない。円筒下層a～b2式に比定される。
[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

(中澤)

第38号土坑(SK38)（遺構第50図、遺物第138図、遺構写真66）
[位置・確認状況・重複関係]ⅢE・ⅢF68グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。SP151と重複しており、本遺構が新しい。
[規模・形態]平面形は125cm×88cmの楕円形状を呈する。確認面からの深さは15cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底である。
[覆土]黒褐色土の単一層である。Ⅵ層由来のロームブロックを含む。

〔出土遺物〕土器400gなどが出土し、土器1点を図示した。138-17は覆土から出土した深鉢の胴部片である。大木10式併行に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第41号土坑(SK41)（遺構第50図、遺物第138図、遺構写真66、遺物写真122）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD66グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は133cm×123cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは112cmである。底面は平坦である。底面西端にピットを1基確認した。
〔覆土〕12層に分層した。褐色土を主体とする。上面に大形の円礫が1点出土した。
〔出土遺物〕土器3,080g、両面調整石器1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器3点、石器1点、石製品1点を図示した。土器は縄文時代中期末葉前後のほか、前期中葉も出土している。掲載土器はすべて1層から出土した。小片であるため、覆土に混入したものと推定される。138-19は深鉢の口縁部片、138-18・20は深鉢の胴部片である。これら3点は大木10式併行に比定される。138-22は不明石製品である。側面をやや荒く加工している。底面直上(12層)から出土した。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第42号土坑(SK42)（遺構第50図、遺物第138図、遺構写真67）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD63グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕北西は試掘溝により滅失しているが、平面形は残存部分から径約135cmの円形と考えられる。確認面からの深さは20cmである。北西側は調査区外に位置する。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は歪な丸底である。
〔覆土〕Ⅲ層由来の黒褐色土の単一層である。Ⅵ層由来のロームブロックを含む。
〔出土遺物〕土器200g、凹石1点などが出土し、土器1点を図示した。138-23は大木10式併行に比定される深鉢胴部である。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第43号土坑(SK43)（遺構第50図、遺物第138図、遺構写真67、遺物写真122）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢB62グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は134cm×80cmの不整楕円形である。確認面からの深さは20cmである。北西側は調査区外に位置する。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は歪な丸底である。
〔覆土〕6層に分層した。Ⅲ層由来の黒褐色土で、Ⅵ層由来のロームブロックを含む。
〔出土遺物〕土器210gなどが出土し、土器1点、石器1点を図示した。138-24は上層で出土した深鉢の口縁部片である。口縁形状は低平な波状で、羽状縄文が施される。円筒下層b2～c式に比定される。138-25は中層で出土した。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層b2～c式期以降と考えられる。

(久保)

第44号土坑(SK44)（遺構第50図、遺構写真67）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢB65グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

[規模・形態]平面形は206cm×203cmの円形を呈する。検出面からの深さは22cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、底面南側にピットを1基確認した。底面からの深さは21cmである。確認面で集石がみられた。

[覆土]3層に分層した。暗褐色土・にぶい黄褐色土を主体とし、1層では炭化物が多量に含まれる。

[出土遺物]大木10式併行期に属する土器200gが出土した。いずれも小片のため図化はしていない。なお、覆土から出土した黒曜石の剥片(掲載外)の産地分析(分析No.K5)の結果、木造出来島群と推定されている。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第45号土坑(SK45)（遺構第45図、遺物第138図、遺構写真68、遺物写真122）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢC64・65グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。SK9と重複しており、本遺構が旧い。

[規模・形態]平面形は134cm×80cmの楕円形を呈する。確認面からの深さ20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面はほぼ平坦である。

[覆土]黒褐色土の単一層である。Ⅶ層由来のロームブロックを含む。

[出土遺物]土器700g、スクレイパー1点などが出土し、土器1点、石器1点を図示した。138-26は大木10式併行に比定される深鉢の口縁部片である。覆土出土であり小片であることから混入と推定される。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第47号土坑(SK47)（遺構第50図、遺物第139図、遺構写真68）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢA61・62グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

[規模・形態]平面形は115cm×114cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは88cmである。底面は平坦である。

[覆土]10層に分層した。暗褐色土を主体とし、4層から下層ではⅦ層由来のロームブロックを含む。

[出土遺物]土器180g、石核1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器1点を図示した。139-1は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。覆土からの出土であり、小片であることから混入と推定される。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第48号土坑(SK48)（遺構第51図、遺物第139図、遺構写真68、遺物写真122）

[位置・確認状況・重複関係]ⅢF67グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。SI32と重複する可能性がある。

[規模・形態]平面形は190cm×172cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは106cmである。底面は平坦である。底面中央にピットを1基確認した。

〔覆土〕21層に分層した。黒褐色～褐色土が堆積する。
〔出土遺物〕土器1,740g、スクレイパー２点、石核１点などが出土し、土器３点、石器２点を図示した。掲載土器はすべて下層出土である。139-2、139-3は深鉢の口縁部片である。結節回転文が施される。139-4は深鉢の底部である。単軸絡条体第１類が施される。これら３点は円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。139-5は上層から、139-6は下層からの出土である。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と考えられる。

（久保）

第49号土坑（SK49）（遺構第51図、遺物第139図、遺構写真68）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC66グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は84㎝×56㎝の楕円形を呈する。確認面からの深さは18㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は中央が若干深くなる。
〔覆土〕２層に分層した。黒褐色土で、２層では１㎝大のロームブロックを含む。
〔出土遺物〕土器150g、二次加工剥片１点などが出土し、土器１点を図示した。139-7は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。覆土出土であり小片であることから混入と推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第50号土坑（SK50）（遺構第51図、遺物第139図、遺構写真69）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD66グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は93㎝×90㎝の隅丸方形状を呈する。確認面からの深さは33㎝である。壁は急斜に立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底である。底面南側でピットを検出した。深さは底面から50㎝である。
〔覆土〕４層に分層した。黒色土主体で、１層では焼土を少量含む。
〔出土遺物〕土器１点を図示した。139-8は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。覆土出土であり小片であることから混入と推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第52号土坑（SK52）（遺構第51図、遺物第139図、遺構写真69、遺物写真122）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢG・ⅢH67・68グリッドで検出した。
〔規模・形態〕平面形は245㎝×157㎝の楕円形で、検出面からの深さは最大で90㎝である。壁はやや開いて立ち上がり、底面は丸みを帯びる。底面北西部には長軸54㎝、短軸26㎝の小穴を伴う。底面からの深さは22㎝である。
〔覆土〕基本的に黒色～暗褐色土を基質とするが、７・９・10層は、Ⅴ層やⅦ層由来土である。
〔出土遺物〕土器870g、石鏃未成品１点、凹石１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器１点、石器１点を図示した。遺物は小片であることから、混入の可能性が高い。139-9は円筒下層ａ～ｂ1式に比定される深鉢の口縁部片である。結節回転文が施される。139-10は覆土から出土した。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と考えられる。

（中澤）

第54号土坑(SK54)（遺構第51図、遺物第139・140図、遺構写真70、遺物写真123）
〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ G67グリッドに位置し、Ⅴ層上面で検出した。SI32と重複し、本遺構が旧い。
〔規模・形態〕長軸172cm、短軸171cm、検出面からの深さ137cmのフラスコ状土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、底面はほぼ平坦である。底面では溝を検出した。長さ約100cm、幅は約15cmで、底面からの深さは約15cmである。溝の北西端は高低差50cmのピット状となる。
〔覆土〕８層に分層した。暗褐色土及び褐色土を主体とし、人為堆積と推定される。
〔出土遺物〕土器7,190g、石錐１点、スクレイパー１点、磨石１点、半円状扁平打製石器１点、石核１点、異形石器１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器３点、石器２点、石製品１点を図示した。139-11・12は８層上面で重なって出土した。比較的遺存状態が良好なことから、意図的に廃棄されたものと推定される。140-1は４層で出土した。これも遺存状態が良好であることから、意図的な廃棄が想定される。磨石(140-2)は５層、石製品(140-4)は６層から出土した。

139-11・12、140-1はいずれも口縁部に羽状縄文が施され、胴部には単軸絡条体第１類や多軸絡条体が縦位施文される。139-11・140-1には頸部に低い隆帯が巡り、139-12には口縁端部と頸部に縄文原体が横位に押圧される。これら３点は円筒下層b2～ｃ式に比定される。140-4は有孔石製品である。亜円礫を穿孔している。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b2～ｃ式期と考えられる。

（中澤）

第55号土坑(SK55)（遺構第51図、遺物第140図、遺構写真69）
〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ I・Ⅲ J68グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。撹乱溝と重複する。
〔規模・形態〕平面形は143cm×84cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは12cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底である。
〔覆土〕にぶい黄褐色土の単一層である。炭化物を微量含む。
〔出土遺物〕土器60gが出土し、土器１点を図示した。140-5は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。１層から出土した。小片であることから、混入の可能性が高い。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第56号土坑(SK56)（遺構第51図、遺構写真70）
〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ H68・69グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は112cm×93cmの不定形を呈する。確認面からの深さは13cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底である。
〔覆土〕暗褐色土の単一層である。Ⅵ層由来のロームブロックを含む。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕時期を特定できる要素がないため、時期は不明である。

（久保）

第57号土坑(SK57)（遺構第51図、遺物第140図、遺構写真71）
〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ J68グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。撹乱溝と重複する。

〔規模・形態〕平面形は径約94cmの円形もしくは楕円形と考えられる。検出面からの深さ10cmで、壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底である。
〔覆土〕暗褐色土の単一層である。炭化物とⅥ層由来のロームブロックを含む。
〔出土遺物〕土器10gが出土し、土器1点を図示した。140-6は円筒下層a～b2式に比定される深鉢の胴部片である。1層から出土した。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

(久保)

第59号土坑(SK59)（遺構第51図、遺物第140図、遺構写真70）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD65グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は57cm×57cmの円形を呈する。検出面からの深さは14cmである。壁は急斜に立ち上がり、断面逆台形状を呈する。底面は平坦である。
〔覆土〕2層に分層した。暗褐色土及びにぶい黄褐色土で、Ⅵ層由来のロームブロックを含む。
〔出土遺物〕土器100gが出土し、土器1点を図示した。140-7は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第60号土坑(SK60)（遺構第52図、遺構写真71）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢG70グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は119cm×73cmの楕円形状を呈する。確認面からの深さは22cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面擂鉢状を呈する。
〔覆土〕3層に分層した。黒褐色土及び暗褐色土で、1層上面と底面では円礫が出土している。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕時期を特定できる要素がないため、時期は不明である。

(久保)

第61号土坑(SK61)（遺構第52図、遺構写真71）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE69グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。東側は撹乱溝により滅失する。SK35と重複し、本遺構が新しい。
〔規模・形態〕平面形は径約120cmの円形と考えられる。確認面からの深さは16cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底で凹凸がある。
〔覆土〕黒褐色土の単一層である。地山ブロックを含む。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕重複関係から、大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第62号土坑(SK62)（遺構第52図、遺物第140図、遺構写真71、遺物写真122）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢG69グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。東側は撹乱溝により滅失する。
〔規模・形態〕平面形は径約150cmの円形もしくは楕円形と考えられる。確認面からの深さは20cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は丸底である。

〔覆土〕暗褐色土の単一層である。上面及び覆土中から礫が出土し、中には被熱しているものもみられた。
〔出土遺物〕土器が200g、二次加工剥片1点などが出土し、石製品1点を図示した。140-8は線刻礫である。表裏に鋸角・鋭角状工具による線刻を有する。側円部に敲打痕を有する。
〔時期・所見〕土器が小片で時期を特定できないため、時期は不明である。

（久保）

第63号土坑（SK63）（遺構第52図、遺物第141図、遺構写真72、遺物写真123）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅡY64・65グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は202cm×186cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは104cmである。底面は平坦である。
〔覆土〕29層に分層した。床面直上で土器と石皿が出土している。
〔出土遺物〕土器7,360g、石鏃1点、石皿1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器2点、石器2点を図示した。141-2は遺存状態の良好な深鉢である。無文である。141-1は深鉢の口縁部片である。どちらも大木10式併行に比定される。これらの土器は底面直上で散在した状態で出土した。141-3の石鏃と141-4の石皿も底面直上で出土している。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

（久保）

第64号土坑（SK64）（遺構第52図、遺物第141図、遺構写真72）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD・ⅢE69グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。撹乱溝と重複する。
〔規模・形態〕平面形は91cm×87cmの円形を呈する。確認面からの深さは64cmである。壁は急斜に立ち上がり、断面逆台形状を呈する。底面は平坦である。
〔覆土〕4層に分層した。いずれも褐色土で、炭化物を微量含む。
〔出土遺物〕土器950gが出土し、土器1点を図示した。141-5は円筒下層a～b2式に比定される深鉢の胴部片である。半截竹管状の刺突が施されるが、枝回転文の可能性もある。覆土から出土しており小片であることから、混入と考えられる。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

（久保）

第65号土坑（SK65）（遺構第52図、遺構写真72）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC・ⅢD69グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は144cm×81cmの楕円形状を呈する。確認面からの深さは14cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は平坦である。
〔覆土〕暗褐色土の単一層である。Ⅵ層由来のロームブロックを含む。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕時期を特定できる要素がないため、時期は不明である。

（久保）

第67号土坑（SK67）（遺構第49図、遺物第141図、遺構写真72・73）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD・ⅢE65グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は187cm×143cmの楕円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは

76cmである。底面は平坦である。

〔覆土〕9層に分層した。暗褐色土を主体とし、確認面で焼土がみられたが、ブロック状であることから現地性のものではない。

〔出土遺物〕土器600g、二次加工剥片1点などが出土し、土器1点を図示した。141-6は円筒下層a～b1式に比定される深鉢の口縁部片である。結節回転文が施され、頸部には指頭圧痕を伴う隆帯が巡る。3層から出土した。小片であることから、覆土に混入したものと考えられる。なお、3層から出土した黒曜石の剥片(掲載外)の産地分析(分析№K33)の結果、木造出来島群と推定されている。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b1式期以降と考えられる。

(久保)

第70号土坑(SK70)(遺構第52図、遺物第141図、遺構写真73・74)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SK90と重複しており、本遺構が新しい。

〔規模・形態〕平面形は117cm×85cmの楕円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは132cmである。底面は平坦である。

〔覆土〕19層に分層した。上層は黒褐色土、下層は暗褐色土主体である。2層下部では礫が出土し、3層では焼土が廃棄されていた。底面直上では炭化物が多量に検出された。

〔出土遺物〕土器110gなどが出土し、土器1点を図示した。141-7は深鉢の口縁部片である。波状口縁で口縁端部が肥厚する。肥厚部には沈線が施され、波頂部下で渦を巻く。榎林式に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は榎林式期以降と考えられる。

(久保)

第71号土坑(SK71)(遺構第53図、遺物第141図、遺構写真74)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢL69グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は、径約80cmの不整円形である。壁は中位が膨らみ、中位で平面最大径となる。確認面からの深さは47cm、底面は丸みを帯びる。

〔覆土〕2層に分層した。1層は地山土を含む暗褐色土、2層は地山由来土である。自然堆積層は認められないことから、一括の人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器60gが出土し、土器1点を図示した。141-8は円筒下層b1～b2式に比定される深鉢の胴部片である。覆土出土であり小片であることから、混入の可能性がある。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層b1～b2式期以降と考えられる。

(岩井)

第72号土坑(SK72)(遺構第53図、遺物第142図、遺構写真74、遺物写真124)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は174cm×151cm、底面の平面形は175cm×155cmで、どちらも楕円形である。壁は上位が開き、中位から下位は直線的にオーバーハングする。確認面からの深さは76cm、底面は平坦である。底面中央には小穴が伴う。小穴の平面形は径約45cmの円形と推定され、底面からの深さは12cmである。

〔覆土〕10層に分層した。いずれの層も地山由来土を基質とするか、地山由来土が混入することから、

一括の人為堆積と考えられる。確認面で50cm×30cmの焼土ブロックを検出したほか、覆土全体に焼土塊の混入が認められる。7層上面からは、約25cmの扁平な礫が出土した。使用痕は認められない。
〔出土遺物〕土器230g、石匙2点、スクレイパー2点、敲石1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器2点、石器4点、石製品1点を図示した。図示した土器はどちらも深鉢の胴部片である。142-2は大木10式併行、142-1は円筒下層a～b1式に比定される。どちらも小片であることから、混入の可能性が高い。図示した石器4点は覆土からの出土である。これらも覆土に混入していた可能性もあるが、判然としない。142-7は不明石製品である。側面をやや荒く整形している。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（岩井）

第75号土坑(SK75)（遺構第53図、遺構写真75）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK74・75グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は84cm×59cmの不整楕円形である。壁はやや開いて立ち上がり、底面は西側が落ち込む。確認面からの深さは76cmである。
〔覆土〕2層に分層した。1層は地山漸移層由来、2層は地山土由来であることから、どちらも人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。検出面で扁平な礫を検出した。使用痕は認められず、礫の性格は定かではない。
〔時期・所見〕土器が出土していないことから、時期や性格は不明である。

（岩井）

第76号土坑(SK76)（遺構第53図、遺物第142図、遺構写真75、遺物写真124）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢR72・73グリッドに位置する。SI23床面(Ⅵ層)で確認した。SK76と重複し、本遺構が旧い。
〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は146cm×117cmの不整楕円形である。壁は、上位はやや開き、中位から下位はオーバーハングする。検出面からの深さは最深で120cmである。底面は平坦であり、平面形は径約220cmの円形である。中央付近には小穴を伴う。小穴の平面形は36cm×32cmの楕円形で、底面からの深さは30cmである。
〔覆土〕9層に分層した。覆土はⅥ層由来の粘質土主体の土層と黒褐色土主体の土層が互層となっている。おおむね人為的に埋め戻されたものと判断した。
〔出土遺物〕土器300g、石匙1点、石錐1点、スクレイパー2点、凹石1点、半円状扁平打製石器1点、挟入扁平磨製石器1点、二次加工剥片2点などが出土し、土器1点のほか、石器4点を図示した。いずれも覆土から出土したことから、混入と推定される。142-8は円筒下層b1～b2式に比定される深鉢の胴部片である。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b1～b2式期以降大木10式併行期以前と考えられる。

（茅野）

第77号土坑(SK77)（遺構第53図、遺物第142図、遺構写真75）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢM・ⅢN71グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SI28と重複し、本

遺構が旧い。

〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は径約210cm、底面の平面形は径約200cm、どちらも円形である。壁は上位が開き、中位から下位は直線的にオーバーハングする。確認面からの深さは124cm、底面は平坦である。

〔覆土〕14層に分層した。いずれの層も地山由来土を基質とすることから、一括の人為堆積と考えられる。また、8層と11層には炭化材が多く含まれ、特に8層は面的に広がる。

〔出土遺物〕土器130gが出土し、土器1点を図示した。142-13は深鉢の口縁部片である。内面に隆帯が施される。大木10式併行に比定される。14層上面から出土した。14層上面からは他に板状の炭化材も検出されている。

〔時期・所見〕14層上面で検出した炭化物について放射性炭素年代測定を実施した結果、3,935±24yrBPの値が得られており、出土遺物から想定した遺構の帰属時期と相違ないことから、本遺構は大木10式併行期に比定される。

(岩井)

第78号土坑(SK78)(遺構第53図、遺構写真76)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK73・74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SR6と重複し本遺構が旧い。

〔規模・形態〕平面形は113cm×80cmの不整楕円形である。壁は開いて立ち上がり、底面は丸みを帯びる。確認面からの深さは29cmである。

〔覆土〕2層に分層した。いずれも炭化物や焼土塊を含む。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕土器が20g出土した。いずれも小片のため、図化はしていない。

〔時期・所見〕SR6より旧いことから、縄文時代前期中葉以前に廃絶したと考えられる。

(岩井)

第79号土坑(SK79)(遺構第53図、遺物第143図、遺構写真76、遺物写真124)

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢL73・74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SP570・583・991・992と重複し、本遺構が旧い。

〔規模・形態〕フラスコ状土坑である。開口部の平面形は150cm×128cm、底面の平面形は190cm×163cmで、どちらも楕円形である。壁は開口部から底面にかけてやや膨らみながらオーバーハングする。確認面からの深さは78cm、底面は平坦である。

〔覆土〕14層に分層した。上位(1～3層)及び下位(11～14層)はⅣ・Ⅶ層に由来する褐色～暗褐色土、中位(5～10層)はⅢ層に由来する黒褐色～暗褐色土を基質とする。4・6・12層は炭化物層であり、面的に広がる。炭化物はいずれも1cm前後の粒状である。12層の下面には焼土塊が面的に検出されている。

〔出土遺物〕土器4,750g、石鏃未成品1点、凹石2点、敲石1点、半円状扁平打製石器2点、石皿2点、両面調整石器1点、二次加工剥片3点などが出土し、土器1点、石器5点を図示した。143-1は14層上面から、横倒しで押し潰された状態で出土した。ほぼ完形であったが、劣化や磨滅が著しく、復元は一部に留まる。円筒下層b2式に比定される。また、143-1に近接して143-2～143-5が出土した。そのうち、143-3は被熱が認められる。また、143-5は6層上面で出土した礫と接合した。

〔時期・所見〕出土土器の時期より、遺構の廃絶は円筒下層b2式期と考えられる。

本遺構の覆土には炭化物や焼土が多く含まれている。焼土は現地性ではないことから、他所での残滓が埋められたものと考えられる。焼失建物などの片付け穴の可能性も考えられるものの、要因は特定し難い。なお、143-1は完形で出土しており、意図的に埋置されたものと推定される。また、上位の覆土(1～3層)は、中位以下と異なり、比較的均質で硬く締まる地山由来土である。意図的に被覆した可能性も想定される。

特記事項として、炭化物層である4・6・12層について、フローテーションを行い、種実同定を行った結果、特に4層から多数のクリが検出された。他にも多種多様な種実が含まれていることが明らかとなっている(第4章第4節参照)。炭化材同定においても4層でクリが多く確認されている(第4章第3節参照)。

(岩井)

第80号土坑(SK80)(遺構第53図、遺物第144図、遺構写真77、遺物写真124)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢL・ⅢM75グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SI60と重複し、本遺構が新しい。

[規模・形態]平面形は78cm×70cmの不整楕円形である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は凹凸がある。確認面からの深さは42cmである。

[覆土]黒褐色土の単一層である。地山(Ⅵ層)土を含むことから人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器130g、石鏃1点、凹石1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器1点、石器2点を図示した。144-1は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。地文縄文に沈線文が施される。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(岩井)

第81号土坑(SK81)(遺構第53図、遺物第144図、遺構写真77、遺物写真124)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢG74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

[規模・形態]平面形は212cm×181cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは23cmである。Ⅶ層及び風倒木を掘り込み構築されている。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は平坦である。底面中央南東寄りにピットを1基確認した。

[覆土]6層に分層した。上層は黒褐色土を主体とし、下層は黄褐色土を呈する。

[出土遺物]土器375g、石鏃1点、石錐1点、石核1点、二次加工剥片1点などが出土し、土器1点、石器2点を図示した。144-4は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。沈線文に縄文が充填される。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。144-5の石鏃は1層から出土した。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第82号土坑(SK82)(遺構第54図、遺物第144図、遺構写真77、遺物写真124)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢI73グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

[規模・形態]平面形は198×175cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは108cmである。底面は平坦である。

[覆土]15層に分層した。上層はにぶい黄褐色土、下層は褐色土主体である。

〔出土遺物〕土器505g、石鏃１点、凹石１点、石皿１点、石核１点、二次加工剥片３点などが出土し、土器２点、石器２点を図示した。図示した土器は2点とも円筒下層b1～b2式に比定される深鉢の口縁部片である。144-7は６層、144-8は11層から出土した２点とも小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層b1～b2式期以降と考えられる。

（久保）

第83号土坑(SK83)（遺構第54図、遺物第144図、遺構写真77、遺物写真124）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は178㎝×163㎝の不定形な円形状を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは147㎝である。底面は平坦である。
〔覆土〕13層に分層した。暗褐色土主体で、12層では礫が出土している。
〔出土遺物〕土器145g、半円状扁平打製石器２点などが出土し、土器１点、石器１点を図示した。144-12は深鉢の口縁部片である。大木10式併行に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第84号土坑(SK84)（遺構第54図、遺物第144図、遺構写真77・78）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢF・ⅢG70グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は238㎝×227㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは124㎝である。底面は平坦である。底面中央にピットを１基確認した。底面からの深さは34㎝である。
〔覆土〕20層に分層した。黄褐色土主体である。
〔出土遺物〕土器130g、二次加工剥片１点などが出土し、土器１点を図示した。144-14は中層から出土した深鉢の胴部片である。円筒下層b1～b2式に比定される。小片であることから混入と推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層b1～b2式期以降と考えられる。

（久保）

第85号土坑(SK85)（遺構第54図、遺物第145図、遺構写真78、遺物写真124）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢF69グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は201㎝×197㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは117㎝である。底面は平坦である。底面中央にピットを１基確認した。底面からの深さは約20㎝である。
〔覆土〕12層に分層した。褐色土主体である。
〔出土遺物〕土器300g、石鏃１点、半円状扁平打製石器２点、二次加工剥片１点などが出土し、土器１点、石器２点を図示した。145-1は下層から出土した深鉢の口縁部片である。円筒下層ａ～b2式に比定される。小片であることから覆土に混入したものと推定される。145-2・3も下層出土である。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層ａ～b2式期以降と考えられる。

（久保）

第86号土坑(SK86)（遺構第54図、遺構写真78）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢB72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。南側を調査区端の法面に削平される。

〔規模・形態〕平面形は確認できた部分で251㎝×117㎝の円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは123㎝である。規模から、フラスコ状土坑であると考えられる。底面は平坦である。
〔覆土〕写真から、暗褐色土の堆積が確認できた。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕時期を特定する要素がないため、時期は不明である。

（久保）

第87号土坑（SK87）（遺構第55図、遺物第145図、遺構写真78、遺物写真124）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢA61グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は91㎝×72㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは73㎝である。底面は平坦である。底面南東端にピットを１基確認した。底面からの深さは21㎝である。
〔覆土〕７層に分層した。暗褐色土主体で、底面直上では炭化物が出土した。
〔出土遺物〕土器340ｇが出土し、土器２点を図示した。145-4は深鉢の胴部片である。地文縄文に沈線文が施される。145-5は底部である。底面に網代痕が残る。２点とも大木10式併行に比定される。どちらも小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第88号土坑（SK88）（遺構第55図、遺物第145図、遺構写真79）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢA62グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は107㎝×102㎝の円形を呈する。確認面からの深さは16㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面はほぼ平坦で、南西側にやや下がる。
〔覆土〕暗褐色土の単一層である。検出面では焼土ブロックを確認した。
〔出土遺物〕土器120ｇが出土し、土器１点を図示した。145-6は大木10式併行に比定される深鉢の胴部片である。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第90号土坑（SK90）（遺構第55図、遺物第145・146図、遺構写真79、遺物写真125）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SK70と重複しており、本遺構が旧い。また、南側を撹乱により削平される。
〔規模・形態〕平面形は確認できた部分で137㎝×91㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは70㎝である。底面は平坦である。底面中央にピットを１基確認した。底面からの深さは44㎝である。
〔覆土〕８層に分層した。上層は黒褐色土、下層は褐色土主体である。６層上面では焼土が検出されたが、現地性のものではないことから廃棄されたものと考えられる。８層上面では土器が潰れた状態で出土している。
〔出土遺物〕土器2,300ｇ、石匙１点、石錐１点、半円状扁平打製石器３点、抉入扁平磨製石器１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器２点、石器２点を図示した。145-7は遺存状態が良好な深鉢である。口縁形態は波状である。口縁部には縄文が施され、縄文原体が縦位・横位に押圧される。胴部

には多軸絡条体が回転施文され、底部直上は単軸絡条体第１類が回転施文される。円筒下層b2～ｃ式に比定される。145-8は深鉢の口縁部片である。器面の磨滅が著しい。円筒下層ａ～ｃ式に比定される。146-1の石匙は８層、146-2は下層出土である。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b2～ｃ式期と考えられる。

（久保）

第91号土坑(SK91)（遺構第55図、遺物第146図、遺構写真79、遺物写真125）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC71グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SK103と重複しており、本遺構が新しい。

〔規模・形態〕平面形は225㎝×223㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは162㎝である。底面は平坦である。

〔覆土〕25層に分層した。上層は黒褐色土、下層は暗褐色土主体である。下層ではⅦ層由来のロームブロックが多量含まれる。

〔出土遺物〕土器1,650g、石鏃未成品？１点、凹石５点、磨石１点、石核１点などが出土し、土器３点、石器５点を図示した。出土土器は縄文時代中期末葉前後のものが多数を占める。146-3は13～20層で出土した深鉢の口縁部である。円筒上層ｄ式に比定される。146-5は深鉢の口縁部片、146-4は胴部片であり、上層から出土した。大木10式併行に比定される。石器は146-6～8・10は上層、146-9は下層出土である。他に未掲載であるが、下層から石棒状の礫が出土している。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第92号土坑(SK92)（遺構第56図、遺物第147図、遺構写真80、遺物写真125）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢF76グリッドに位置する。Ⅴ層で確認した。SI37と重複しており、本遺構のほうが新しい。

〔規模・形態〕平面形は218㎝×209㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは124㎝である。底面は平坦である。

〔覆土〕17層に分層した。暗褐色土主体で、検出面では焼土が確認されたが、ブロックであることから現地性ではない。

〔出土遺物〕土器1,980g、凹石３点などが出土し、土器６点、石器３点、土製品３点を図示した。出土土器は縄文時代中期末葉のほか、前期中葉に属するものも出土している。147-3は中層、147-9は上層～中層、その他の掲載遺物は上層出土である。掲載土器はすべて小片であるため、覆土混入の可能性もある。147-1・3・5は深鉢の口縁部片である。147-5は波頂部が捻りのある把手状を呈する可能性がある。147-3は捻りのある把手状の波頂部の一部である。147-2・6は深鉢の胴部片である。147-1～5は大木10式併行、147-6は後期初頭に比定される。147-10はミニチュア土器である。深鉢形の底部である。147-11・12は円盤状土製品である。どちらも側面をやや荒く整形している。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

（久保）

第93号土坑(SK93)（遺構第56図、遺物第147図、遺構写真80、遺物写真125）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢA67グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は269cm×257cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは157cmである。底面は平坦である。
〔覆土〕15層に分層した。暗褐色土主体で、1～4層では焼土が確認されたが、ブロックであることから現地性ではない。上層では約20cm前後のⅦ層由来のロームブロックを含む。13層はⅦ層がブロック状に堆積しており、人為堆積と考えられる。
〔出土遺物〕土器4,410g、スクレイパー類1点などが出土し、土器4点、石器1点を図示した。出土した土器は縄文時代前期中葉のものが大半を占め、1層や2層には中期末葉のものが含まれる。図示した4点の土器はすべて深鉢であり、147-13～15は口縁部、147-16は胴部である。147-13・14は大木10式併行、147-15・16は円筒下層b1～b2式に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物は縄文時代前期中葉に属するものが多数出土しているものの、中期末葉に比定される土器も少数ながら出土したことから、本遺構の廃絶時期は縄文時代中期末葉以降の可能性が考えられる。

（久保）

第94号土坑（SK94）（遺構第56図、遺物第147図、遺構写真80）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢA・ⅢB69・70グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。南側を調査区端の法面に削平される。
〔規模・形態〕平面形は確認できた部分で207cm×122cmの円形を呈すると考えられるフラスコ状土坑である。確認面からの深さは65cmである。底面は平坦である。
〔覆土〕6層に分層した。褐色土と黒色土が互層になっている。
〔出土遺物〕土器50gが出土し、土器1点を図示した。147-18は円筒下層a～b2式に比定される深鉢の胴部片である。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

（久保）

第95号土坑（SK95）（遺構第56図、遺物第147図、遺構写真81）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE70グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SP465と重複しており、本遺構が旧い。東側を撹乱により削平される。
〔規模・形態〕平面形は確認できた部分で155cm×152cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは59cmである。底面は平坦である。
〔覆土〕7層に分層した。灰黄褐色土を主体とし、全体的に焼土粒及び焼土ブロックを微量含む。
〔出土遺物〕土器70gが出土し、土器1点を図示した。147-19は下層から出土した深鉢の底部片である。単軸絡条体第1類が施される。円筒下層a～b1式に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b1式期以降と考えられる。

（久保）

第96号土坑（SK96）（遺構第56図、遺構写真81）
〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ171グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は127cm×107cmの円形を呈する。確認面からの深さは14cmである。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は平坦である。

〔覆土〕2層に分層した。黒褐色土で、炭化物を多量に含む。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕覆土に炭化物を多量に含むことや、形態がSK14などに類似することから、古代以降の製炭土坑の可能性もある。底面直上から出土した炭化種実の同定の結果、サナエタデ-オオイヌタデが僅かに得られている。

（久保）

第97号土坑(SK97)（遺構第56図、遺物第147図、遺構写真81）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC70グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は118㎝×117㎝の円形を呈する。確認面からの深さは25㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は平坦である。
〔覆土〕4層に分層した。黒褐色土主体である。1層は焼土で、ブロックであることから廃棄されたものと考えられる。床面直上では礫が出土した。
〔出土遺物〕土器25gが出土し、土器1点を図示した。147-20は深鉢の胴部片である。円筒下層a～b2式に比定される。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

（久保）

第98号土坑(SK98)（遺構第56図、遺構写真81）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC71グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は86㎝×74㎝の円形を呈する。確認面からの深さは26㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は平坦である。
〔覆土〕4層に分層した。暗褐色土主体で、2～4層は炭化物を含む。
〔出土遺物〕遺物は出土してない。
〔時期・所見〕覆土に炭化物を多量に含むことことから、古代以降の製炭土坑の可能性もあるが判然としない。

（久保）

第99号土坑(SK99)（遺構第57図、遺物第147図、遺構写真82、遺物写真125）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD・ⅢE70・71グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は254㎝×248㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは130㎝である。底面は平坦である。底面中央及び南西側にピットを各1基確認した。底面からの深さはpit1が51㎝、pit2が39㎝である。
〔覆土〕19層に分層した。暗褐色土で、全体的に焼土粒を含む。17層では炭化物が多量に出土した。19層では礫が数点出土した。
〔出土遺物〕土器175g、石皿1点、異形石器1点などが出土し、土器1点、石器1点を図示した。147-21は下層から出土した深鉢の底部片である。円筒下層a～b2式に比定される。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。147-22はpit2から出土した。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

（久保）

第100号土坑(SK100)（遺構第57図、遺物第148図、遺構写真82、遺物写真125）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢF70・71グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は240cm×220cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは102cmである。底面は平坦である。底面中央にピットを１基確認した。底面からの深さは20cmである。

〔覆土〕５層に分層した。暗褐色土を主体とし、５層では炭化物や小形の礫が多数出土した。

〔出土遺物〕土器125g、敲石１点、凹石３点、石皿１点などが出土し、土器１点、石器３点を図示した。148-1は深鉢の口縁部片である。円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。148-2・4は覆土から、148-3は下層から出土した。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層ａ～ｂ1式期以降と考えられる。

（久保）

第101号土坑(SK101)（遺構第57図、遺物第148図、遺構写真82、遺物写真125）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢⅠ・ⅢJ72・73グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。SK108と重複しており、本遺構が新しい。

〔規模・形態〕平面形は254cm×228cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは140cmである。底面は平坦である。

〔覆土〕22層に分層した。上層では黒褐色土及び暗褐色土、下層では褐色土を主体とする。検出面直下では土器片や小形の礫の散布を確認した。７層上面では焼土ブロックや（５層）、炭化物層（３層）が検出されている。

〔出土遺物〕土器2,950g、石鏃未成品１点、石匙１点、スクレイパー１点、凹石３点、敲石１点、石錘１点、石核１点、二次加工剥片１点などが出土し、土器２点、石器４点、土製品２点を図示した。出土した土器は縄文時代中期末葉前後に比定されるものが大半を占める。掲載遺物は148-9が下層から、他はすべて焼土層上面（２・３層）からの出土である。148-5は深鉢の胴部片である。刻目を伴う隆帯が施される。縄文時代後期初頭に比定される。148-6は大木10式併行に比定される深鉢の胴下半～底部である。底面に網代痕が残る。148-11は土偶である。主文様が刺突である、板状土偶である。148-12はキノコ形土製品である。傘裏にひだは確認できない。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は縄文時代中期末葉（大木10式併行期）～縄文時代後期初頭と考えられる。

（久保）

第103号土坑(SK103)（遺構第55図、遺物第148図、遺構写真83）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC71・72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SK91と重複しており、本遺構が旧い。

〔規模・形態〕平面形は確認できた部分で189cm×120cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは84cmである。底面は平坦である。底面中央に深さ18cmのピットを１基確認した。底面からの深さは19cmである。

〔覆土〕８層に分層した。褐色土主体である。覆土中から礫が出土している。

〔出土遺物〕土器120gが出土し、土器１点を図示した。148-13は円筒下層ａ～ｃ式に比定される深鉢の胴部片である。器面の劣化が著しい。小片であることから、覆土に混入したものと推定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層ａ～ｃ式期以降と考えられる。

（久保）

第104号土坑（SK104）（遺構第57図、遺物第149図、遺構写真83、遺物写真126）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢH・Ⅲ171グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は224㎝×179㎝の楕円形を呈する。確認面からの深さは17㎝である。壁は緩やかに立ち上がり、断面皿状を呈する。底面は平坦である。

〔覆土〕５層に分層した。上層が黒褐色土、下層が暗褐色土で、１・２層ではⅦ層由来のロームブロックを含む。

〔出土遺物〕土器220ｇが出土し、土器１点を図示した。149-1は１層から出土した深鉢の胴～底部である。器壁が薄いことから、縄文時代後期～晩期の可能性がある。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は縄文時代後期～晩期と推測される。

（久保）

第105号土坑（SK105）（遺構第57図、遺物第149図、遺構写真83、遺物写真126）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢG・ⅢH71グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SP790・791・796と重複しており、本遺構が旧い。

〔規模・形態〕平面形は267㎝×236㎝の円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは90㎝、底面は平坦である。底面中央にピットを１基確認した。底面からの深さは22㎝である。

〔覆土〕11層に分層した。暗褐色土及び褐色土主体で、床面直上で土器が出土した。

〔出土遺物〕土器905ｇが出土し、土器１点を図示した。149-2は上層から出土した深鉢の口縁部片である。羽状縄文が施され、頸部には縄文原体が２条押圧される。円筒下層b2～ｃ式に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層b2～ｃ式期以降と考えられる。

（久保）

第106号土坑（SK106）（遺構第58図、遺物第149図、遺構写真83・84、遺物写真126）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢL72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。南側を撹乱により削平される。

〔規模・形態〕平面形は224㎝×220㎝円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは104㎝である。底面は平坦である。底面中央にピットを１基確認した。

〔覆土〕12層に分層した。上層は褐色土、下層は暗褐色土主体で、７層下部では炭化物が薄く面的に広がる。床面直上で土器が潰れた状態で出土した。

〔出土遺物〕土器3,630ｇ、石匙１点、石錐１点、凹石１点、敲石１点などが出土し、土器２点、石器４点を図示した。149-3・4は下層、149-5・7・8は中層、149-6は上層から出土した。149-3、149-4は円筒下層b2～ｃ式に比定される深鉢である。どちらも口縁部に羽状縄文が施される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b2～ｃ式期と考えられる。中層から出土した炭化種実の同定の結果、オニグルミが少量、クリが僅かに得られ、炭化材同定ではクリとミズキが確認されている。

（久保）

第107号土坑（SK107）（遺構第58図、遺物第149図、遺構写真84、遺物写真126）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE71・72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。西側を撹乱より削平される。

〔規模・形態〕平面形は169cm×159cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは82cmである。底面は平坦である。
〔覆土〕9層に分層した。褐色土主体で、全体的に炭化物を含む。
〔出土遺物〕土器20g、スクレイパー1点、半円状扁平打製石器1点などが出土し、土器1点、石器2点を図示した。149-9は深鉢の胴部片である。大木10式併行に比定される。小片であることから、覆土に混入したものと考えられる。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は大木10式併行期以降と考えられる。

(久保)

第108号土坑(SK108)（遺構第57図、遺物第150図、遺構写真84)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢJ72・73グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。SK101と重複しており、本遺構が旧い。
〔規模・形態〕平面形は確認できた部分で165cm×84cmの円形を呈すると考えられるフラスコ状土坑である。確認面からの深さは62cmである。底面は平坦である。
〔覆土〕5層に分層した。褐色土主体である。
〔出土遺物〕土器130gが出土し、土器1点を図示した。150-1は深鉢の胴部片である。円筒下層a～b2式に比定される。小片であることから、覆土に混入したものと考えられる。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の上廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

(久保)

第109号土坑(SK109)（遺構第58図、遺物第150図、遺構写真84)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢN73グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SN35・SP972・SP1014と重複しており、本遺構が旧い。
〔規模・形態〕平面形は147cm×143cmの円形を呈するフラスコ状土坑である。確認面からの深さは45cmである。底面は平坦である。底面中央にピットを1基確認した。底面からの深さは32cmである。
〔覆土〕10層に分層した。褐色土主体で、2層では焼土ブロックを含む。
〔出土遺物〕土器93gが出土し、土器1点を図示した。150-2は5層から出土した深鉢の口縁部片である。円筒下層a～b2式に比定される。小片であることから、覆土に混入したものと考えられる。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

(久保)

第110号土坑(SK110)（遺構第58図、遺物第150図、遺構写真85、遺物写真126)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢM73・74グリッドに位置し、Ⅶ層上面で検出した。なお調査過程で3基の土坑が重複していることを確認したため、SK110a・SK110b・SK110cと区別した。重複関係は、古いほうからSK110a→SK110c→SK110bである。以下、それぞれについて記す。
SK110a
〔規模・形態〕長軸135cm、短軸130cm、検出面からの深さ107cmのフラスコ状土坑である。平面形はほぼ円形を呈し、底面は平坦である。
〔覆土〕17層に分層した。暗褐色土と褐色土が互層になっている。上層は炭化物を多く含み、下層では焼土粒を多量に含む褐色土層が堆積していた。16層はⅦ層土を主体として炭化物が含まれないこ

とから、壁崩落土と推定される。本遺構の堆積状況から、土坑機能停止後に炭化物・焼土を含むⅣ層由来の暗褐色・褐色土によって人為的に埋め戻され(10～17層)、炭化物を多く含む土層が形成された後に人頭大の礫が投げ込まれ、再度人為的に２層まで埋められ、１層が自然堆積したという廃絶過程を想定できる。

[出土遺物]SK110b・cも含めた覆土から土器360g、石匙１点、石錐１点、スクレイパー１点、凹石１点、敲石１点、半円状扁平打製石器１点、二次加工剥片３点などが出土し、土器２点、石器５点を図示した。土器はいずれも小片であり、覆土から出土したことから、覆土に混入したものと考えられる。石器は下層で出土した。本遺構に帰属するか否かは判然としない。150-3は深鉢の口縁部片、150-4は深鉢の頸部片である。150-3は羽状縄文が施される。円筒下層b2～ｃ式に比定される。150-4は指頭圧痕を伴う隆帯が２条施される。円筒下層ａ～b1式に比定される。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層b2～ｃ式期以降と考えられる。

SK110b

[規模・形態]長軸162cm、短軸100cm以上、検出面からの深さ57cmのフラスコ状土坑である。平面形は円形を呈すると考えられ、底面は平坦である。底面中央付近にピットを１基確認した。

[覆土]９層に分層した。暗褐色土を主体とする。中層ではブロック状の覆土がみられる箇所があり、人為堆積と考えられる。

[出土遺物]土器が35g出土しているが、小片のため図示はしていない。出土土器はすべて円筒下層ａ～ｃ式に比定される。

[時期・所見]出土遺物から、本遺構の廃絶時期は円筒下層ａ～ｃ式期以降と考えられる。

SK110c

[規模・形態]長軸142cm、短軸102cm以上、検出面からの深さ53cmのフラスコ状土坑である。平面形はほぼ円形を呈すると考えられ、底面は平坦である。

[覆土]不明。

[出土遺物]土器が35g出土したが、小片のため図示していない。

[時期・所見]重複関係から、本遺構の廃絶時期は円筒下層b2～ｃ式期以降と考えられる。

(中澤)

第111号土坑(SK111)（遺構第58図、遺物第150図、遺構写真85、遺物写真126)

[位置・確認状況・重複関係]ⅢT・ⅢU78・79グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。SI53と重複するが、新旧関係は不明である。

[規模・形態]重複のため掘り込みは北側のみ検出した。検出部分から平面形は径約150cmの円形もしくは楕円形と推定される。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面はⅣ層上面を平坦に仕上げている。検出面からの深さは最深で26cmである。

[覆土]Ⅲ層由来の黒色シルト質土を母材とする黒褐色土である。遺物の出土状況から見て人為的に埋め戻された可能性がある。

[出土遺物]土器５g、石鏃３点、石匙１点、磨製石斧２点などが出土し、石器６点を図示した。150-10～12は石鏃、150-13は石匙、150-14・15は磨製石斧である。土器は小片のため図示していないが、いずれも円筒下層ａ～ｃ式に比定される。石鏃は西側にまとまって、磨製石斧と石匙は東側にまとまっ

て出土した。３点の石鏃は有茎凸基鏃で形状が整っている。出土遺物の種類や出土状況はSK15に近似する。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の上限時期は円筒下層ａ～ｃ式期と考えられる。遺物の出土状況を見る限り土坑墓の可能性が高い。

（茅野）

第112号土坑(SK112)（遺構第58図、遺物第150図、遺構写真85、遺物写真126）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢG65グリッドに位置し、SI32床面で検出した。当初焼土遺構(SN33)として調査をおこなったが、掘り込みが認められたため、整理段階で種別を土坑に変更した。SI32付属施設の可能性もあるが、判然としない。

〔規模・形態〕長軸53㎝、短軸40㎝、検出面からの深さ21㎝で、平面形は不整円形である。底面はほぼ平坦である。壁は底面からやや湾曲しながら立ち上がり、壁面中半部～上部にかけて被熱により赤色化している。底面は平坦となるが、熱を受けていない。

〔覆土〕４層に分層した。４層は３層が被熱により赤色化した焼土層である。各層とも炭化物が比較的多く含まれることから、人為堆積と考えられる。４層は３層を母層とする被熱層であり、３・４層上面以上の壁面にも被熱による赤色化が認められる。３・４層堆積後に土坑内で火を焚かれ、その後に１・２層が堆積したと想定される。

〔出土遺物〕炭化物が上層から中層にかけて多く出土した。下層では壁周辺でみられる。凹石１点、抉入扁平磨製石器１点などが出土し、土器１点、石器２点を図示した。土器はいずれも小片であり、覆土から出土したことから、混入の可能性が考えられる。150-16は大木10式併行に比定される深鉢の口縁部片である。

〔時期・所見〕最も新しい出土土器は中期末葉の破片であるが、形状がSK14などに類似すること、覆土から出土した炭化種実の同定の結果、アワが検出されており、土坑内が被熱していることから古代の製炭土坑と考えられる。ほかにもクワ属、クリ、オニグルミ、ニワトコ、ヒエ属が得られている。

（中澤）

4　焼土遺構

焼土遺構は18基検出した。時期が特定できないものが多い。

第１号焼土遺構(SN1)（遺構第59図、遺構写真86）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣI84グリッドに位置し、Ⅲ層で確認した。

〔平面形・規模・覆土〕規模は長軸99㎝、短軸51㎝の不整形を呈し、深さ13㎝まで被熱による赤色化がみられる。火床面は褐色を呈する。

〔出土遺物・時期・所見〕土器が50g出土しているが、小片のため図化はしていない。Ⅲ層に形成されることから時期は縄文時代の可能性が高い。

（中澤）

第２号焼土遺構(SN2)（遺構第59図）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢX75グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。

〔規模・形態〕平面形は88cm×80cmの歪な円形を呈する。深さ14cmまで被熱による赤色化がみられる。火床面は褐色を呈する。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。Ⅲ層に形成されることから時期は縄文時代の可能性が高い。

（久保）

第３号焼土遺構(SN3)（遺構第59図）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢY75グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は24cm×21cmの不定形を呈する。深さ７cmまで被熱による赤色化がみられる。火床面は褐色を呈する。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（久保）

第４号焼土遺構(SN4)（遺構第59図）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC66グリッドに位置し、Ⅴ層で確認した。
〔規模・形態〕規模は長軸47cm、短軸36cmの不整形を呈し、深さ19cmまで被熱による赤色化がみられる。平面不整形を呈する。火床面は褐色から暗褐色を呈する。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（中澤）

第８号焼土遺構(SN8)（遺構第59図、遺構写真86）
〔覆土〕ⅢC66グリッドに位置し、Ⅴ層で確認した。
〔規模・形態〕規模は長軸88cm、短軸53cmの不整形を呈し、深さ９cmまで被熱による赤色化がみられる。火床面はにぶい黄褐色を呈する。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（中澤）

第11号焼土遺構(SN11)（遺構第59図、遺構写真86）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢP73グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸166cm、短軸104cmの不整形である。北側を中心に焼土化しており、確認面からの被熱の厚さは最大で15cmである。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。周囲には柱穴が多数存在するが、本遺構との関係は定かではない。

（岩井）

第12号焼土遺構(SN12)（遺構第59図、遺構写真86）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢP73グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸77cm、短軸55cmの不整形である。南西側を中心に焼土化しており、確認面からの被熱の厚さは最大で10cmである。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。周囲には柱穴が多数存在するが、本遺構との関係は定かではない。

（岩井）

第13号焼土遺構(SN13)（遺構第59図、遺構写真86）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢP74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸57cm、短軸54cmの不整形である。中央やや東側が最も強く焼土化しており、確認面からの被熱の厚さは最大で6cmである。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。周囲には柱穴が多数存在するが、本遺構との関係は定かではない。

（岩井）

第14号焼土遺構(SN14)（遺構第59図、遺構写真87）
〔位置・確認状況・重複関係〕Ⅲ0・ⅢP73・74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸156cm、短軸115cmの不整形である。被熱状況は極めて弱い。確認面からの被熱の厚さは最大で5cmである。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。周囲には柱穴が多数存在するが、本遺構との関係は定かではない。

（岩井）

第15号焼土遺構(SN15)（遺構第59図）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢP71グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸30cm、短軸21cmの不整形である。被熱状況は極めて弱い。確認面からの被熱の厚さは最大で5cmである。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。周囲には柱穴が多数存在するが、本遺構との関係は定かではない。

（岩井）

第16号焼土遺構(SN16)（遺構第59図、遺物第151図、遺構写真87、遺物写真126）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢU76グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸90cm、短軸58cmの不整形である。検出面からの被熱の厚さは12cmに及ぶ。
〔出土遺物〕焼土北側で151-1が出土した。本遺構との関係は定かではない。深鉢の口縁部から胴部であり、結節回転文と縦走する縄文が交互に施される。円筒下層ａ～ｂ1式に比定される。
〔時期・所見〕確認層位がⅢ層中であることから、縄文時代前期以前の焼土遺構である可能性が高い。焼土の厚さを見る限り、SI22の床面検出焼土と状況がよく似ている。

（茅野）

第19号焼土遺構(SN19)（遺構第59図、遺構写真87）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢT75グリッドに位置する。SI22精査中にⅢ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸56cm、短軸34cmの不整形である。検出面からの被熱の厚さは5cmに及ぶ。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕検出状況からSI22より新しいのは確実であるため、縄文時代前期中葉以降と考えられる。

（茅野）

第21号焼土遺構(SN21)（遺構第59図、遺構写真87）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢL68・69グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。

〔規模・形態〕立石炉である。立石は２個検出したが、抜け跡が１基検出されたことから、本来は３個の礫が配されていたものと復元される。礫は扁平面を焼土側に向け、南北に長軸を据えて縦列配置される。焼土は立石の西側に形成される。被熱状況は弱い。立石には接せず、立石にも被熱痕跡は認められない。立石はそれぞれ掘方を伴う。１層は焼土、２層は立石の裏込土である。
〔出土遺物・時期・所見〕本遺構に伴う柱穴や竪穴は検出されなかった。縄文時代中期末葉～後期初頭に比定される土器が出土していることから、時期は縄文時代中期末葉～後期初頭と考えられる。

（岩井）

第22号焼土遺構（SN22）（遺構第59図、遺構写真88）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK69グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸73㎝、短軸53㎝の不整形である。中心が強く被熱する。確認面からの被熱の厚さは最大で５㎝である。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。周囲には柱穴が複数存在するが、本遺構との関係は定かではない。

（岩井）

第24号焼土遺構（SN24）（遺構第59図、遺構写真88）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸97㎝、短軸69㎝の不整形である。確認面からの被熱の厚さは最大で10㎝である。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。周囲には柱穴が多数存在するが、本遺構との関係は定かではない。

（岩井）

第26号焼土遺構（SN26）（遺構第59図）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢN78グリッドに位置する。Ⅲ層中で確認した。
〔規模・形態〕平面形は長軸44㎝、短軸40㎝の不整形である。検出面からの被熱の厚さは７㎝に及ぶ。
〔出土遺物〕遺物は出土していない。
〔時期・所見〕Ⅲ層中で検出したため、縄文時代前期以降の可能性が高い。

（茅野）

第32号焼土遺構（SN32）（遺構第59図、遺構写真88）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢI74グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。
〔規模・形態〕平面形は57㎝×48㎝の不整楕円形である。被熱は深さ10㎝程度に及ぶ。被熱状況は弱く、褐色を呈する。
〔出土遺物・時期・所見〕遺物は出土しておらず、時期は不明である。

（久保）

第35号焼土遺構（SN35）（遺構第59図）
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢD64グリッドに位置する。SK109と重複しており、本遺構が新しい。
〔規模・形態〕平面形は77㎝×70㎝の不定形を呈する。深さ６㎝まで被熱による赤色化がみられる。火床面はにぶい赤褐色を呈する。

〔出土遺物・時期・所見〕重複関係から、円筒下層a～b2式期以降と考えられる。

（久保）

5　土器埋設遺構

土器埋設遺構は14基検出した。縄文時代前期（円筒下層ａ～ｃ式期）８基、縄文時代中期（大木10式併行期）６基である。そのうち１基(SR12)は建物に伴う土器埋設遺構と考えられる。また、本遺跡の縄文時代中期末葉の竪穴建物跡では土器埋設遺構が伴う例があることから、竪穴建物跡に近接する土器埋設遺構は竪穴建物に伴う可能性もある。

第２号土器埋設遺構(SR2)（遺構第60図、遺物第151図、遺構写真89、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢQ75グリッドに位置する。Ⅳ～Ⅴ層で確認した。SK19と重複し、本遺構が新しい。SI20とも重複する可能性があり、出土土器から本遺構が新しいと推定される。

〔規模・形態〕埋設土器は口縁部が欠損する深鉢である。正位に埋設される。掘方は径45㎝の円形で、検出面からの深さは最深で24㎝である。

〔覆土〕４層に分層した。１・２層は土器内覆土、３・４層は裏込め土である。覆土２層はほぼ砂である。遺跡内にこのような砂が採取できる場所が無いためどこからか持ってこられたものと考えられる。土器外部の３層にも砂が混じるため、本来この砂はもっと上位に堆積していたものが何らかの状況で土器底部まで落ちたと考えられる。土器外の砂は土器を埋設した際に上方から入り込んだ可能性が高い。２層は現場段階で砂以外のものが混じっていないか現場段階で精査したが全て砂であった。

〔出土遺物〕151-2は埋設土器である。調査時点では胴部から底部が連続して出土したが、整理段階では、底部と胴部を接合することはできなかった。胴部には単軸絡条体第１類が縦横に施文される。円筒下層b1～b2式に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物と状況から、本遺構の帰属時期は円筒下層b1～b2式期の土器埋設遺構と考えられる。埋設当初は２層の部分に何かが安置されていたが、その後腐朽し砂とその上位層が土器内に下がったものと考えられる。何かとは遺体を想定するが想像の域を出ない。

（茅野）

第６号土器埋設遺構(SR6)（遺構第60図、遺物第151図、遺構写真89、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢK74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。SP1046より旧く、SK78、SP547より新しい。

〔規模・形態〕掘り込みの平面形は北東側がSP1046に掘り込まれ消失するものの、残存部分から40㎝×35㎝の楕円形と推定される。壁はほぼ垂直もしくはややオーバーハングする。底面は丸みを帯びる。確認面からの深さは25㎝である。

埋設土器は深鉢で、斜位に埋設される。ほぼ完形であるが、SP1046と重複する部分の口縁部は欠損する。SP1046覆土からは、本埋設土器の土器片が出土している。なお土器は劣化が著しく、完形に復元するのは不可能であった。

〔覆土〕１・２層は埋設土器の覆土である。３・４層は裏込土であり、地山由来土である。

〔出土遺物〕埋設土器(151-3)のみが出土した。円筒下層b1～b2式に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b1～b2式期と考えられる。

（岩井）

第10号土器埋設遺構(SR10)（遺構第60図、遺物第152図、遺構写真90、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣA82グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。

〔規模・形態・覆土〕Ⅲ・Ⅴ層を掘り込み、正位に埋設されていた。埋設土器は掘り込み底面に接せず、底面より5cm程度上位に埋設される。土器の上半は遺存しておらず、底部は一部遺存している。掘り込み形状は確認できなかった。土器内部と掘方には黒褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕152-1は深鉢の胴部である。大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

（久保）

第11号土器埋設遺構(SR11)（遺構第60図、遺物第151図、遺構写真90）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅣA82グリッドに位置する。Ⅲ層で確認した。SP251と重複しており、本遺構が新しい。

〔規模・形態・覆土〕Ⅲ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の底部のみが遺存しており、土器内部と掘方には黄褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕151-4は深鉢の底部である。結節回転文が底部直上に横位に施文される。円筒下層b1～b2式に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層a～b1式期と考えられる。

（久保）

第12号土器埋設遺構(SR12)（遺構第60図、遺物第152図、遺構写真90、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅡY63グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。SI19の範囲内に位置する。

〔埋設方法・掘方・覆土〕Ⅳ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器内部と掘方には黒褐色土が堆積しており、底部では褐色土がみられた。土器の上には石皿が伏せた状態で確認された。

〔出土遺物〕152-2は深鉢の胴部から底部である。縄文が施され、底面には磨り消されているが網代痕がわずかに確認できる。大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕SI19の埋甕の可能性が高い(SI19の項参照)。出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

（久保）

第17号土器埋設遺構(SR17)（遺構第60図、遺物第152図、遺構写真90、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE64グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。

〔規模・形態・覆土〕Ⅳ・Ⅵ層を掘り込み、正位に埋設されていた。確認面で152-5が内側、152-4が外側に重なり合っており、この2個体は同一個体ではないことから、入れ子状に埋設されていた可能性がある。土器の上半は遺存しておらず、土器内部と掘方には黒褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕152-5は深鉢の胴部から底部である。単軸絡条体第1類が施され、底面には網代痕が残る。152-4は深鉢の口縁部片である。縄文が施される。どちらも大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。本遺構はSI33の範囲内に位置する可能性が高く、本遺跡の縄文時代中期末葉の建物では土器埋設遺構を伴う例が多く見

受けられることから、SI33に伴う可能性もある。

（久保）

第18号土器埋設遺構（SR18）（遺構第60図、遺物第152図、遺構写真91、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE64グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。SI33pit5より新しい。

〔規模・形態・覆土〕Ⅳ・Ⅴ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の口縁部は遺存しておらず、遺構上面が近代以降の削平を受けていたことから、その際に壊された可能性がある。土器内部と掘方には黒褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕152-7は壺の胴部から底部である。縄文が施され、底面には網代痕が残存する。大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。本遺構はSI33の範囲内に位置する。本遺跡の縄文時代中期末葉の建物では土器埋設遺構を伴う例が多く見受けられることから、SI33に伴う可能性がある。

（久保）

第19号土器埋設遺構（SR19）（遺構第60図、遺物第152図、遺構写真91、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢG69に位置する。Ⅳ層で確認した。

〔規模・形態・覆土〕Ⅳ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の上半は遺存しておらず、土器内部と掘方には暗褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕152-8は深鉢の底部である。単軸絡条体第1類が施文される。円筒下層b1～b2式に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b1～b2式期と考えられる。

（久保）

第22号土器埋設遺構（SR22）（遺構第60図、遺物第153図、遺構写真91、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢC74グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態・覆土〕Ⅶ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の遺存状態が悪く、胴部のみの出土である。掘り込みには暗褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕153-1は深鉢の胴部である。縄文が施される。大木10式併行に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

（久保）

第23号土器埋設遺構（SR23）（遺構第60図、遺構写真91）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢB72グリッドに位置する。Ⅶ層で確認した。

〔規模・形態・覆土〕Ⅶ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の上半は遺存しておらず、土器内部と掘方には暗褐色土が堆積していた。

〔出土遺物〕土器の磨滅が著しく、復元することはできなかった。土器は円筒下層a～c式に比定される。

〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層a～c式期と考えられる。

（久保）

第24号土器埋設遺構（SR24）（遺構第60図、遺物第153図、遺構写真92、遺物写真127）

〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE76グリッドに位置する。Ⅳ層で確認した。

〔規模・形態・覆土〕Ⅳ層・Ⅴ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の上半は遺存しておらず、土器内部と掘方には黒褐色土が堆積していた。口縁部がⅢ層で出土していることから、土器の上半を割り取った後、下半は埋設し、上半は廃棄した可能性もあるが判然としない。
〔出土遺物〕153-2は土器の口縁部と底部である。接合はしない。円筒下層ａ式に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層ａ式期と考えられる。

(久保)

第25号土器埋設遺構(SR25)（遺構第60図、遺物第153図、遺構写真92)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢE74グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。
〔規模・形態・覆土〕Ⅵ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の上半は遺存しておらず、土器内部と掘方には黒褐色土が堆積していた。
〔出土遺物〕153-3は深鉢の胴部片と底部である。接合はできなかった。器面の磨滅が著しい。円筒下層ａ～ｂ2式に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層ａ～ｂ2式期と考えられる。

(久保)

第26号土器埋設遺構(SR26)（遺構第60図、遺物第154図、遺構写真92、遺物写真128)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢF 76グリッドに位置する。Ⅵ層で確認した。SI37と重複するが新旧関係は不明である。
〔規模・形態・覆土〕Ⅵ層を掘り込み、正位に埋設されていた。土器の上半は遺存しておらず、土器内部と掘方には黒褐色土が堆積していた。
〔出土遺物〕154-1は深鉢の胴部である。地文縄文に沈線文が施される。大木10式併行に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は大木10式併行期と考えられる。

(久保)

第27号土器埋設遺構(SR27)（遺構第60図、遺物第153図、遺構写真92、遺物写真128)
〔位置・確認状況・重複関係〕ⅢX80グリッドに位置する。SI13精査中に覆土中で確認した。SI13と重複し、本遺構が新しい。調査時はSI13-SRとして調査を行ったが、整理段階でSR27に振り替えた。
〔規模・形態〕埋設土器は円筒下層b2式土器の完形の深鉢である。逆位に埋設され、南側にやや傾く。掘方は径約10cmの円形である。
〔覆土〕３層に分層した。２・３層は土器内覆土、１層は裏込土である。土器内部には上部からの土が流入していた。
〔出土遺物〕153-4は埋設土器である。口縁部から胴部上位には羽状縄文が施され、頸部には２条の低い隆帯が巡る。円筒下層b2式に比定される。
〔時期・所見〕出土遺物から、本遺構の帰属時期は円筒下層b2式期と考えられる。なお、２層から出土した炭化材の同定の結果、クリが確認されている。

(芽野)

6　ピット

ピットは約1000基検出した。主に尾根上に位置する。これらのピットのなかには、整理段階で建物に伴うと判断されたものもある。単層のものが多く性格の特定に至らないピットも多いが、縄文時代中期末葉～後期初頭の掘立柱建物(SB1・2)付近で検出されたピットには、掘立柱建物を構成する柱穴と同形態のピットや、柱痕跡が確認できたピットも存在する。このことから、これらのピットの中には、掘立柱建物となる柱穴が含まれている可能性がある。また、縄文時代前期中葉には尾根上を地山まで削平しており(第３章第３節７参照)、それ以前に竪穴建物が存在していたとすれば、削平された竪穴建物の柱穴のみが残っている可能性も考えられる。溝さや出土遺物などについては、第７表に記載した。なお、出土遺物は次のとおり略記した。縄文前期土器：縄前土、縄文中期土器：縄中土、縄文土器：縄土。特徴的な遺物については第154～158図に図示し、写真128・129に掲載した。

(岩井)